藤崎遺跡 9

— 藤崎遺跡第22・23次調査 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第376集

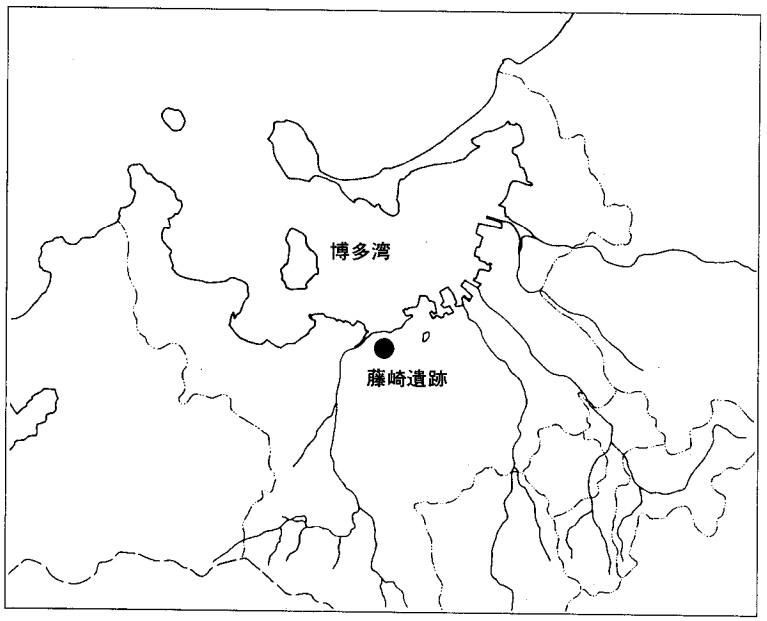
1994

福岡市教育委員会

藤崎遺跡 9

— 藤崎遺跡第22・23次調査 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第376集



1994

福岡市教育委員会

序

藤崎遺跡の所在する福岡市早良区の藤崎・百道・高取地区は福岡市の副都心として地下鉄の開通以来、周辺開発が進んでおり、これに伴う埋蔵文化財の調査もすでに20次を越えています。

藤崎遺跡はとくに弥生時代から古墳時代初頭の一大墓地群として著名ですが、今回報告いたします22次・23次調査はこの墓地群の一画と、最近徐々に分かりつつある砂丘南側後背斜面の調査にあたります。

本書はこれらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助となり、また学術研究においても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、調査に際して地権者の皆様をはじめ、多くの方々のご協力を賜りましたことに対し、心より感謝の意を表する次第です。

平成6年3月31日

福岡市教育委員会

教育長　尾　花　　剛

れいげん

1．本書は福岡市教育委員会が福岡市早良区藤崎・高取におけるテナントビル及び共同住宅建設に先立って緊急発掘調査した藤崎遺跡の発掘調査報告書である。
2．本書には第22次調査、第23次調査及び付論を収録する。
3．本書に使用した方位はすべて磁北方位であり、真北からの偏差は西偏6°21′である。
4．遺構は呼称を記号化し、甕棺墓をST、土坑墓をSR、土坑をSK、溝をSD、井戸跡をSE、方形周溝墓をSO、ピットはSPとした。
5．本書に掲載した遺構の実測・製図は第22次調査を小林義彦・大塚紀宜・尾園晃が行い、第23次調査を中村啓太郎・岡崇が行った。
6．遺物の整理実測・製図は第22次調査を小林・大塚が行ったが、中～近世の陶器は山村信栄（太宰府市教育委員会）が行い、第23次調査を中村・古川千賀子（福岡大学大学院生）が行った。
7．本書に掲載した写真は遺構・遺物ともに第22次調査を小林が、第23次調査を中村が撮影した。
8．本書の執筆は各担当者が行い、編集は中村が行った。

本文目次

序
Ⅰ．はじめに …… 1
　1．発掘調査にいたるまで …… 1
　2．発掘調査の組織 …… 1
Ⅱ．立地と歴史的環境 …… 2
　1．立地と歴史的環境 …… 2
　2．これまでの調査 …… 4
Ⅲ．第22次調査 …… 7
　1．調査の概要 …… 8
　2．調査の記録 …… 8
　　1）第１面の調査 …… 8
　　井戸跡 …… 8
　　土坑 …… 8
　　石組遺構 …… 10
　　溝 …… 10
　　2）第２面の調査 …… 11
　　甕棺墓 …… 11
　　土壙墓 …… 23
　　土坑 …… 23
　　方形周溝墓 …… 25
　　3）包含層の遺物 …… 27
　3．小結 …… 34
Ⅳ．第23次調査 …… 35
　1．調査の概要 …… 35
　2．調査の記録 …… 37
　　溝 …… 37
　　土坑 …… 38
　　出土遺物 …… 40
　3．小結 …… 42
付　論　『藤崎遺跡第20次調査地点の地形と地質』　磯望・下山正一 …… 43

挿図目次

Fig. 1. 周辺遺跡分布図（1/50000）…… 3
Fig. 2. 藤崎遺跡位置図（1/3000）…… 5
Fig. 3. 調査区一覧表…… 6
Fig. 4. 第22次調査区周辺現況図（1/500）…… 7
Fig. 5. 第1面遺構配置図（1/150）…… 8
Fig. 6. 106・107・109号土坑実測図（1/30）…… 9
Fig. 7. 106・107号土坑・108号井戸跡出土土器実測図（1/4）……10
Fig. 8. 103号石組遺構実測図（1/30）……10
Fig. 9. 第1面遺構出土土錘実測図（1/3）……10
Fig. 10. 第2面遺構配置図（1/150）……11
Fig. 11. 201・202号甕棺墓実測図（1/30）……12
Fig. 12. 203・204・206・207号甕棺墓実測図（1/30）……13
Fig. 13. 201・204・206・207号甕棺実測図（1/6）……14
Fig. 14. 202・203号甕棺実測図（1/12）……15
Fig. 15. 210～215号甕棺墓実測図（1/30）……16
Fig. 16. 210～213号甕棺実測図（1/6）……17
Fig. 17. 216～220号甕棺墓実測図（1/30）……19
Fig. 18. 214・215・218・220号甕棺実測図（1/6）……20
Fig. 19. 217・219号甕棺実測図（1/12）……21
Fig. 20. 217号甕棺墓副葬遺物実測図（2/5）……22
Fig. 21. 205号土壙墓実測図（1/30）……22
Fig. 22. 208号土坑実測図（1/30）……23
Fig. 23. 222～224号土坑実測図（1/40）……24
Fig. 24. 230号方形周溝墓実測図（1/150）……25
Fig. 25. 230号方形周溝墓（SD-209）出土土器実測図1（1/4）……26
Fig. 26. 230号方形周溝墓（SD-221）出土土器実測図2（1/4）……27
Fig. 27. 第2面遺構出土土錘実測図（1/3）……27
Fig. 28. 包含層出土土器実測図1（1/4）……28
Fig. 29. 包含層出土土器実測図2（1/4）……29
Fig. 30. 包含層出土土器実測図3（1/4）……30
Fig. 31. 包含層出土土製品実測図（1/2）……31
Fig. 32. 包含層出土土錘・石錘実測図（1/3）……32
Fig. 33. 包含層出土玉実測図（1/1）……33
Fig. 34. 包含層出土銅銭拓影（2/3）……33
Fig. 35. 土錘一覧表……34
Fig. 36. 第23次調査区周辺現況図（1/400）……35
Fig. 37. 第23次調査区遺構配置図（1/150）……36
Fig. 38. 10号溝実測図（1/60）……37
Fig. 39. 10号溝出土土器実測図（1/3）……37
Fig. 40. 1号土坑実測図（1/30）……38
Fig. 41. 2～5号土坑実測図（1/30）……39
Fig. 42. 出土土器実測図①（1/30）……40
Fig. 43. 出土土器実測図②（1/3）……41

図版目次

PL. 1. 遺跡周辺航空写真
PL. 2. (1).調査区北側第1面全景(東より)　(2).調査区南側第1面全景(東より)
PL. 3. (1).101号井戸跡(東より)　(2).103号石組遺構(東より)
(3).102号溝(東より)
PL. 4. (1).106号土坑(東より)　(2).107号土坑(東より)
(3).109号土坑(北より)
PL. 5. (1).調査区北側第2面全景(東より)　(2).調査区南側第2面全景(東より)
PL. 6. (1).201・202号甕棺墓(西より)　(2).201号甕棺墓(北より)
(3).202号甕棺墓(東より)
PL. 7. (1).202号甕棺墓人骨検出状況(東より)　(2).203号甕棺墓(東より)
(3).203号甕棺墓人骨検出状況(東より)
PL. 8. (1).204号甕棺墓(西より)　(2).206号甕棺墓(西より)
(3).206号甕棺墓人骨検出状況(西より)
PL. 9. (1).207号甕棺墓(北より)　(2).210～213・215～220号甕棺墓群(北より)
(3).215～220号甕棺墓群(東より)
PL.10. (1).210～212号甕棺墓群(南より)　(2).210・212号甕棺墓(南より)
(3).211号甕棺墓(西より)
PL.11. (1).213号甕棺墓(西より)　(2).214号甕棺墓(南より)
(3).215・218号甕棺墓(東より)
PL.12. (1).217号甕棺墓(東より)　(2).219号甕棺墓(西より)
(3).220号甕棺墓(東より)
PL.13. (1).205号土壙墓(西より)　(2).208号土坑(南より)
(3).222・223号土坑(西より)
PL.14. (1).209号溝(東より)　(2).221号溝(東より)
(3).221号溝西壁土層断面(東より)
PL.15. 出土甕棺
PL.16. 出土甕棺
PL.17. 出土土器、土錘
PL.18. (1).調査区東側上面　(2).調査区東側下面
PL.19. (1).調査区西側上面　(2).調査区西側下面
(3). 1号土坑　(4). 3号土坑
PL.20. 出土遺物

	遺跡略号	遺跡調査番号
第22次調査	FUA-22	9223
第23次調査	FUA-23	9244

Ⅰ　はじめに

1.　調査にいたるまで

第22次調査

1992年1月22日、石橋誠一氏より、埋蔵文化財事前審査願いが提出され同年3月3日に試堀調査を行った結果、遺構を2面検出した。その成果をもとに協議を重ね、現状での保存、設計変更が困難ということになり、記録保存のための発掘調査を行うこととなった。

第23次調査

1992年3月9日、由宇宏貴氏より、埋蔵文化財事前審査願いが提出され、同年9月16日に試堀調査を行った結果、土坑、溝等を検出した。その成果をもとに協議を重ね、記録保存のための発掘調査を行うこととなった。

なお、両調査にあたり、地権者である石橋誠一氏、由宇宏貴氏をはじめ、各工事関係者の方々には多大なご協力をいただいた。記して感謝いたします。

2.　発掘調査の組織

第22次調査

調査委託　石橋誠一

調査主体　福岡市教育委員会

調査総括　埋蔵文化財課課長折尾学　第1係長飛高憲雄（前任）横山邦継（現任）

庶務担当　中山昭則　吉田麻由美

調査担当　小林義彦

調　査　員　大塚紀宜(九州大学大学院)　尾園晃(現桂川町教育委員会)　藤村佳公恵

調査・整理　百武義隆　大瀬良清子　金子由利子　坂田美佐子　柴田常人　柴田タツ子　土斐崎孝子　八丁由香　馬場イツ子　堀ウメ子　松本藤子　三栗野明美　村嶋里子　村田悦子　門司弘子　矢川みどり

第23次調査

調査委託　由宇宏貴

調査主体　福岡市教育委員会

調査総括　埋蔵文化財課課長折尾学　第1係長飛高憲雄（前任）横山邦継（現任）

庶務担当　中山昭則　吉田麻由美

調査担当　中村啓太郎

調査・整理　岡崇　甲斐正耕　西畑盛行　佐藤テル子　西尾タツヨ　緒方マサヨ　柴田勝子　土斐崎初栄　平井和子　矢川みどり

II　立地と歴史的環境

1.　立地と歴史的環境

藤崎遺跡は、福岡市早良区藤崎・高取・百道に所在する東西400m、南北650mの弥生時代から中世を中心とする複合遺跡群である。1977年の福岡市高速鉄道工事に伴っての１次調査以来、現在まで既に20次を越える調査が行われている。かつては、北部の藤崎Ｂ遺跡と南部の藤崎Ａ遺跡に分けられていたが、最近の調査成果により両遺跡は一連の遺跡として考えられている。

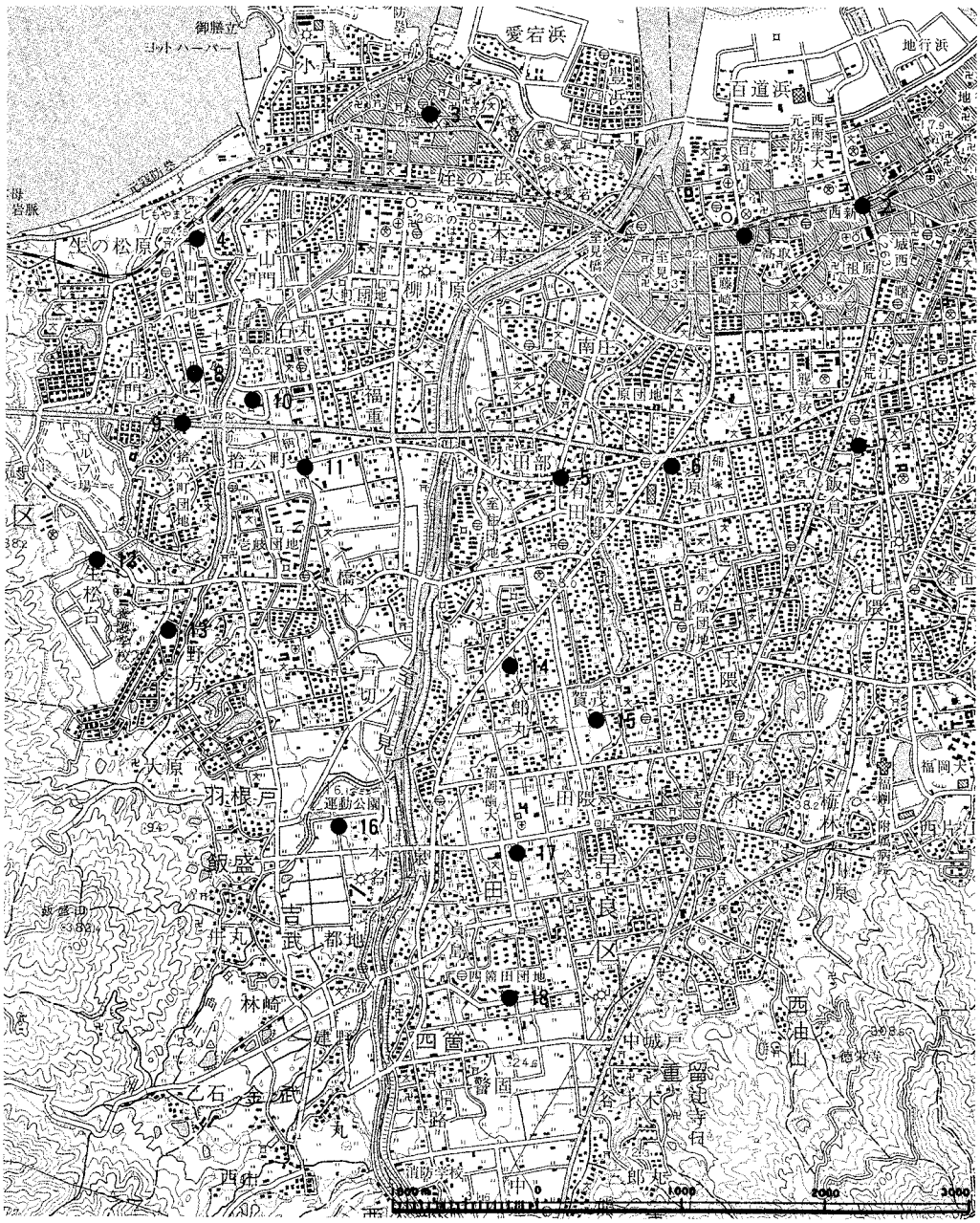
当該遺跡は早良平野の東北端に位置し、博多湾の左回転流によってできた砂州上に形成された標高５～６ｍ前後の砂丘上（縄文晩期以降に形成されたと考えられている）とその南側後背斜面に立地している。遺跡の背後には第３紀の独立丘陵である皿山（標高29m）・鹿原山（標高32m）等が連なり、これらの南側には後背の低地が広がっている。

周辺の遺跡、特に早良平野についてみてみると、藤崎遺跡のすぐ東500mに同一砂丘に立地する西新町遺跡がある。弥生時代中期から終末期の甕棺墓30基、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての住居跡57軒を検出している。このうち甕棺墓からは、第１号甕棺墓よりガラス製小玉、第10号甕棺墓よりゴホウラ製貝輪、第19号甕棺墓より銅剣の切先が出土している。また古墳時代初頭の竪穴住居跡には作り付けのかまどを有したものがあり、かまどの初現を示すものと考えられている。

次に西をみると、姪浜遺跡群がある。室見川の西側の砂丘上に立地し、甕棺墓群が検出され、棺外副葬の可能性がある石剣が出土している。その西をみると、多数の木器や祭祀遺物、製鉄遺構を検出した下山門遺跡がある。

南をみると、室見川東岸では有田遺跡群、原遺跡群等がある。有田遺跡群は標高15m前後の独立中位段丘上に立地する旧石器時代から近世までの複合遺跡であり、弥生時代から古墳時代まで継続的に集落が営まれ、環濠、甕棺墓群等が検出されており早良平野の拠点集落のひとつとして位置付けられている。室見川西側では、弥生時代後期の環濠集落である野方遺跡をはじめ広石遺跡群、湯納遺跡、十郎川遺跡、拾六町ツイジ遺跡等がある。

さらに南には早良平野の拠点集落のひとつと考えられる吉武遺跡群、免遺跡群、次郎丸遺跡群、縄文時代早期から近世までの複合遺跡である田村遺跡群、四箇遺跡群等その他多数の遺跡が存在する。



1．藤崎遺跡　2．西新町遺跡　3．姪浜遺跡群　4．下山門遺跡　5．有田遺跡群　6．原遺跡群
7．飯倉遺跡　8．拾六町ツイジ遺跡　9．湯納遺跡　10．十郎川遺跡　11．橋本一丁田遺跡　12．広石遺跡群
13．野方遺跡　14．次郎丸遺跡群　15．免遺跡群　16．吉武遺跡群　17．田村遺跡群　18．四箇遺跡群

Fig. 1　周辺遺跡分布図（1/50,000）

2.　これまでの調査

第１次調査　弥生時代前～終末の墳墓群、弥生時代終末～古墳時代前期の住居跡12軒、溝状遺構、柱穴を検出した。

第２次調査　弥生時代前～後期の甕棺墓60基、石棺墓２基、土壙墓９基、方形周溝墓１基を検出した。

第３次調査　古墳時代前期の方形周溝墓９基、古墳～奈良時代の住居跡７軒等を検出した。６号方形周溝墓から三角縁二神二車馬鏡等の副葬品が出土している。

第４次調査　古墳時代前期の甕棺墓２基を検出した。方形周溝墓には小型仿製鏡が副葬されていた。

第５次調査　弥生時代前期の甕棺墓２基、石蓋土壙墓？１基を検出した。

第６次調査　甕棺墓５基を検出した。

第７次調査　弥生時代中期～後期の甕棺墓19基、土坑12基を検出した。

第８次調査　弥生時代の甕棺墓２基、溝１条、中世の溝１条を検出した。

第９次調査　弥生時代の方形周溝墓１基、古墳時代の住居跡３軒、中世の溝４条、土坑52基を検出した。

第10次調査　弥生時代の甕棺墓６基、弥生時代～古墳時代の土坑６基、古墳時代の方形周溝墓１基等を検出した。

第11次調査　弥生時代の甕棺墓４基、溝１条、古墳時代の溝１条等を検出した。

第12次調査　弥生時代後期の甕棺墓１基、中世の溝、土坑、井戸を検出した。

第13次調査　弥生時代前～後期甕棺墓31基、箱式石棺墓１基、方形周溝墓１基、中世の溝、井戸等を検出した。

第14次調査　中世の溝と井戸を検出した。

第15次調査　弥生時代の箱式石棺墓、古墳時代の竪穴住居跡、古代～中世の溝を検出した。

第16次調査　古墳時代の土坑、柱穴、中世の溝を検出した。

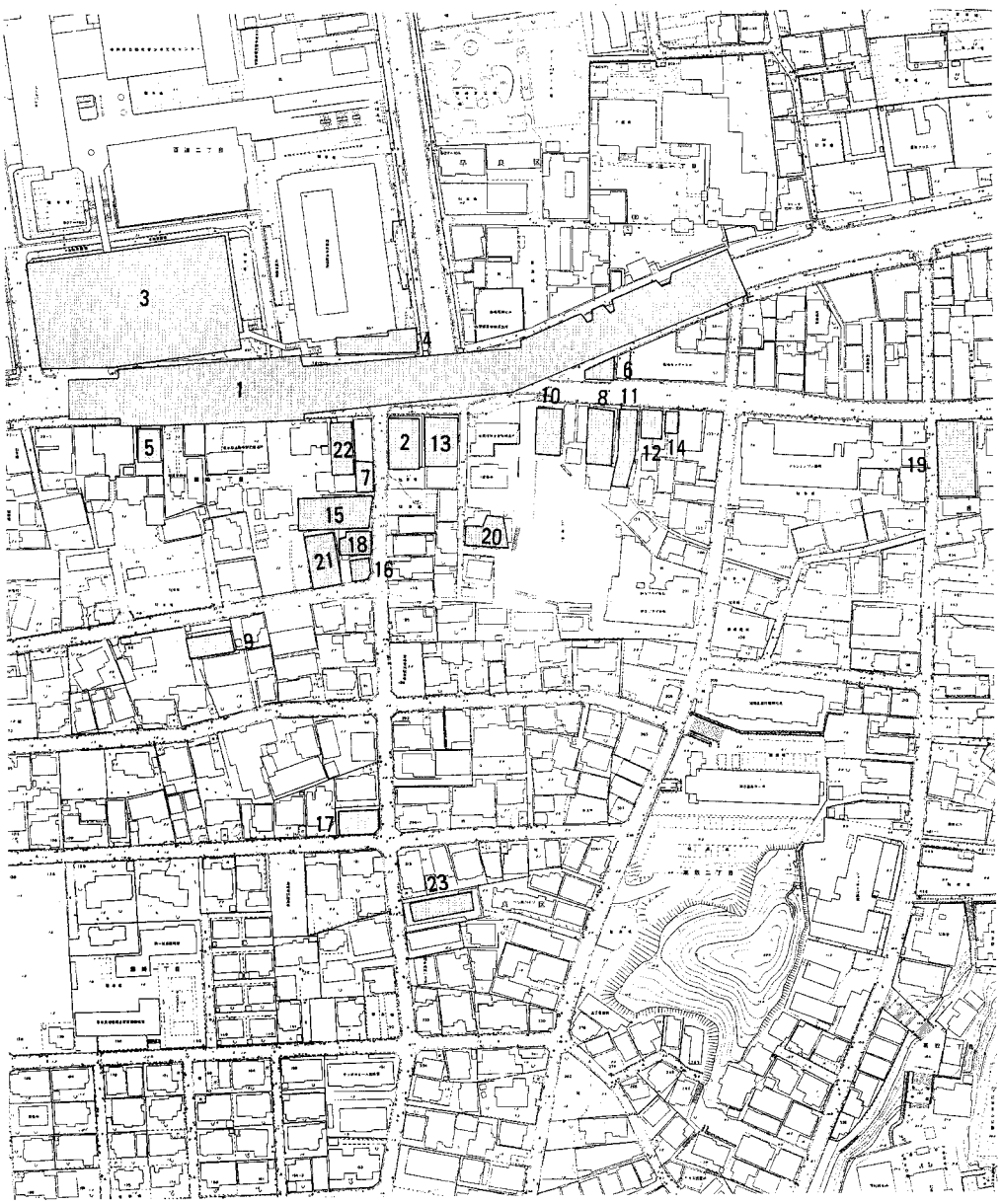
第17次調査　古墳時代後期の炉跡５基、中世の堀立柱建物、井戸を検出した。

第18次調査　古墳時代後期～中世の溝、土坑、堀立柱建物を検出した。

第19次調査　古墳時代後期の土坑、溝、中世の溝、近世の土坑、溝、ピット群を検出した。

第20次調査　古墳時代後期の土坑、溝、平安時代末～鎌倉時代の井戸、溝、近代の土坑、溝を検出した。

第21次調査　古墳時代後期～奈良時代の竪穴住居跡、堀立柱建物、古代～中世の溝、土坑等を検出した。



1．第1次調査区　2．第2次調査区　3．第3次調査区　4．第4次調査区　5．第5次調査区
6．第6次調査区　7．第7次調査区　8．第8次調査区　9．第9次調査区　10．第10次調査区
11．第11次調査区　12．第12次調査区　13．第13次調査区　14．第14次調査区　15．第15次調査区
16．第16次調査区　17．第17次調査区　18．第18次調査区　19．第19次調査区　20．第20次調査区
21．第21次調査区　22．第22次調査区　23．第23次調査区

Fig. 2　藤崎遺跡調査区（1/3,000）

地点名 調査次数	旧地点名	所在地	面積	調査期間	事業名	時代	遺構	報告書	備考
第1地点	第1地点	福岡市早良区藤崎1丁目14		明治45年 3月19日	川圧岩五郎氏宅	古墳時代	箱式棺		三角縁二神 龍虎鏡　素 環頭大力
第2地点	第2地点	福岡市早良区藤崎1丁目38		大正6年 昭和5年	村上研究所	弥生時代～古墳時代	箱式石棺 甕棺墓	137集	方格渦文鏡
第3地点	第3地点	福岡市早良区百道2丁目3		昭和30年代	旧刑務所	弥生時代	甕棺墓	62集	
第4地点	——	福岡市早良区高取2丁目17		昭和50年	井戸堀削	弥生時代	甕棺墓 1基	138集	彩文土器 (壺)
第1次	第4地点	福岡市早良区百道(旧西区役所前)	4,952㎡	昭和52年4月～昭和53年6月	高速鉄道 (地下鉄)	弥生時代～中世	甕棺墓 91基 石棺墓 4基 土壙墓 23基	62集	特殊墓…1基 住居跡…12
第2次	第5地点	福岡市早良区高取2丁目17	439㎡	昭和52年 8月15日～ 9月15日	テナントビル	弥生時代～中世	方形周溝墓 1基 甕棺墓 60基 土壙 9基		
第3次	第6地点	福岡市早良区2丁目2-807	2,700㎡	昭和55年 4月14日～ 7月31日	9基バスターミナル	古墳時代初頭 奈良～中世	方形周溝墓 9基 土壙 34基 住居跡 7基	80集	三角縁二神 二車馬鏡 珠文鏡
第4次	第7地点	福岡市早良区2丁目	約143㎡	昭和55年 5月19日～ 5月28日	地下鉄出入口A	古墳時代初頭	方形周溝墓 1基 甕棺墓 2基	80集	変形文鏡
第5次	第8地点	福岡市早良区藤崎1丁目1	約101㎡	昭和55年 5月29日	地下鉄出入口B	弥生時代前期	甕棺墓 2基 石蓋土壙墓 1基	80集	
第6次	——	福岡市早良区高取2丁目18	約150㎡	昭和57年 12月	地下鉄出入口C	弥生時代	甕棺墓 5基		
第7次	——	福岡市早良区藤崎1丁目1	200㎡	昭和58年 7月25日～ 8月26日	整骨院増築	弥生時代	甕棺墓 19基 土壙 12基	137集	
第8次	——	福岡市早良区高取2丁目144-145	532㎡	昭和58年 10月18日～ 11月11日	テナントビル	弥生時代～中世	溝 2基 井戸 1基 甕棺墓 2基	138集	
第9次	——	福岡市早良区藤崎1丁目2-29	244㎡	昭和58年12月26日 昭和59年2月8日	賃貸住宅	弥生時代～中世	方形周溝墓 1条、溝4条、土壙52基、住居跡 3軒	137集	
第10次	——	福岡市早良区高取2丁目146地	1,963㎡	昭和60年 1月23日～ 2月14日	分譲住宅	弥生時代～中世	方形周溝墓 1条、溝2条、甕棺墓 6基、井戸 1基	138集	
第11次	——	福岡市早良区高取2丁目	443㎡	昭和60年 10月23日～ 11月19日	ナテントビル	弥生時代～中世	甕棺墓 4基 溝 3条	138集	
第12次	——	福岡市早良区高取2丁目142	657㎡ (300㎡)	昭和63年 5月25日～ 6月15日	大賀学氏	弥生時代～近世	甕棺墓 1期、溝 3条、土壙 4基、井戸 1基	232集	
第13次	——	福岡市早良区高取2丁目165	413㎡ (372㎡)	昭和63年 3月16日～ 7月26日	前田サヨ氏	弥生時代～近世	甕棺墓 32基 土壙 10基 箱式石棺墓 1基 住居跡井戸溝 2基 方形周溝墓 1基	232集	
第14次	——	福岡市早良区高取2丁目140外	413㎡ (102.2㎡)	昭和63年 6月18日～ 6月25日	内山潔氏	中世～近世	住居跡 溝 1条 土壙 1基	232集	
第15次	——	福岡市早良区藤崎1丁目11-1	287㎡ (204.3㎡)	平成1年 6月9日～ 6月26日	(株)じゅう	古墳時代～奈良、平安	土壙、箱式石棺、住居跡 1軒、溝 2条	259集	
第16次	——	福岡市早良区藤崎1丁目1-60	147㎡ (70㎡)	平成1年 9月7日～ 9月14日	三谷昭臣氏	8C前	溝 2条 土壙 1基	259集	
第17次	——	福岡市早良区藤崎1丁目119・120	176.02㎡ (120㎡)	平成1年 12月19日～ 12月23日	笹林宏子氏	7C初～13C	炉跡 5基 井戸 住居跡	259集	
第18次	——	福岡市早良区藤崎1丁目59	126.24㎡ (66.2㎡)	平成1年 3月1日～ 3月7日	崎山健二氏	古墳時代後期～中世	溝、住居跡、 棚列 掘立柱建物	259集	
第19次	——	福岡市早良区高取1丁目455	674㎡ (350㎡)	平成2年 3月6日～ 3月28日	株式会社 共立建物	古墳時代後期～近世	土壙、溝 ピット群	260集	
第20次	——	福岡市早良区高取2丁目173	273㎡ (185㎡)	平成2年 5月23日～ 7月4日	吉田雅昭氏	古墳時代後期～近代	土壙、溝 井戸	338集	
第21次	——	福岡市早良区藤崎1丁目56	333㎡ (175㎡)	平成4年 1月13日～ 2月8日	株式会社 オークニ	古墳時代後期～中世	溝、土壙 住居跡 掘立柱建物	338集	
第22次	——	福岡市早良区藤崎1丁目6	261㎡ (178㎡)	平成4年 7月13日～ 8月31日	石橋誠一氏	弥生時代～近世	甕棺墓 17基 土壙墓 1基 方形周溝墓 (?) 1	本書	
第23次	——	福岡市早良区高取2丁目15～19	423㎡ (238㎡)	平成4年 10月26日～ 11月18日	由宇宏貴氏	古墳時代～中世	溝、土壙、ピット	本書	

Fig. 3　調査区一覧表

III. 第22次調査

1．調査の概要

第22次調査地は、古砂丘上に拡がる藤崎遺跡のほぼ中央部にあり、標高は4.5～4.7mである。本調査地の南側には第15次調査地が、また東側には第７・２・13次調査地がつづき、弥生時代の甕棺墓や箱式石棺墓から中世の溝など多くの遺構が検出されている遺跡群中で最も濃密に遺構の分布する地域である。

調査地の基本層序は、上層より近世～現代を中心とした数層に及ぶ客土層、黄褐色土層、黄褐色砂層、暗褐色砂層とつづいて基盤層の黄白色砂層に至る。地表下65～130cmで検出した暗褐色砂層は、北から南へむかって緩やかな傾斜を示し、この上面に中・近世の遺構が掘り込まれている。この砂層は古墳時代～中世の遺物を含み、30～60cmの厚さで堆積している。この遺物包含層を除くと地表下90～150cmで基盤層となる黄白色砂層に達し、ここに弥生時代中～後期の甕棺墓群が形成されている。遺構面は古砂丘の形成面に沿って南へ緩傾斜している。

調査では、重層する２面の遺構面を検出した。第１面の遺構面では中～近世の土坑や溝を検出したが、その遺存状況は良くない。また、第２面の遺構面では弥生時代中～後期の甕棺墓や土壙墓と方形周溝墓を検出した。

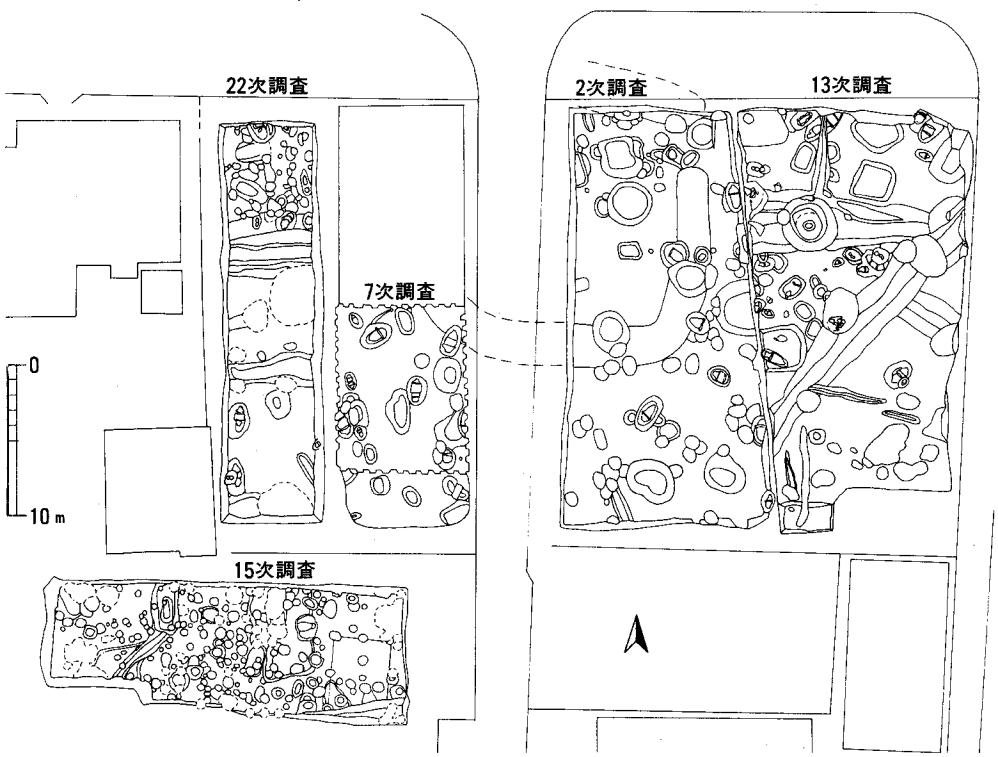


Fig. 4　第22次調査区周辺現況図(1/500)

2．調査の記録

1．第1面の調査

第22次調査では、遺物包含層上面と古砂丘上で2面の遺構面を検出した。第1面は、地表下30～60cmの暗褐色砂層の上面で検出した遺構面で、標高は3.6～4.1mである。この第1面からは中～近世の土坑3基、石組遺構1基、井戸跡2基、溝1条のほかにピット等を検出した。ピットの中には基礎石と考えられる扁平な転石を底面に敷いたものもあるが、建物跡としてはまとまらなかった。

井戸跡（SE）

第1面では2基の井戸跡を検出した。井戸側に平瓦や板材を用いたもので、近世～近代に比定されるものである。

101号井戸跡（Fig.5・34 PL.2）

調査区の中央にある近世の井戸跡で、平瓦の井戸側をもつ。掘り方の平面形は、径約4mの円形で、中央に径約1mの井戸側を穿つ。井戸側は平瓦を縦に継ぎ合せて組上げている。掘り方からは銅銭や中～近世の陶器が出土した。

出土遺物（Fig.34）

155は掘方より出土した「寛永通寶」で、上半を欠く。

108号井戸跡（Fig. 5 .PL. 3 ）

調査区の北端にある近代の井戸跡である。1.1～1.3mの方形の掘り方に沿って井戸側を配する。井戸側は35cmの方形のコンクリ板を3枚並置し、その上に幅20～30cmの板材を重ねているが、東側は板材のみを立て重ねている。

出土遺物（Fig. 7 ）

1は抉り込み高台の雑釉陶器で、底径5.3cm。胎土はきめ細かく、淡緑灰色の釉がかかり、見込みには砂目跡が残る。

土　坑（SK）

第1面では中～近世に比定される3基の土坑を検出した。平面形は楕円形～方形をなすが、その用途は定かでなく形態的な相違がそれに起因するものかは判然としない。

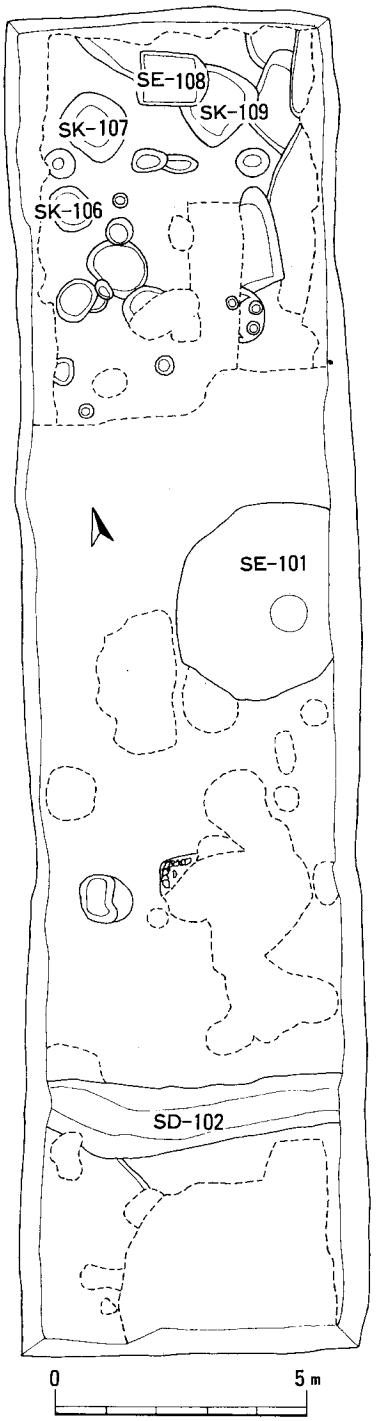


Fig. 5　第1面遺構配置図(1/150)

106号土坑（Fig. 6 .PL. 4 ）

調査区の北西部で検出した小型の土坑で、107号土坑のすぐ南側に位置する。平面形は、長軸92cm、短軸76cmの楕円形プランをなし、主軸方位をN－8°－Eにとる。覆土は明茶褐色砂で、坑底よりやや上面から近世の土瓶が押し潰された状態で出土した。

出土遺物（Fig. 7 .PL.17）

2は素焼きの蓋で、口径6cm。身受けの返りは直口し、天井部に宝珠形の摘みがつく。3は注口部を欠く陶器の土瓶で、口径8cm、底径6.9cm、器高は12.6cm。体部上半に羽状の線文があり、浅黄色の半透明釉がかかる。体部下半はヘラケズリ、内面はヨコナデ調整。

107号土坑（Fig. 6 .PL. 4 ）

調査区の北西隅にある土坑で、106号土坑の北に位置する。平面形は一辺が120～130cmの隅丸方形をなし、壁面は緩やかに立ち上がる。坑底は平坦で、断面形は逆台形をなす。

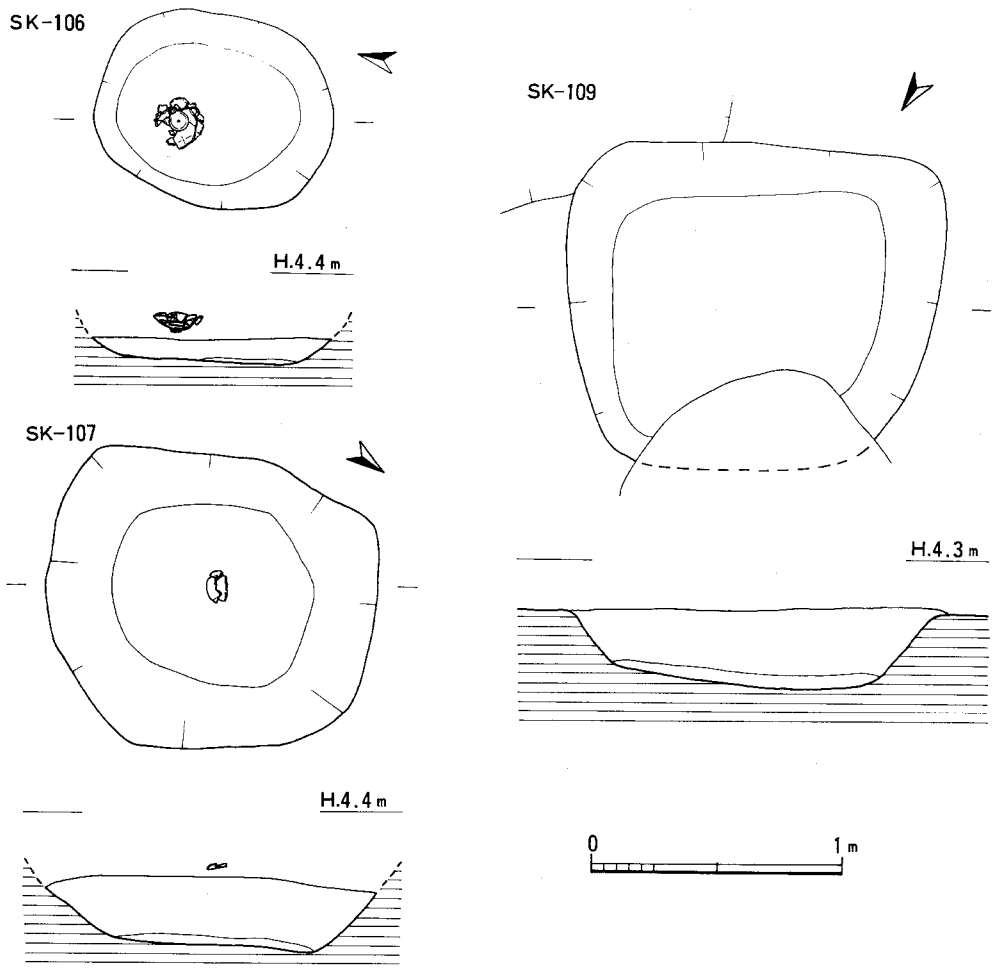


Fig. 6　106・107・109号土坑実測図(1/30)

覆土は明褐色砂で、上面から近世の土師皿が重なって出土した。

出土遺物（Fig. 7）

4・5は土師器小皿である。体部はロクロ引き上げしてヨコナデ調整し、底面はヘラケズリ。底部内外面には黒色物が付着している。胎土は精良で微細砂を含む。4は口径11.4cm、器高1.6cm。5は口径10.7cm、器高1.6cm。

109号土坑（Fig. 6 .PL. 4）

調査区の北東隅部で検出した土坑で、西側は108号井戸跡に切られている。平面形は、長軸150cm、短軸130cmの隅丸方形プランをなす。壁面は緩やかに立ち上がり、坑底は東側がやや低い凹レンズ状を呈する。

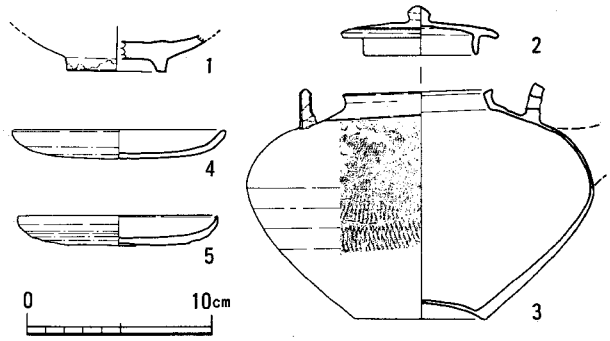


Fig. 7 .106・107号土坑・108号井戸跡、出土土器実測図(1/4)

石組遺構（SX）

103号石組遺構（Fig. 8 .PL. 3）

調査区の南側にある矩形の石組施設である。石組は10～18cmの大きめの転石を基石として横位に3～4列に並べ、その上に小振りの転石を1～2段積み上げている。石組は北側の基石が4列、西側の基石は3列が遺存する。石組は東と南側が消失してL字形をなすが、本来的にはコ字形か四周を囲んでいたものかは明らかでない。坑底には炭片を含む黒色砂が薄く堆積していたが、石には二次焼成痕はない。

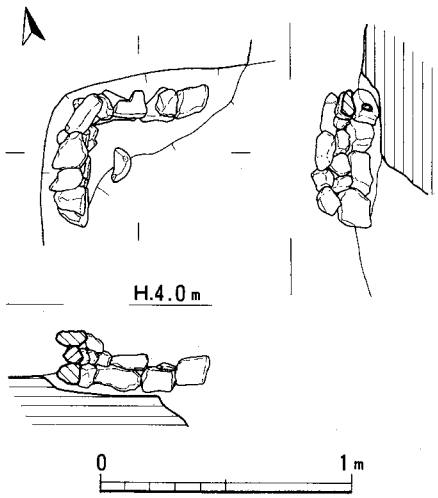


Fig. 8 .103号石組遺構実測図(1/30)

溝　遺　構（SD）

102号溝（Fig. 5 .PL.17）

調査区の南端部にある溝幅は1～1.5mで、直線的にのびる。壁面はやや急峻に立ち上がり、逆台形の断面形をなす。溝底は平坦で、北へ緩やかに傾斜する。覆土は上層から灰褐色砂、赤褐色砂、暗赤褐色砂がレンズ状に堆積し、古代～近世までの遺物を含む。

出土遺物（Fig. 9）

6・7は土錘。径4～7mmの棒材に粘土を巻いてナデ調整。

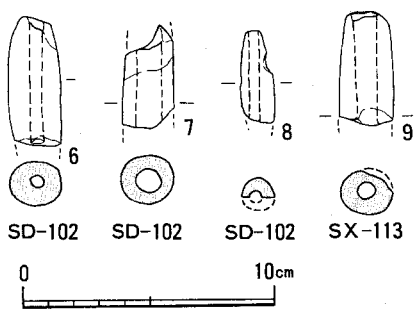


Fig. 9 .第1面遺構出土土錘実測図(1/3)

3．第２面の調査

第２面は、第１面の遺構がのる層厚30～60cmの暗褐色砂層下に形成された古砂丘上の遺構面である。標高は北側が3.6m、南側が2.6mで南へむかって緩やかに傾斜する古砂丘の後背面に沿って形成された遺構面である。

第２面では、甕棺墓17基、土壙墓１基、方形周溝墓１基と土坑４基のほかにピット等の遺構を検出した。このうち甕棺墓は小児墓１基を除いては弥生時代中期後半のものである。また、方形周溝墓は甕棺墓を削平して営まれていることなどから古墳時代初め頃のものと考えられる。これらの墳墓群は、藤崎遺跡における弥生時代前期から古墳時代初めにかけての墳墓域の変遷の有り様を物語るものである。

甕　棺　墓（ST）

甕棺墓は17基を検出した。東接する７次調査区で20基、２次調査区で55基、13次調査区で31基が検出されており、本調査区周辺が甕棺墓域の中心をなす。甕棺墓の中には半裁した筒型器台を副葬する217号甕棺墓や小型壺下から成人の頭部骨を検出した206号甕棺墓は特筆すべきものである。

201号甕棺墓（Fig.11・13.PL.６・15）

調査区の南西隅で検出した呑口式の小児墓で、202号甕棺墓より新しい。甕棺は上下ともに甕形土器で、上甕は口頸部を打ち欠いている。甕棺は、202号甕棺墓直上に21.5°の傾斜で埋置され、N―87.5°―Wに主軸方位をとる。墓壙は、大きめの楕円形をなす。

上甕(10)は、口縁部を打ち欠く丸底の甕型土器で、現存高は26.5cm。球形の胴部は、内面がヘラケズリ、外面は粗いハケ目調整を施している。胎土は良質で、色調は褐色。

下甕(11)は、口径17.2cm、器高31.5cmを測る丸底の甕形土器である。「く」字状の口縁部は端部を小さく摘み出し、胴部は球形をなす。調整は口縁部がヨコナデ、胴部は内面がナデ～ヘラケズリ、外面は粗いハケ目で下半部はナデ消している。胎土は良質で、色調は淡赤褐色。

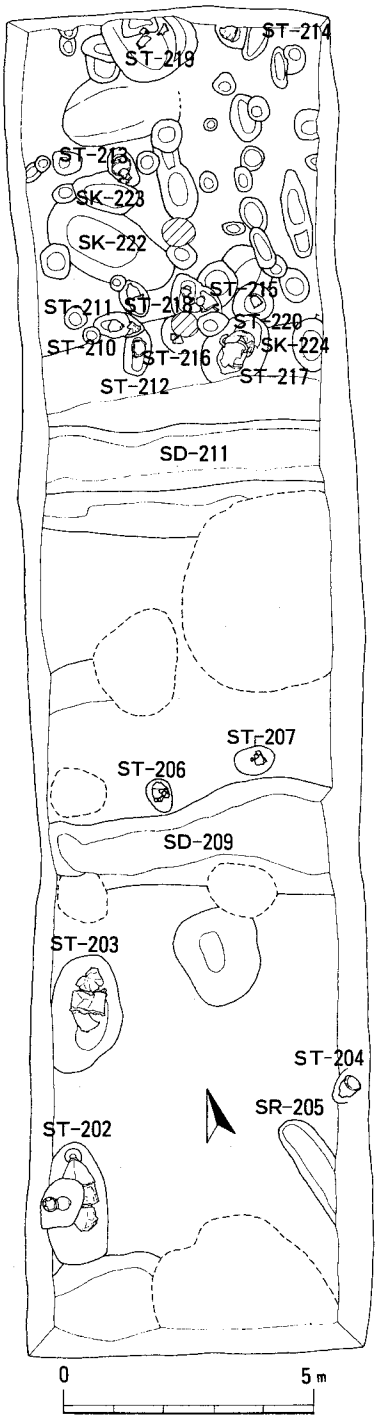


Fig.10.第２面遺構配置図(1/150)

202号甕棺墓（Fig.11・14.PL.6・7・15）

調査区の南西隅で検出した呑口式の成人墓で、201号甕棺墓より古い。北2mの距離には203号甕棺墓が、主軸を同じくして縦列位にある。甕棺は上甕に中型、下甕に大型の甕形土器を用いている。甕棺は、ほぼ水平に埋置した下甕に20°の傾きをもって上甕を挿入している。下甕奥には頭蓋骨片が遺存しており、下甕底部を頭位とする仰臥屈葬であろう。墓壙は125×240cmの楕円形プランを呈し、主軸方位をN—1.5°—Wにとる。

上甕⑯は、口径46.1cm、底径10cm、器高69.2cmの甕型土器。「T」字状の口縁部は内唇が強く張り出す。倒卵形の胴部中位には三角凸帯が1条巡る。調整は、口縁部と凸帯部がヨコナデのほかはナデ。胎土は細～中砂粒を多く含む。

下甕⑰は、口径54cm、底径13.3cm、器高99cmの大型の甕形土器。「T」字状の口縁部は内唇が肥厚して大きく張り出し、外唇にむかって外傾する。胴部はスマートな砲弾形で、中位にシャープな三角凸帯が2条巡る。内外面とも押圧後にナデ調整。胎土には細～小砂粒を含む。

203号甕棺墓

（Fig.12・14.PL.7・15）

調査区の南西部で検出した接口式の成人墓で、202号甕棺墓と2mの距離を隔てて縦列する。甕棺は上甕に鉢型土器、下甕に甕型土器を用いている。甕棺は、145×240cmの楕円形の墓壙に4°の傾斜をもって埋置され、主軸方位はN—7°—Eにとる。下甕の口縁部下には大腿骨が遺存しており、下甕底部を頭位とす

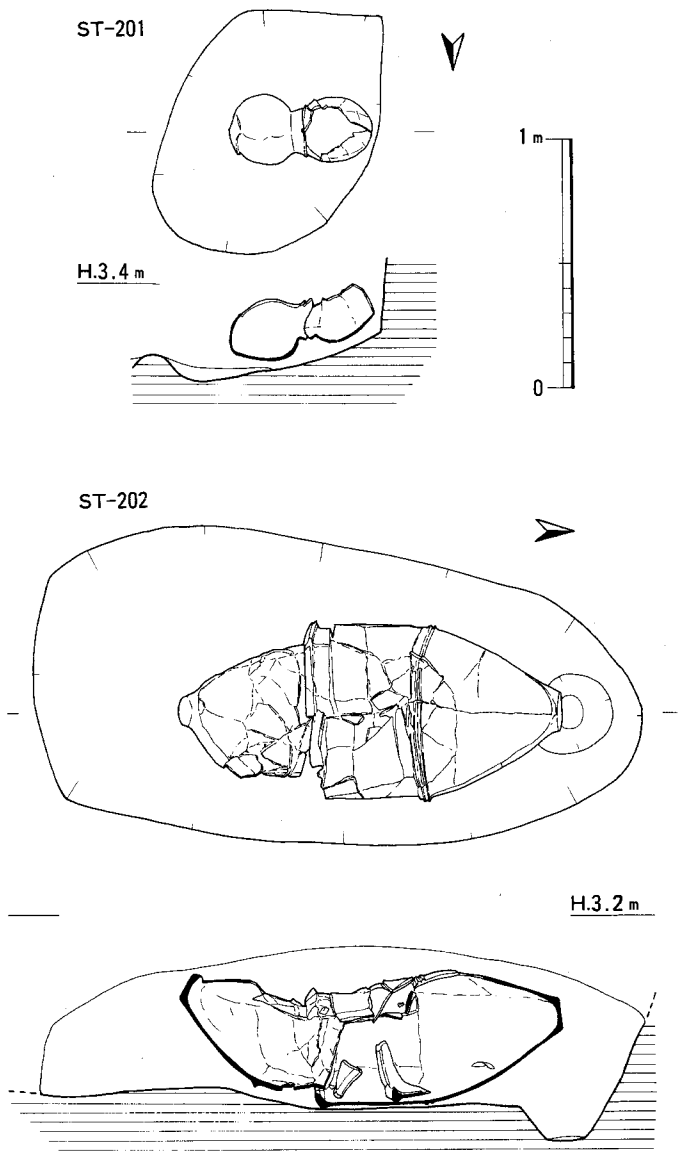


Fig.11.201・202号甕棺墓実測図(1/30)

る仰臥屈葬であろう。

上甕⑱は、口径60.8cm、底径13cm、器高38.9cmの鉢型土器。短く外傾する逆「L」字状の口縁部は、内唇を小さく摘み出す。胴部は半球形で、口縁部下にシャープな三角凸帯が1条巡る。口縁～凸帯がヨコナデ、外面は粗いハケ目。内面はナデ調整で底面に指頭押圧痕が残る。胎土は砂粒と雲母を多く含む。

下甕⑲は、大型甕で口径64cm、底径12.8cm、器高94.1cm。内唇が強く張り出す「T」字状の口縁部は大きく外傾し、砲弾形の胴部中位にはシャープな三角凸帯が2条巡る。調整は口縁と凸帯がヨコナデ、外面は縦ハケ目後にナデ、内面はナデで底面に指頭押圧痕が残る。外面は煤様の黒色顔料が付着している。胎土は砂粒と雲母を多く含む。

204号甕棺墓

(Fig.12・13.PL.8・15)

調査区の南西端で検出した単口式の小児墓で、205号土壙墓の北にある。甕棺は楕円形の浅い墓壙に31°の傾斜をもって埋置している。甕棺は板材をもって蓋としたものであろう。

甕⑫は、口径36.8cm、底径9.7cm、器高43.5cmの甕型土器である。逆「L」字状の口縁部は口唇

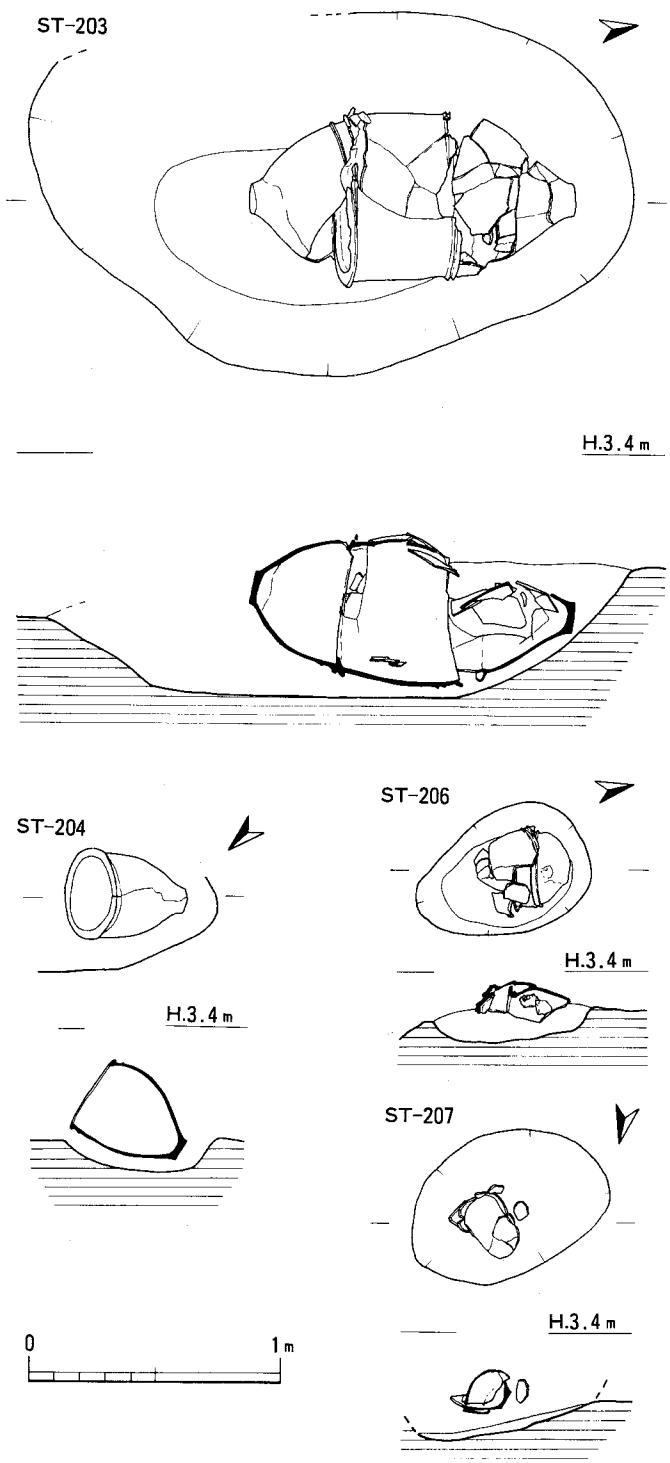


Fig.12.203・204・206・207号甕棺墓実測図(1/30)

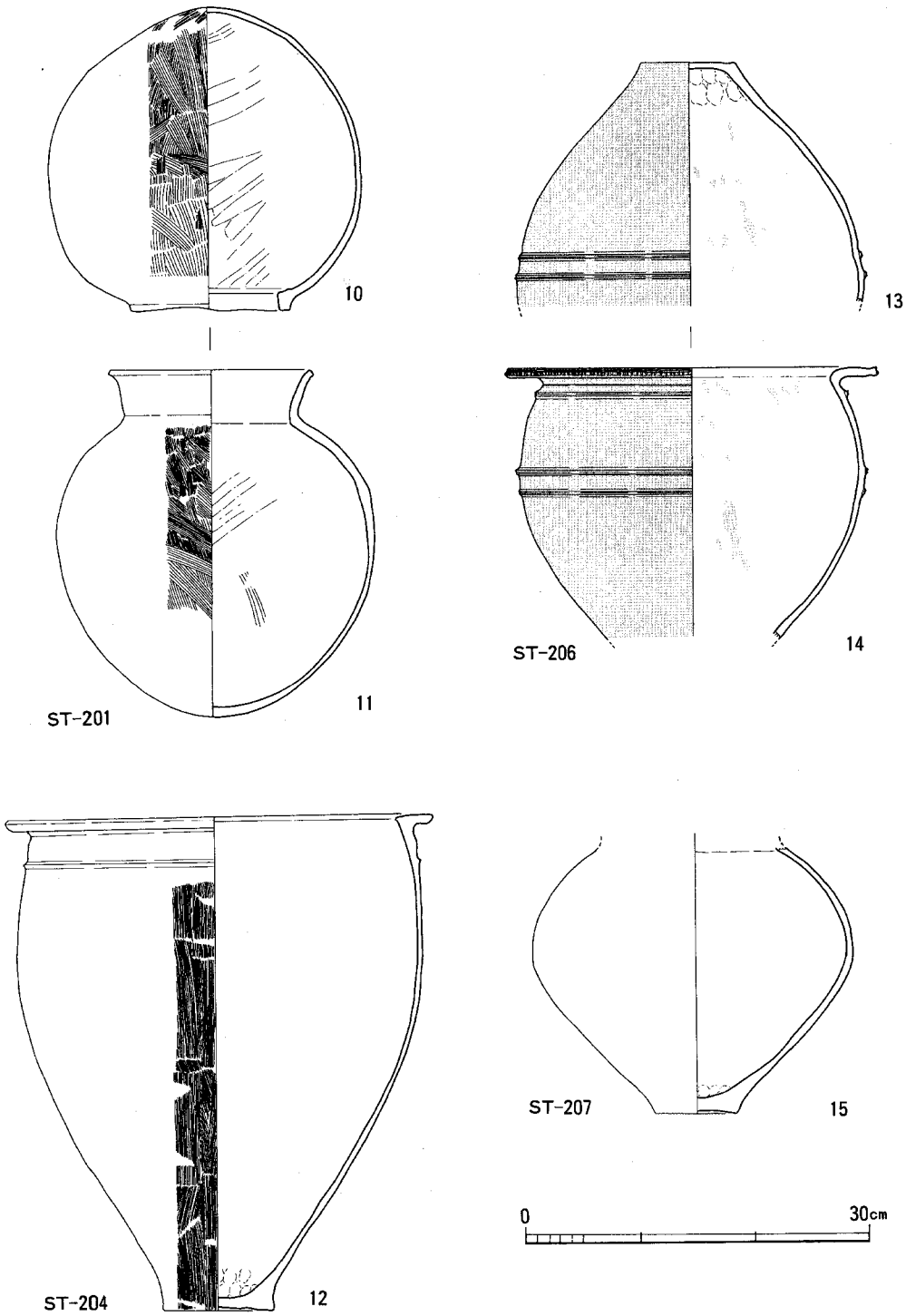


Fig.13.201・204・206・207号甕棺実測図(1/6)

を丸くおさめ、内唇を小さく摘み出す。胴部は倒卵形で、口縁部下に１条の三角凸帯を巡らす。調整は、口縁部～凸帯がヨコナデ。胴部は外面が縦ハケ目、内面はナデて仕上げ、底部には指頭押圧痕が残る。胎土には細～中砂粒と雲母を多く含む。胴部外面には煤様の黒色物が付着している。

206号甕棺墓（Fig.12･13.PL. 8 ･15）

調査区の中央部で検出した合口式の小児墓で、207号甕棺墓の西方２mにある。甕棺は丹塗りの甕形土器を胴部上半と下半に半裁して上下甕としている。甕棺は長軸70cm、短軸50cmの楕円形プランの墓壙に27°東偏してほぼ水平に覆い重ねて埋置しており、土器蓋の土壙墓的様相をなす。北側甕下からは青年期と推定される顎の骨と歯が出土した。

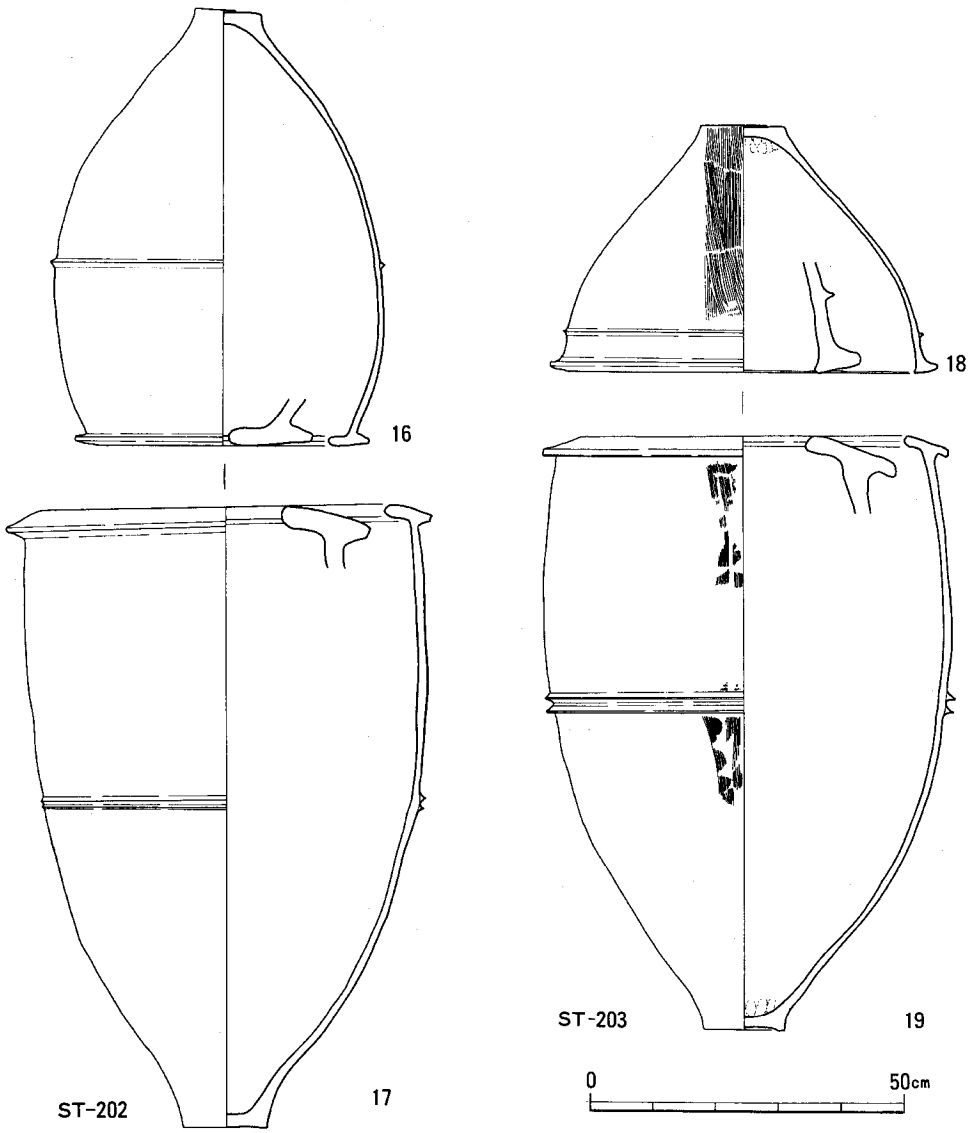


Fig.14.202･203号甕棺実測図(1/12)

上下甕(13・14)は、胴部上半と下半に半裁して上下甕とした丹彩の甕形土器で、口径32.2cm、底径8.2cm、器高は27.5cm。逆「L」字状の口縁部は上端を水平にし、端部にはヘラ工具による刻み目を施す。口縁部下に1条、胴部上半に2条の「M」字凸帯が巡る。調整は外面が研磨、内面は押圧後にナデ。胎土は精良。

207号甕棺墓

(Fig.12・15.PL.9・15)

調査区の中央部で検出した小児墓で、206号甕棺墓の東方2mの距離に位置する。甕には口頸部を欠いた壺型土器を用いているが、上甕の存否は明らかでない。甕棺は長軸80cm、短軸55cmを測る楕円形の墓壙に26°の傾斜をもって埋置されている。

甕(15)は、口頸部を欠く壺型土器で、底径7cm、現高23.2cmを測る。胴部は玉葱状の扁球形をなす。調整は内面が押圧後にナデ、外面はナデ後に粗く研磨して仕上げている。胎土は良質で細～小砂粒と雲母を多く含み、色調は明黄褐色である。

210号甕棺墓

(Fig.15・16.PL.10・15)

調査区の北側にある小児墓で、212号甕棺墓より新しい。墓壙の西半部は小土坑に削平されてい

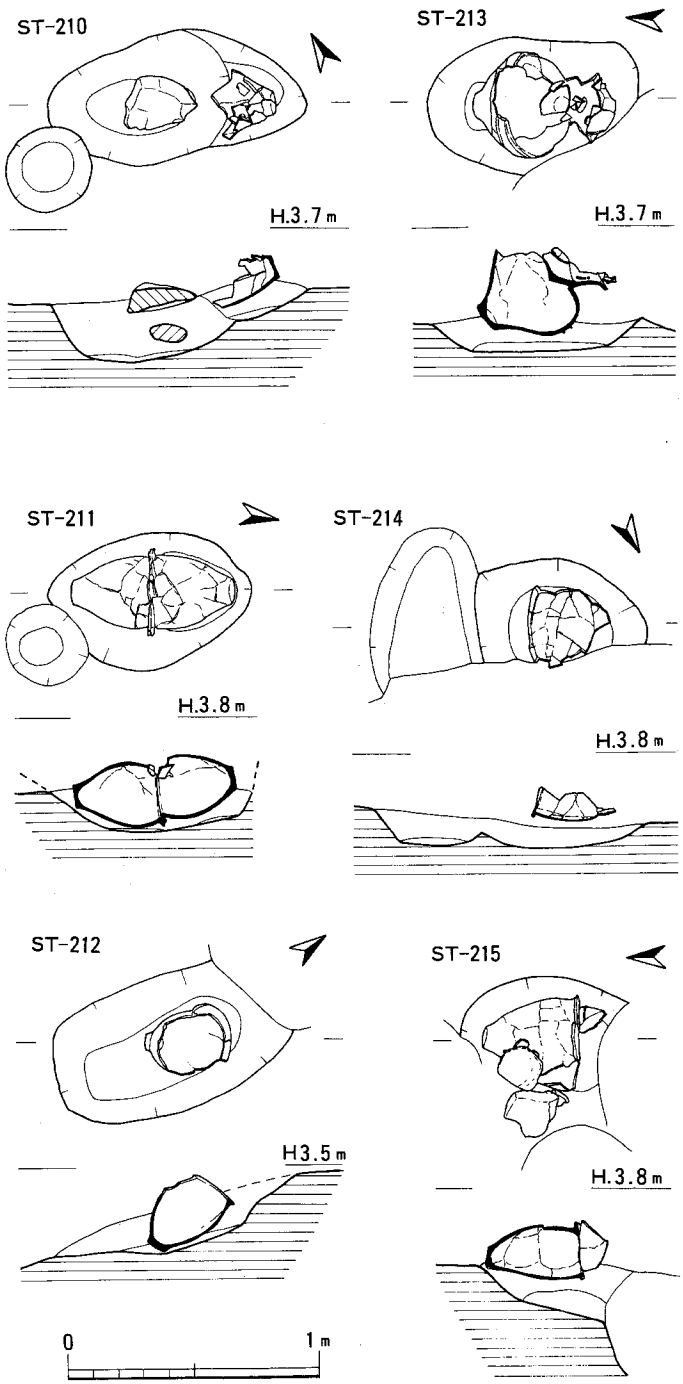


Fig.15.210～215号甕棺墓実測図(1/30)

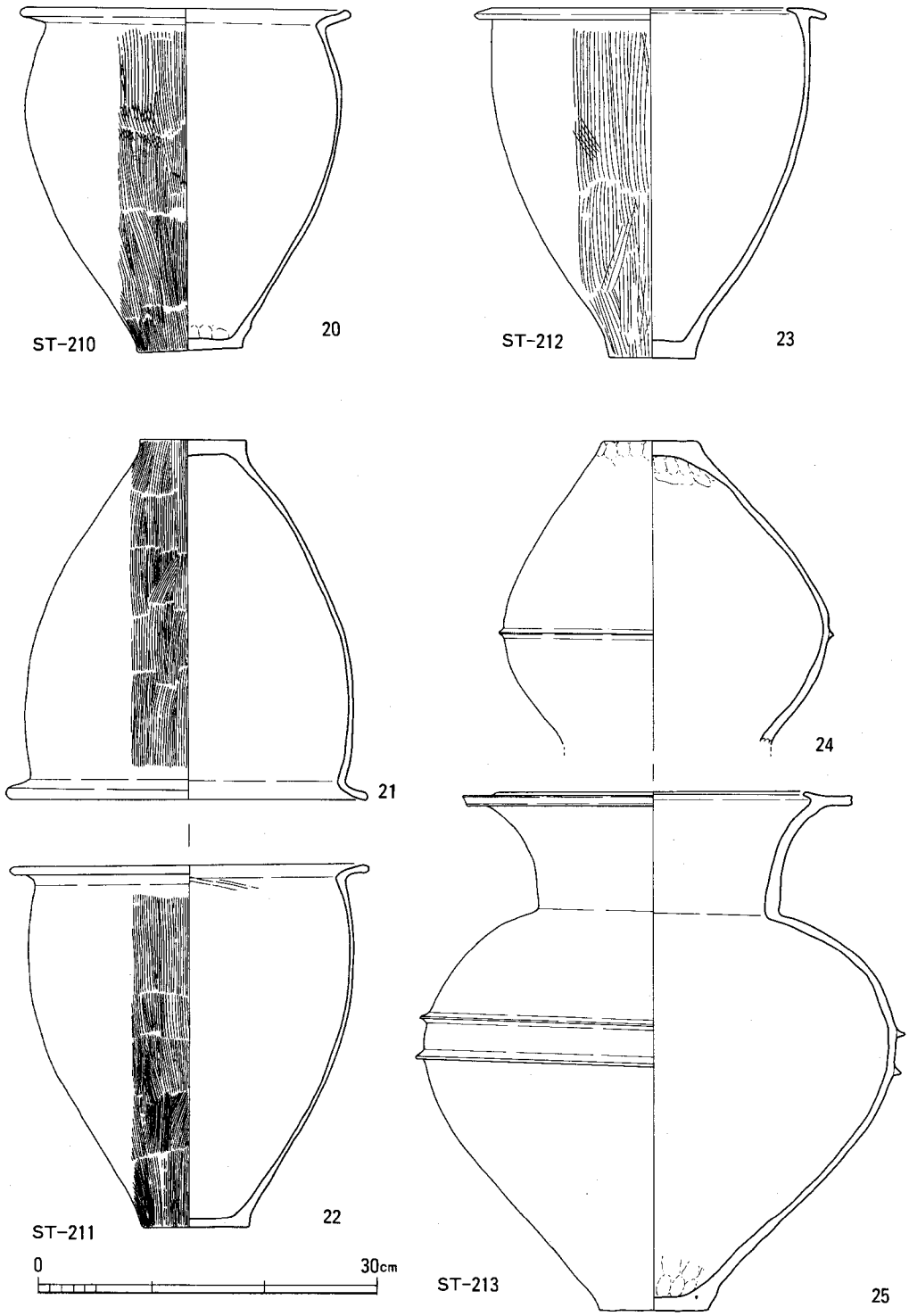


Fig.16.210～213号甕棺実測図(1/6)

る。甕棺は主軸方位をN—57°—Wにとり、21°の傾きをもって埋置される。甕棺は底部を高くしていることから遺存する甕は上甕で、本来は合口式の甕棺墓であったと思われる。

甕⑳は、口径28.8cm、底径9.3cm、器高30.5cmの甕形土器。「く」字状の口縁部は短く外反し、上唇は小さく肥厚する。調整は外面が粗いハケ目、内面は押圧後にナデで底面には指頭圧痕が明瞭に残る。胎土には小～中砂粒を含み、色調は褐～赤褐色。

211号甕棺墓（Fig.15・16.PL.10・16）

調査区の北側で検出した接口式の小児墓で、210号甕棺墓に北隣接して位置し、222号土坑を切っている。甕棺は上下甕ともに甕形土器を用いる。甕棺は主軸方位をN—2°—Wにとり、長軸80cm、短軸57cmの楕円形の墓壙内にほぼ水平に埋置されている。

上甕㉑は、口径31.8cm、底径9.3cm、器高31.8cmの甕形土器である。「く」字状の口縁部は短く外反し、端部は肥厚気味に丸くおさめる。調整は、外面が粗いハケ目、内面は押圧後にナデて仕上げている。胎土は良質で小砂粒を含み、淡褐色を呈する。

下甕㉒は、口径31.5cm、底径9.5cm、器高32.1cmの甕形土器である。「く」字状に外反する口縁部は端部が大きく肥厚し、倒卵形の胴部は器肉が薄い。調整は、外面が粗い縦ハケ目、内面は押圧後にナデて仕上げている。胎土は良質で小～中砂粒を少量含み、色調は淡褐色。

212号甕棺墓（Fig.15・16.PL.10・16）

調査区の北側にある単口式の小児墓で、北側は210号甕棺墓に、また上面は方形周溝墓の溝に切られている。甕棺は楕円形プランの墓壙に51°の急傾斜をもって埋置され、N—32.5°—Eに主軸方位をとる。甕棺には甕形土器を用い、板材を蓋として棺口を覆ったものであろう。

甕㉓は、口径31cm、底径7.6cm、器高31.1cmの甕形土器。「T」字状の口縁部は外唇が小さく垂れ、胴部は倒卵形をなす。外面は粗い縦ハケ目、内面は押圧後にナデ調整。胎土は良質。

213号甕棺墓（Fig.15・16.PL.11・14）

調査区の北西部に位置する合口式の小児墓で、南側は223号土坑を切っている。甕棺は口頸部を欠いた小型の壺型土器を上甕に、大きめの壺型土器を下甕としている。甕棺は主軸方位をN—5°—Wにとり、楕円形の墓壙中央に37.5°の傾きをもって埋置している。甕棺は上面の削平によって上甕の底部が下甕内に転入しているが、その遺存状況から呑口式であろうか。

上甕㉔は、口頸部を打ち欠いた壺型土器で、底径8.5cm、現高26.9cmを測る。胴部は玉葱状の扁球形をなし、最大径部には1条のシャープな三角凸帯が巡る。胎土には細～粗砂粒と雲母を多く含み、色調は明赤橙色～黄橙色。

下甕㉕は、口径34.8cm、底径9.8cm、器高46.1cmの広口の壺型土器である。口縁部は鋤先状をなし、頸部は短く外反して立ち上がる。胴部は肩の張った玉葱状で、最大径部に2条の三角凸帯が巡る。調整は口頸部と凸帯がヨコナデ、外面は丁寧な研磨状のナデ、内面はナデ。胎土は良質で細～小砂粒と雲母を多く含み、色調は黄橙色。凸帯部には丹零れの跡が残る。

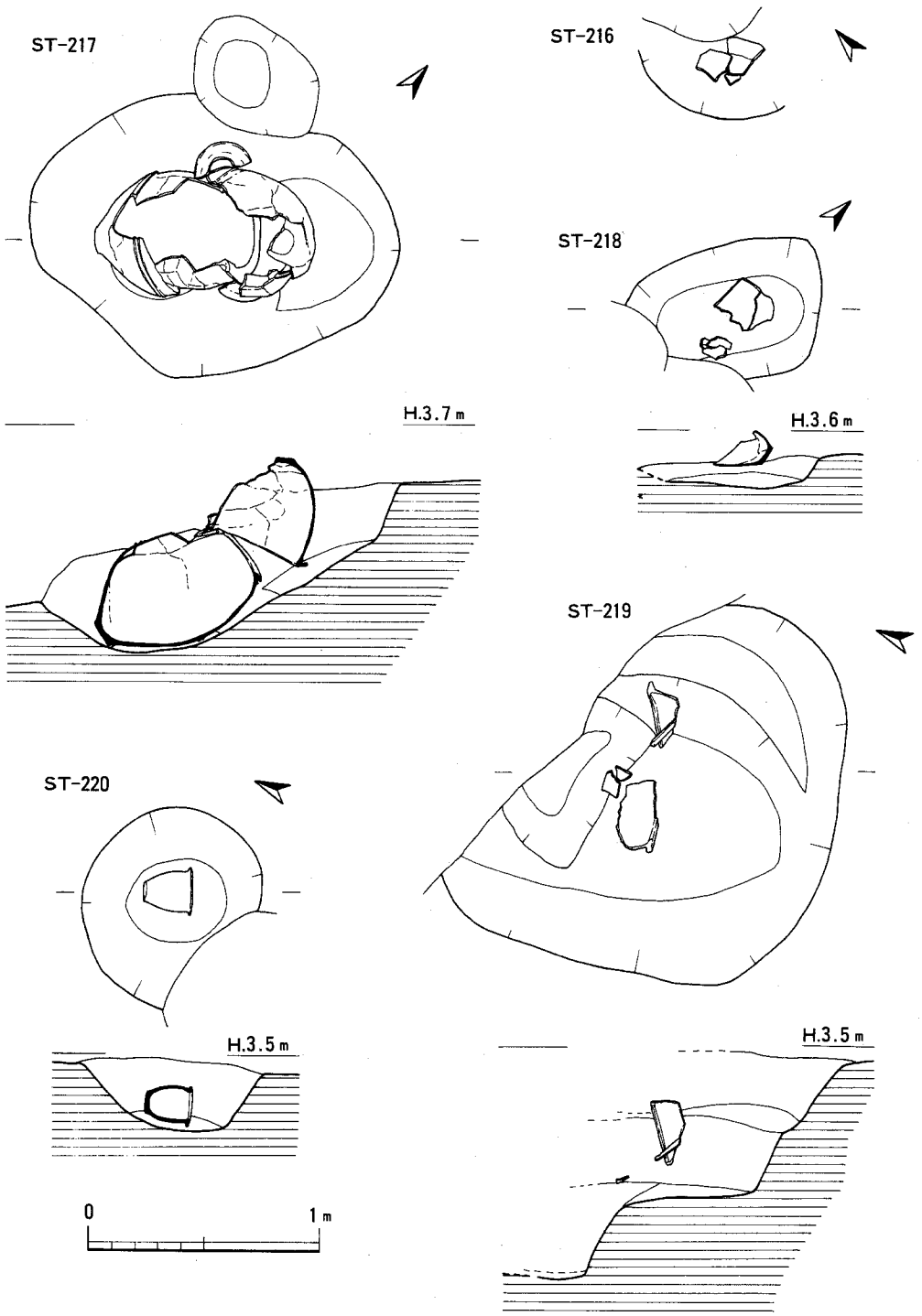


Fig.17.216～220号甕棺墓実測図(1/30)

214号甕棺墓（Fig.15・18.PL.11・16）

調査区の北東隅部で検出した小児墓で、攪乱による消失が著しい。棺には甕形土器を用い、単口式の可能性が考えられるが判然としがたい。甕棺はN―61°―Wに主軸方位をとり、楕円形の墓壙内にほぼ水平に埋置されている。

甕㉖は、底部を欠く甕型土器で、口径29.6cm、現高33.2cmを測る。逆「L」字状をなす口縁部は内唇が小さく張り出し、胴部は倒卵形をなす。調整は、外面が縦ハケ目、内面は押圧後にナデて仕上げている。胎土には石英や長石粒を含み、色調は淡黄褐色。

215号甕棺墓（Fig.15・18.PL.11・16）

調査区の北側にある呑口式の小児墓である。西側は218号甕棺墓を切り、南半部は方形周溝墓によって削平されている。甕棺は上甕に口縁～胴部上半を欠いた壺型土器、下甕に甕形土器を用いている。甕棺は主軸方位を南北にとり、楕円形の墓壙内にほぼ水平に埋置されている。

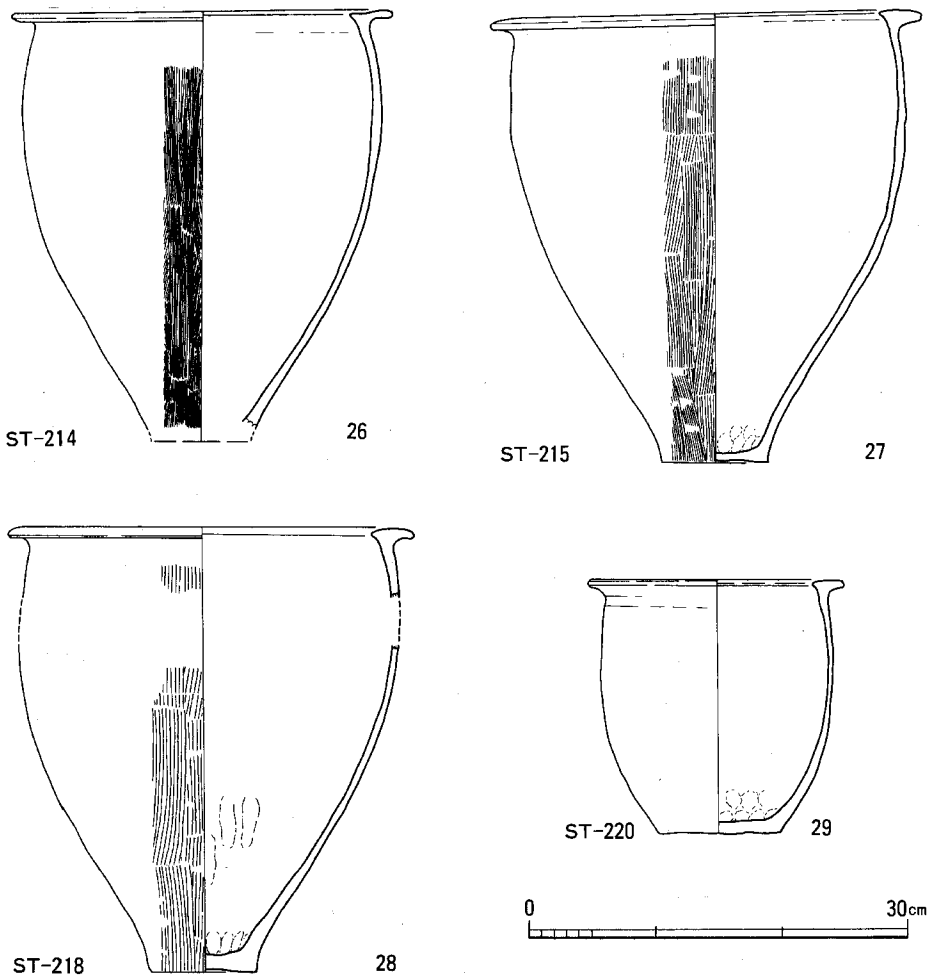


Fig.18.214・215・218・220号甕棺実測図(1/6)

上甕は、胴部上半を打ち欠いた壺型土器で胴部は玉葱状をなし、１条の三角凸帯が巡る。

下甕(27)は、口径33.6cm、底径8.4cm、器高35.9cmの甕形土器。厚い逆「L」字状の口縁部は内唇が小さく張り出す。調整は、外面が粗い縦ハケ目、内面はナデて仕上げ底面には指頭圧痕が明瞭に残る。胎土には細～中砂粒や雲母、赤褐色粒を含む。色調は淡黄～淡灰褐色。

216号甕棺墓（Fig.17.PL.９）

調査区の北側で検出した小児墓で、212号甕棺墓と217号甕棺墓の間に位置する。甕棺は南半部を方形周溝墓に、また北半部は建物の基礎杭によって破壊され、その大半が消失している。甕棺には甕形土器を用いているが、図示はできなかった。

217号甕棺墓（Fig.17･19･20.PL.12･16･17）

調査区の北側にある合口式の成人墓で、220号甕棺墓より新しく、方形周溝墓より古い。上甕は大型の鉢型土器、下甕は大型の甕形土器である。墓壙は50～60cmほど直口して掘り下げ、緩やかに傾斜して更に掘込む２段掘りの構造をもつ。甕棺はこの墓壙に32°の角度をもって埋置し、主軸方位をN－31.5°－Eにとる。上甕は上面は下甕に覆い被さるが下面は口縁端から大きく離れている。甕棺の接口には筒型器台の受け部を半裁して左右に配している。

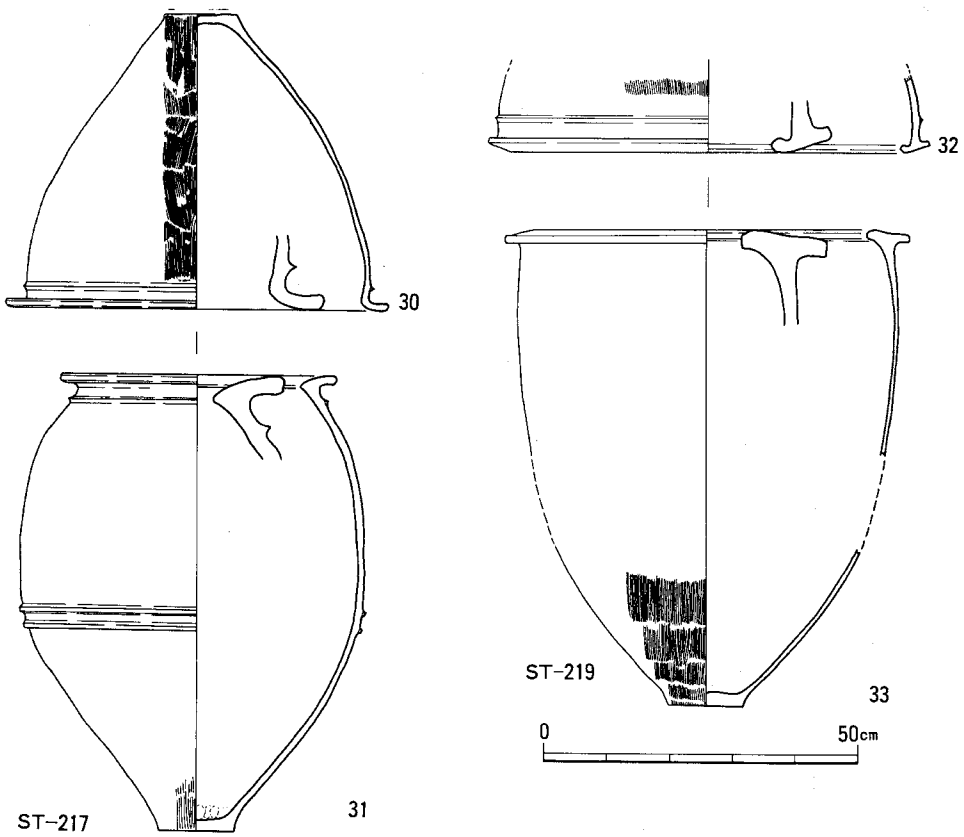


Fig.19.217･219号甕棺実測図(1/12)

上甕(30)は、口径60cm、底径11.4cm、器高46.8cmの鉢型土器。逆「L」字状の口縁部は折り曲げる様にして造り出す。胴部は扁球形で、口縁部下にはシャープな三角凸帯が1条巡る。調整は口縁部がヨコナデ、外面は粗い縦ハケ目、内面はナデで底面には強い指頭押圧痕が残る。胎土は砂粒と雲母を多く含み、赤褐色。

下甕(31)は、口径43.4cm、底径12cm、器高72.3cmの甕形土器で、口縁部は逆「L」字状をなす。倒卵形の胴部には1条の三角凸帯が、口縁部下に2条の「コ」字凸帯が中位に巡る。口縁部と凸帯がヨコナデのほかはナデ調整。外面には煤様の黒色顔料が塗布されている。胎土は良質で細砂と雲母を多く含む。

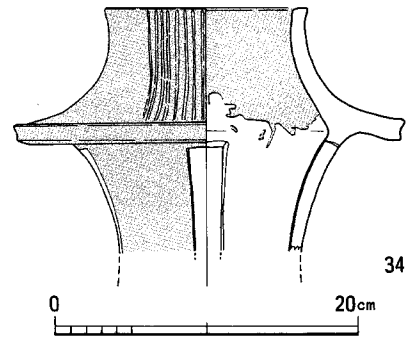


Fig.20.217号甕棺墓副葬遺物実測図(2/5)

34は、口径13.3cmの丹塗りの筒型器台。鍔部は短く張り出し、受け部は直口して立ち上がる。受け部～鍔部にはヘラ先状工具による暗文が描かれ、鍔部直下には4ケ所の透かしが対位に穿たれる。口縁～鍔部はヨコナデ、筒部は研磨状の丁寧なナデ、内面はヨコナデ～ナデ調整。

218号甕棺墓（Fig.17・18.PL.11・16）

調査区の北側で検出した単口式の小児墓で、東側は215号甕棺墓に切られ、上半は消失している。甕棺は楕円形の墓壙に約32°の傾きで埋置され、主軸方位をN－38°－Eにとる。

甕(28)は、口径33.6cm、底径8.3cmの甕型土器。逆「L」字状の口縁部は内唇が小さく張り出し、胴部は倒卵形をなす。調整は、外面が粗い縦ハケ目、内面は押圧後にナデ。

219号甕棺墓（Fig. 17・19. PL. 12・16）

調査区の北西部に位置する合口式の成人墓であるが、攪乱が著しく遺存状況はきわめて悪い。甕棺は上下甕ともに大型の甕形土器を用いている。墓壙は一旦竪穴を掘り、その北側を更に掘込む2段掘りの構造をなす。

上甕(32)は、胴部下半を欠く大型の鉢で、口径は60.8cm。「T」字状の口縁部は、丸く肥厚した内唇から外唇へ小さく外傾する。口縁下にはシャープな三角凸帯が1条巡り、胴部

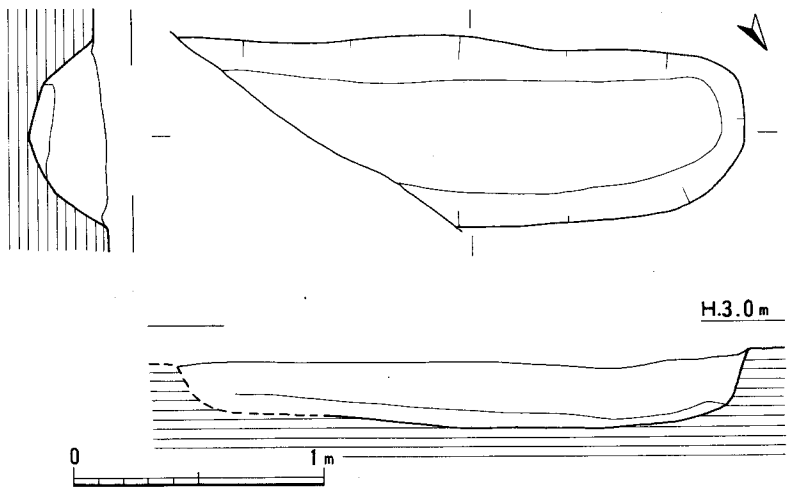


Fig.21.205号土壙墓実測図(1/30)

は扁球形に窄まろう。調整は、口縁～凸帯部がヨコナデ、内部はナデ、外面は縦ハケ目。

下甕(33)は、口径52cm、底径12cmの大型甕で、器高は76cmに復原される。「T」字状の口縁部は、肥厚した内唇から外唇に小さく外傾し、胴部は砲弾形をなす。調整は、口縁部がヨコナデ、胴部はナデで下半部は粗い縦ハケ目を施す。胎土は良質で細～小砂粒を含む。

220号甕棺墓（Fig.17・18.PL.12・16）

調査区の北半部にある単口式の小児墓で、南側は217号甕棺墓に切られている。甕棺は円形の墓壙内に水平に埋置され、N－19°－Wに主軸方位をとる。蓋材は明らかでないが、木蓋で棺口を覆ったものであろう。甕自体が小さいことから乳幼児を葬ったものかと考えられる。

甕(29)は、口径20.1cm、底径9.6cm、器高20cmの甕形土器。直口して立ち上がる逆「L」字状の口縁部は内唇が小さく張り出し、胴部は膨らみの小さい樽状をなす。調整は内外面ともナデで底部には指頭押圧痕が残る。胎土には細～中砂粒を多く含み、色調は淡黄褐色。

土　壙　墓（SR）

205号土壙墓（Fig.21.PL.13）

調査区の南東隅にある素掘りの土壙墓で、204号甕棺墓に南接する。主軸方位をN－55°－Wにとり、平面形は長軸は約200cm、短軸60cmの隅丸長方形プランをなそう。壁面はやや急峻で、床面は浅い凹レンズ状をなす。覆土は淡灰黒色砂層のみで、側板等の痕跡を示す腐食物層の堆積は観察されなかった。遺物はないが、甕棺墓群に前出するものであろうか。

土　　坑（SK）

第２面では、４基の土坑を検出した。平面形はいずれも楕円形プランをなすが、その用途は判然としない。時期的には遺物の出土がなく明らかでないが、土坑上面に弥生時代中期後半の甕棺墓が営まれていることから、中期中頃以前のものとだけは云えよう。

208号土坑（Fig.22.PL.13）

調査区の南側にある楕円形の土坑で、203号甕棺墓の東２mに位置する。土坑は長軸195cm、短軸170cmの歪んだ楕円形プランで、断面

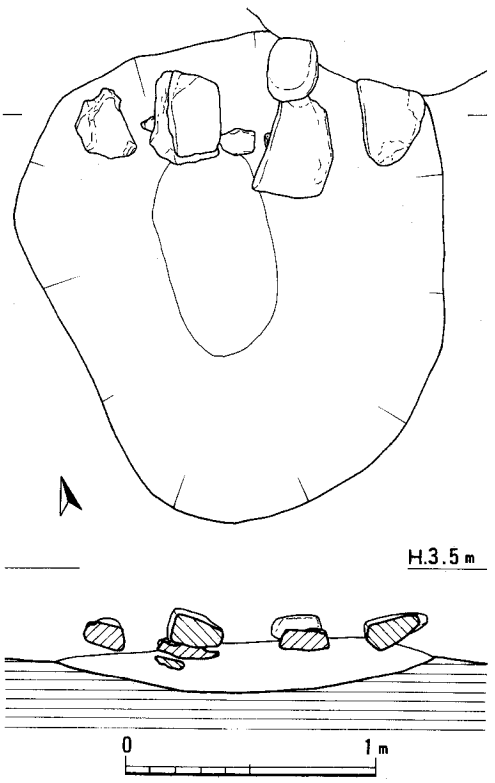


Fig.22.208号土坑実測図(1/30)

形は浅い凹レンズ状をなす。土坑の北辺には6個の扁平な転石が土坑長軸と直交して並置している。覆土は黒色砂で、転石周辺は炭片が混入していた。遺物はなく、時期は決しがたい。

222号土坑（Fig.23.PL.13）

調査区の北西部では検出した大型の土坑で、北側は223号土坑に、南側は211号甕棺墓に切られている。平面形は、長軸270cm、短軸135cmの楕円形プランを呈し、主軸方位をN－44°－Wにとる。緩やかに立ち上がる壁面は深さが65cmで、断面形は浅い舟底状をなす。覆土は明茶褐色砂で、遺物は未出土。

223号土坑（Fig.23.PL.13）

調査区の北西部にある土坑、北側は213号甕棺墓に切られている。平面プランは、長軸132cm、短軸80cmの楕円形を呈し、N－59°－Wに主軸方位をとる。壁面は深さ45cmで、やや急峻に立ち上がり、断面形は逆台形をなす。覆土は茶褐色砂で、なんらの遺物も出土しなかった。

224号土坑（Fig.23.PL.14）

調査区の北東部で検出した小型の土坑で、217号甕棺墓の東に位置し、その上面は方形周溝墓の溝（SD—221）に削平される。平面形は、長軸106cm、短軸75cmの楕円形プランを呈し、主軸方位をN－19°－Eにとる。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は浅い舟底状をなす。覆土は茶褐色砂で、遺物は未出土。

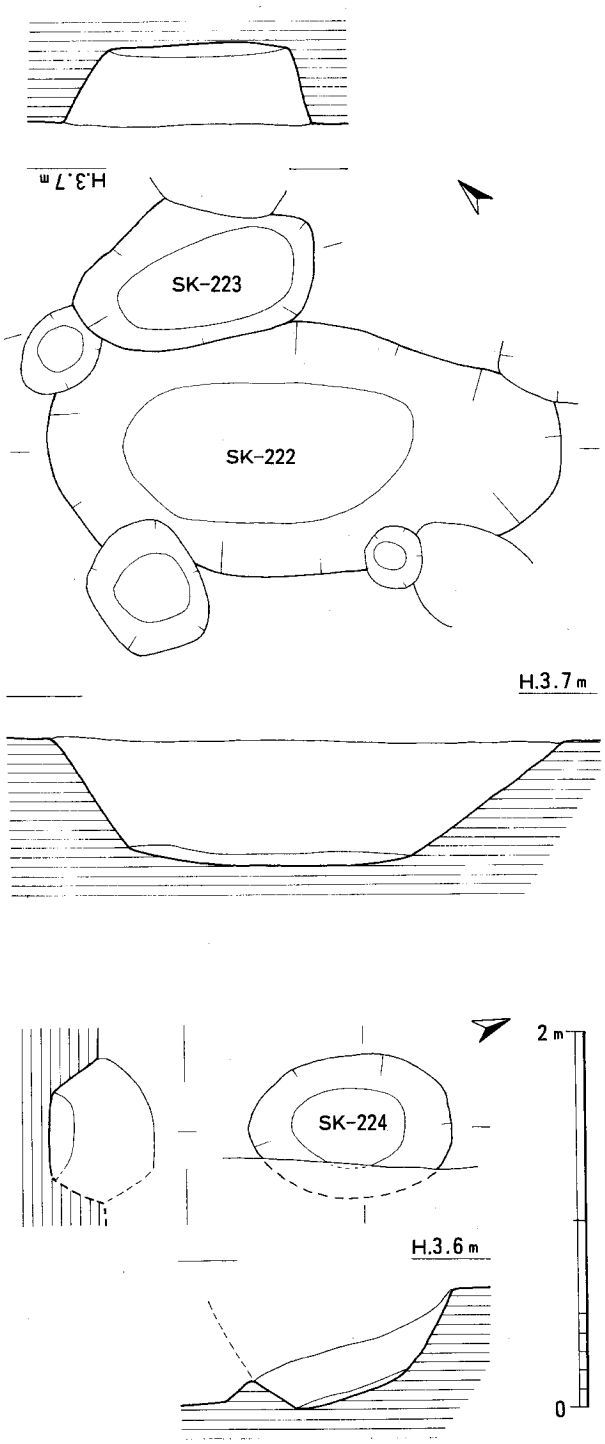


Fig.23.222～224号土坑実測図(1/40)

方形周溝墓（SO）（Fig.24・PL.14）

調査区のほぼ中央部で、方形周溝墓の南北溝と考えられる並走する２条の溝（SD－209・221）を検出した。北側の周溝は溝幅が3.5～4.2mで、溝底近くで小さなフラット面を造る２段掘りの構造をなす。一方、南側の周溝は溝幅が1.5～2.5mで北側周溝に比べてやや狭く、断面形は底面が浅い凹レンズ状の逆台形をなす。この２条の溝から復原すると、一辺が約11mの方形周溝墓となり、周溝の内法は５mである。埋葬主体部は中央部のほどんどが攪乱を受けており検出できなかった。また、この周溝墓に伴う副葬遺物がなく明確な時期決定はなしがたいが、北側の周溝が217号甕棺墓を削平して開削されていることから弥生時代後期～古墳時代初めに位置づけられよう。一方、東隣する第７次調査区ではこれに繋がる周溝は未確認であり、東側の周溝は調査区端で直ちに屈曲するものと考えられる。

出土遺物（Fig.25・26.PL.17）

35～41は北側の周溝SD－209から出土。35は口径7.1cm、底径4.9cm、器高13.4cmの直口壺。口縁部は小さく外反して短く立ち上がり、胴部は扁球形をなす。調整は口縁部がヨコナデのほかはハケ目で、胴部下半はハケ目をナデ消す。胎土には細～中砂粒を含む。36は胎土の精良な丹塗りの壺で、底径は9.5cm。37～40は甕形土器。37は口径14.1cm、底径4.9cm、器高13.4cmの小型甕。口縁部は短く「く」字状に外反し、樽状をなす。外面はハケ目、内面はナデ調整。

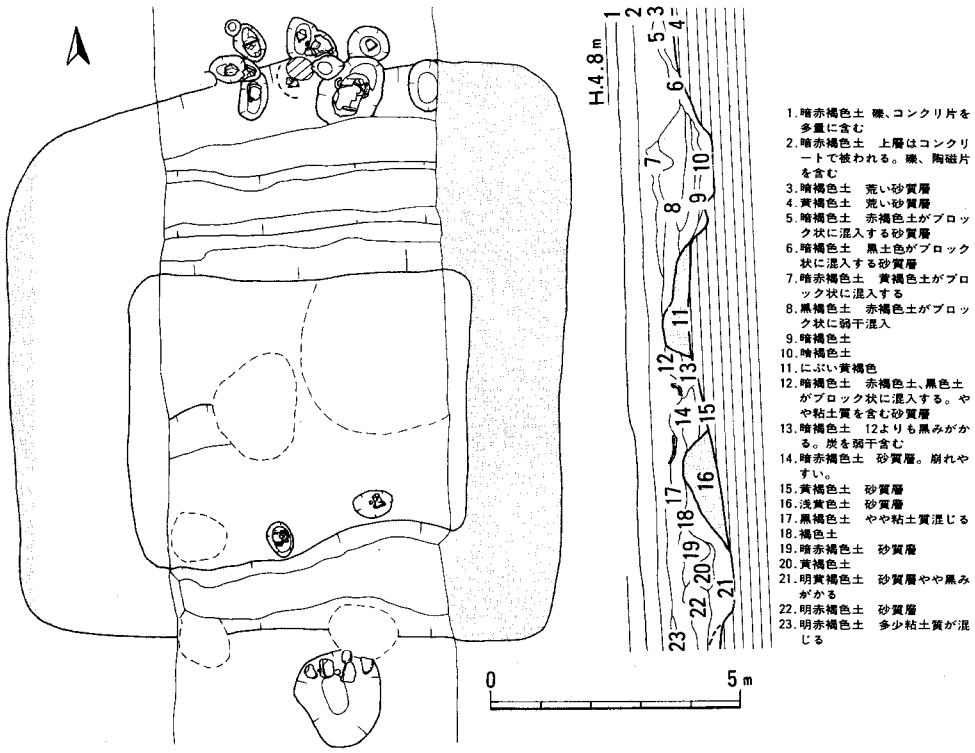


Fig.24.230号方形周溝墓実測図(1/150)

38は口径17.2cmで、「く」字状の口縁部は内弯気味に立ち上がり、内唇は小さく摘み上げている。胎土は砂粒を多く含む。39は口径25.3cm。逆「L」字状の口縁部は内唇を小さく摘み出し、外唇は肥厚する。口縁部下にシャープな三角凸帯が1条巡る。胎土には砂粒を多く含む。40は底径8.4cmで、胴部は倒卵形をなす。胎土は砂粒と雲母を多く含み、外面には煤様の黒色顔料が遺存している。調整は外面が縦ハケ目、内面はナデ。41は、底径19.2cmの高坏脚。脚はラッパ状に開き、外面には粗いハケ目が残る。胎土は砂粒を多く含む。

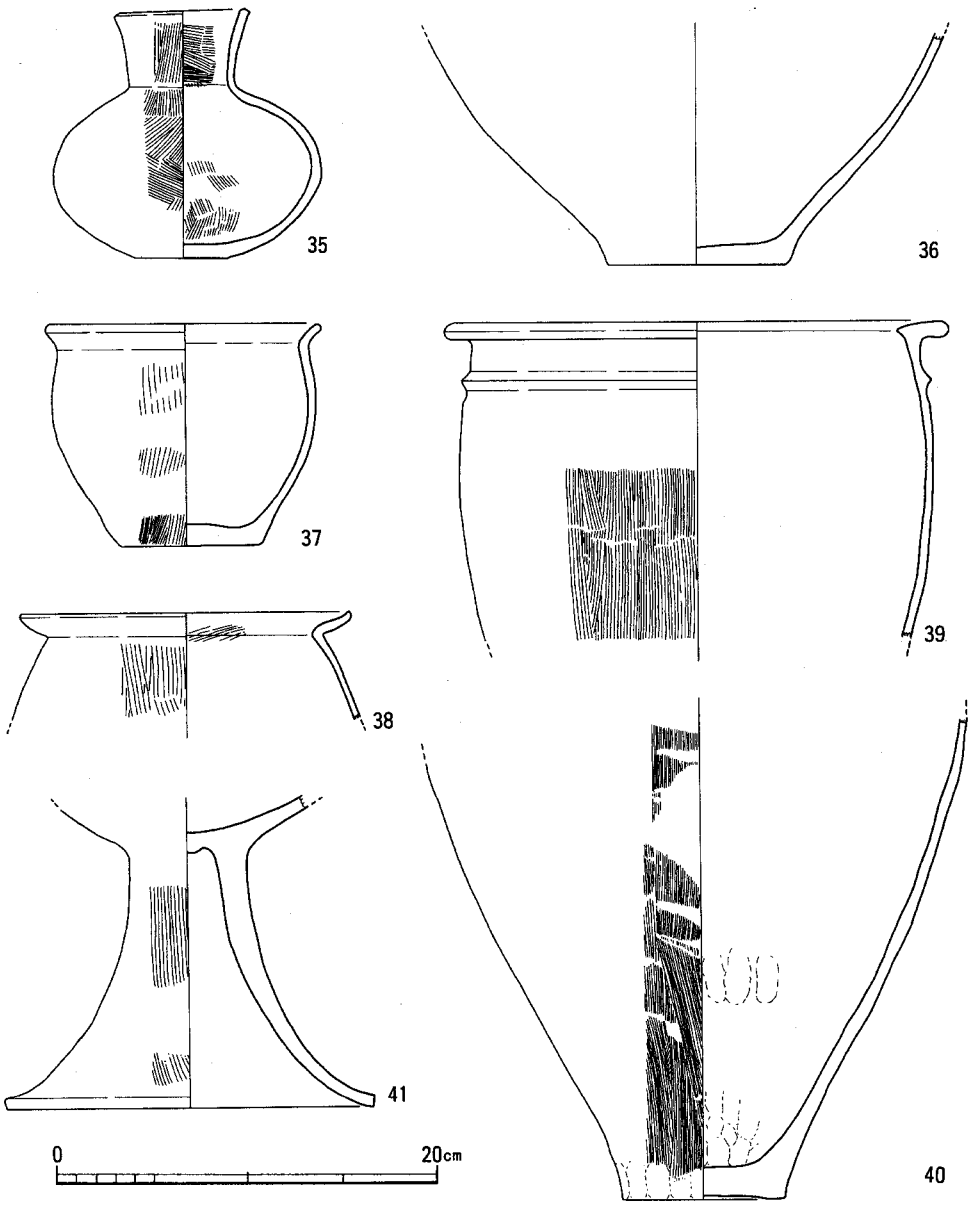


Fig.25.230号方形周溝墓(SD-209)出土土器実測図1(1/4)

42～45は南側の周溝SD－221より出土。42は口径26.8cmの広口壺。頸部は短く直口して立ち上がり、口縁部上面には粘土紐を貼りつけて段をなす。頸部と胴部の境にはシャープな三角凸帯が巡る。調整はハケ目後にヨコナデ。43は口径25.6cmの複合口縁壺。直口する口縁部は端部が内傾し、頸部との境は三角凸帯状の段を造る。胎土には砂粒と雲母を多く含む。44は口径11.2cmの小型壺。「く」状字状の口縁部は短く外反し、胴部は扁球形をなす。口縁部がヨコナデ、胴部はナデ調整で内面にはハケ目が残る。45は口径19cmの須恵器甕。口縁部は短く外反し、端部は外方に小さく摘み出す。内外面ともヨコナデ調整。濃灰色。

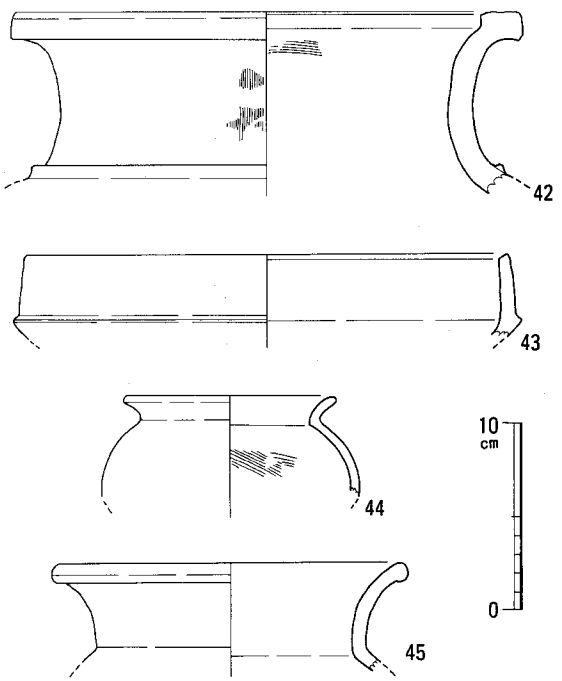


Fig.26.230号方形周溝墓(SD-221)出土土器実測図2(1/4)

4．包含層出土の遺物

調査区には第1面の遺構ののる暗褐色砂層が30～60cmの厚さで堆積し、この層中には弥生時代中期～中・近世の遺物が含まれている。更にその上層には高取焼等の近世～近代の遺物を含む茶褐色土～黄褐色砂層がある。また、攪乱壙からも包含層より混入した遺物が出土している。

出土遺物（Fig.28～34.PL.17）

49～52は弥生式土器である。49･50は壺。49は底径5.7cm。50は丹塗りで底径は9cm。胴部は玉葱状の扁球形をなす。外面は丁寧な研磨、内面はナデ調整。51･52は甕。51は丹塗りで、口縁部下には刻み目を施した三角凸帯が1条巡る。外面が研磨、内面はナデ。内面には丹零れ痕がある。52は口径29.6cm。逆「L」字状の口縁部下には浅い横凹線が1条巡る。外面は縦ハケ目、内面はナデ調整。

53～60は土師器である。53は口径6cm、器高10.3cmの蛸壺である。口縁部は僅かに内傾し、砲弾形の体部上半には焼成前に一孔を穿つ。内外面共に丁寧な押圧ナデ調整。胎土は精良で細～小砂粒と雲母を含み、赤褐色。54～57は甕。54は口径13.8cmで、口縁部は緩やかに外反する。55は口径13.6cm。口縁部

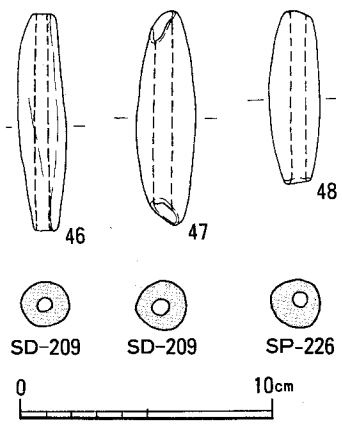


Fig.27.第2面遺構出土土錘実測図(1/3)

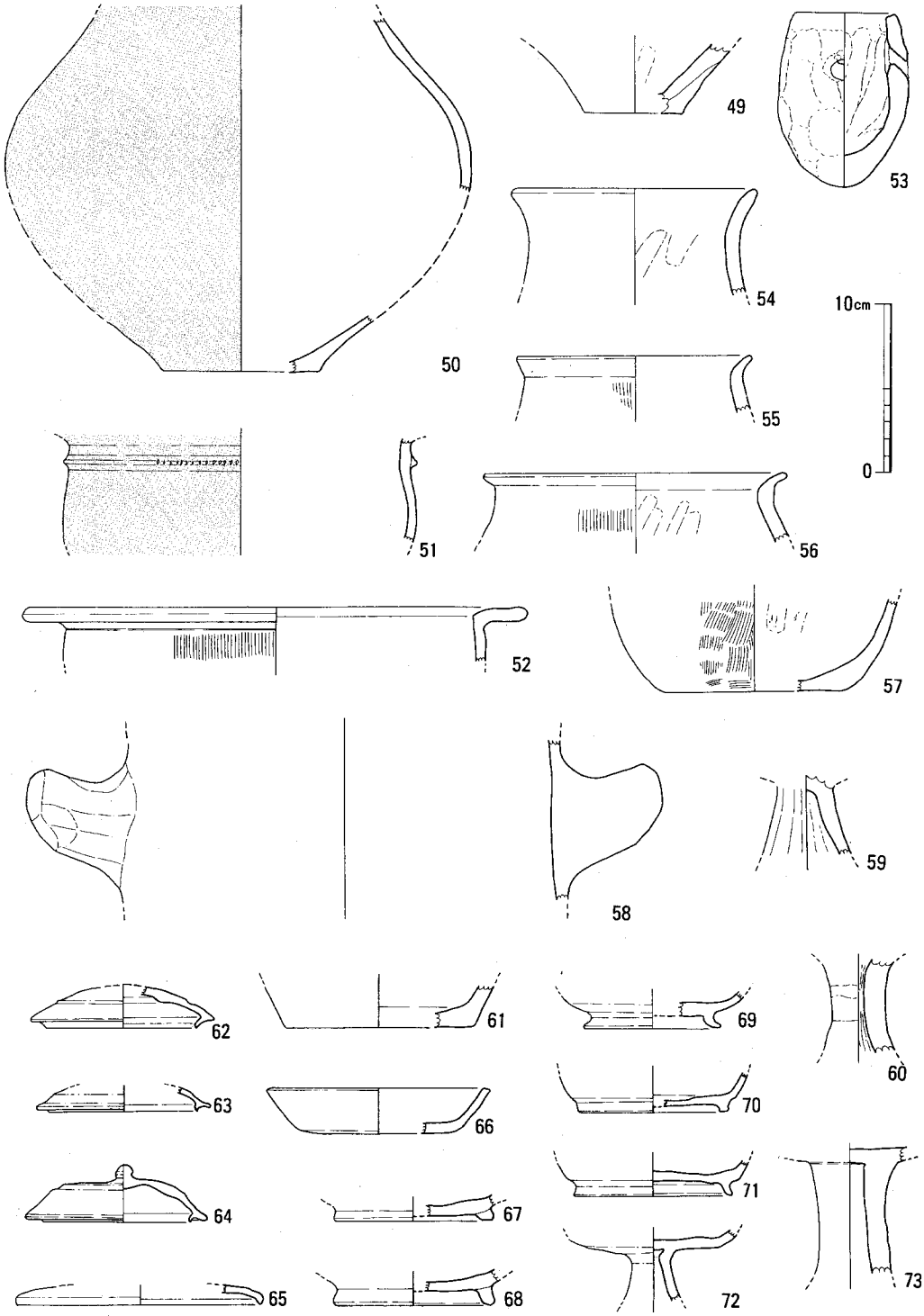


Fig.28.包含層出土土器実測図1(1/4)

は短く「く」字状に外反する。調整は外面が縦ハケ目、内面はナデ。56は口径17.6cm。口縁部は短く直口して「く」字状に外反する。外面は縦ハケ目、内面はヘラズリ後にナデ調整。胎土には砂粒を含む。57は底径11cmの甕底部で、胴部は長胴になろう。58は甑。太い把手は短く上方に張り出す。胎土には石英砂と雲母を多く含む。59・60は高杯の脚部である。59は脚部が短くラッパ状に開く。内外面共にナデ調整。胎土は良質で、赤褐色。60は脚中央部が小さく窄まる。胎土には小～中砂粒を多く含む。

61～73は須恵器である。61は底径11cmの壺で、調整は外面がヨコナデ、内面はナデ。62～65は坏蓋。62は口径10.8cmで、身受けの返りは鋭角的に内傾する。天井部は丸く、体部中位に凹線状の稜がつく。63は口径10.2cm。身受けの返りは直口ぎみに短く立ち上がる。64は口径10.6cm、器高3.4cm。身受けの返りは短く内傾し、平坦な天井部には宝珠形の摘みがつく。調整は口縁部～体部がヨコナデで、天井部は外面がヘラケズリ、内面はナデ。65は口径14.4cmで、体部は平坦で、口縁部は小さく下方に摘み出す。66～71は坏身。66は口径13cm、底径8cm、器高2.8cm。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は平坦に整える。体部がヨコナデ、底部はナデ調整。67～71は高台付きの杯。高台は跳ね上げ気味のもの(69)と直線的なもの(67・68・70・71)があり、底

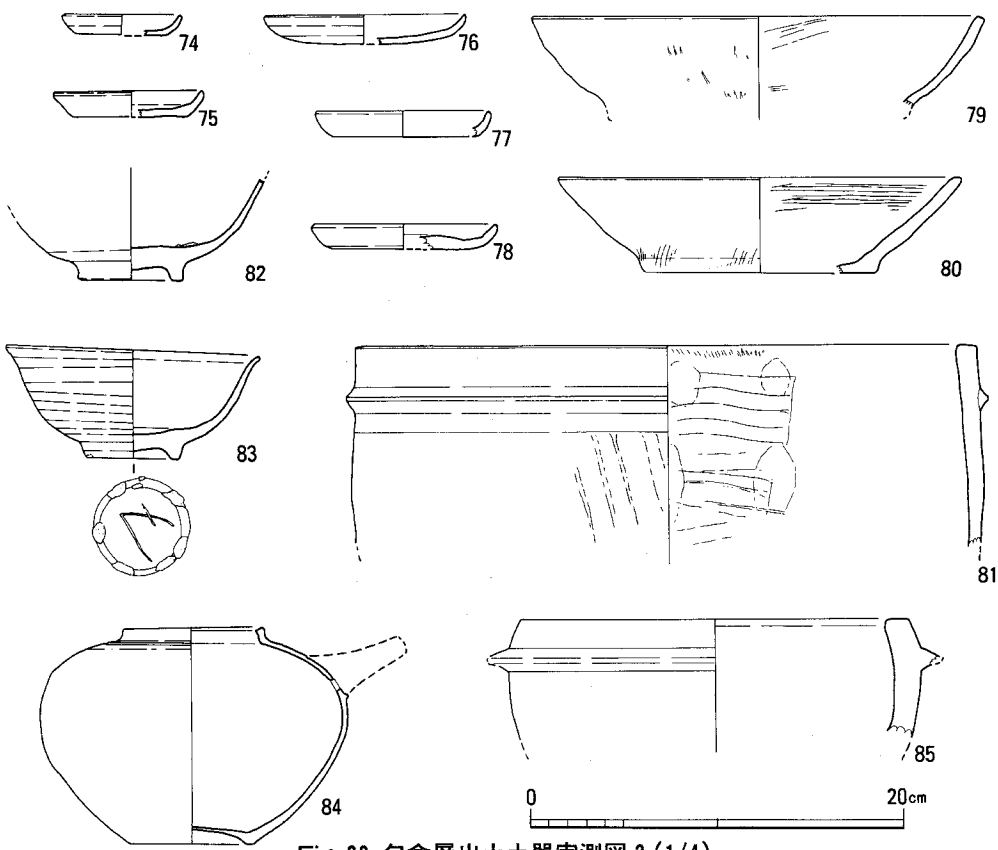


Fig.29.包含層出土土器実測図2(1/4)

径は８～9.2cm。体部はやや内弯ぎみに立ち上がろう。72・73は高坏。72は小型の高坏で、脚部は短くラッパ状に開く。外面がヨコナデ、内面はヨコナデ～ナデ。

74～78は土師皿で、口径が6.4～８cmの小型のものと9.4～10.8cmの大型のものがある。体部は短く内弯して立ち上がり、ヨコナデ調整。底部は糸切りであるが、76はヘラケズリ。79・80は瓦質の鉢。79は口径24.2cmで、体部は内弯ぎみに立ち上がり、口縁部は平坦に仕上げる。80は口径21.6cm、底径12.6cm、器高5.1cm。体部はストレートに外反する。胎土には砂粒を含む。81は口径33cmの瓦質の火舎。体部は直口して立ち上がり、口縁部直下には１条の三角凸帯が巡る。84は注口部と把手を欠く素焼き陶器の土瓶で、口径7.5cm、底径6.6cm、器高11.6cm。

82・83は李朝白磁碗である。82は底径5.6cmで、青みの透明釉が全面に施釉されている。胎土は

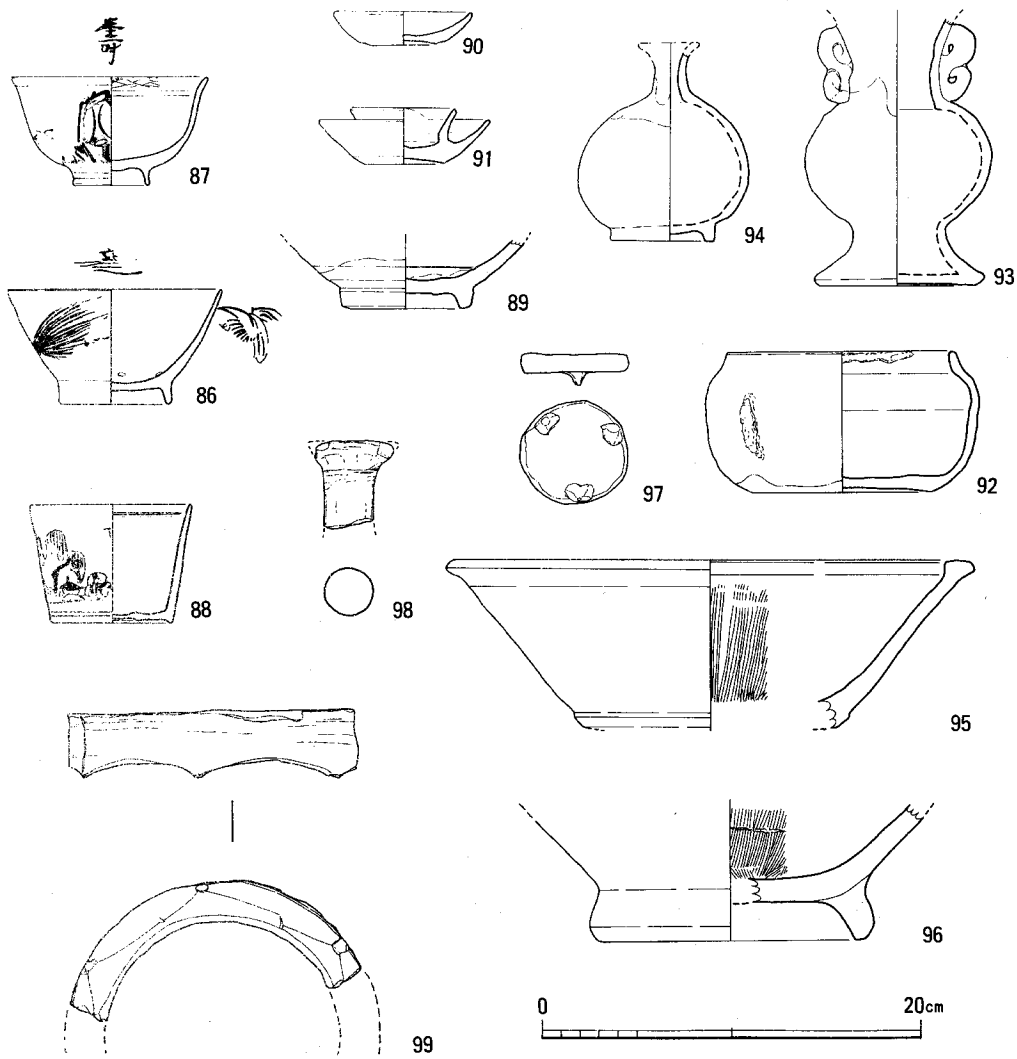


Fig.30.包含層出土土器実測図３(1/4)

白色でよく溶融し、見込みと畳付には砂目跡が４ケ残る。83は口径13.5cm、底径５cm、器高6.1cm。透明なうす灰色釉を全面に施釉するが、細かい氷製がある。見込みに４ケ、畳付に５ケの砂目跡が

Fig.31.包含層出土土製品実測図(1/2)

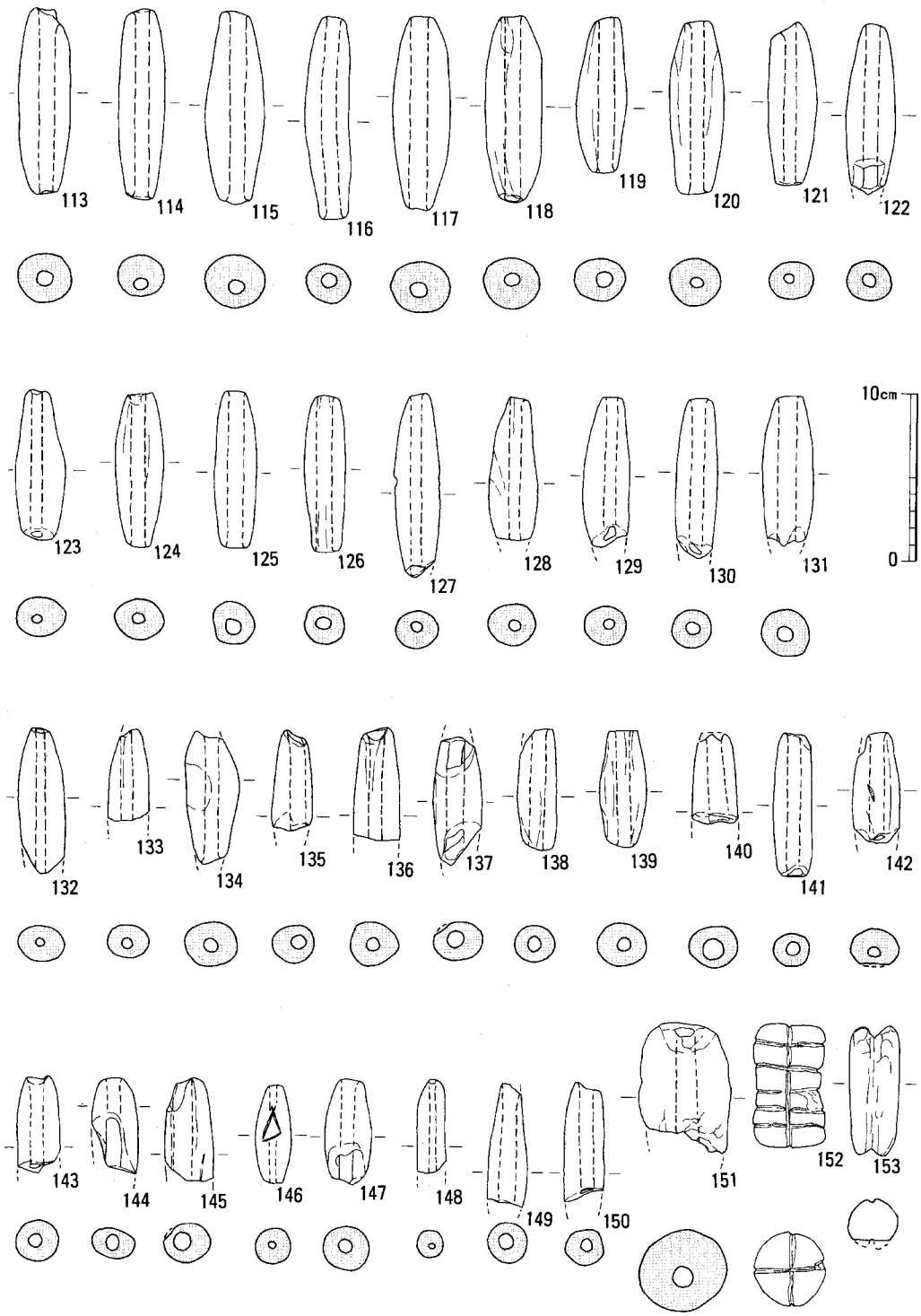


Fig.32.包含層出土土錘・石錘実測図(1／3)

残り、底面には窯印様の線彫がある。15世紀末のものであろう。

85は口径20.8cmの滑石製石鍋。体部は内弯して立ち上がり、口縁部は平坦に仕上げる。口縁部下には削り出しの三角凸帯が1条巡る。調整は丁寧な研磨。

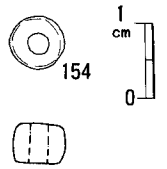


Fig.33.包含層出土玉実測図(1/1)

86～88は肥前系染付磁器。86は端反り口縁の碗で、蓋が付こう。口径10.4cm、器高5.8cm。87は所謂「広東碗」で体部に鳥と稲束、見込みに波と舟を描く。口径11.3cm、器高6.2cm。88は口径8.4cm、器高6.3cmの蕎麦猪口で、体部には山水を描く。

89～96は陶器。89と90は燈火皿で、89は褐色釉、90は黄色釉を施す。89は口径7.4cm、器高1.9cm。90は口径9cm、器高3cm。91はくすんだ白色釉の碗で、内底が輪状に釉ハギされる。92は褐釉の鉢で、口径12.2cm、器高7.6cm。93は褐釉白彩の長頸壺で、底径5.6cm。底部は糸切り後に刳り込み高台。94は緑釉白彩の長頸壺で、底径9.1cm。95～96は無釉の擂り鉢。胎土は赤褐色で、やや硬質。95は口径28cm、底径13.4cm。96は底径15cm。97は径5.5cmのハマ。98はトチンでケズリにより形成。99は環状の焼台で、ハリ先に褐釉が付着する。100～103は鉛かホウシャを用いた黄褐をベースに緑釉、褐釉をたらす楽焼き系の人形。100・101は童子が犬（チン?）を抱き、博多では「ねぶり（おしゃぶり）人形」等と称された。100は高さ8.5cm、幅3.1cm、厚さ2.5cm。101は高さ8.5cm、幅3cm、厚さ2.5cm。102は高さ5cm、幅5.2cm、長さ6.7cmの鳩笛。103はおはじきの草覆で、長さ2.8cm、幅2cm、厚さ7mm。104は手捏ねの「猿回し」人形で右肩に猿、左手に笠を持つ。105～112は型抜きの素焼き製品。105・109は童子の頭部。105は幅は2.5cmで、丸型の面相に特徴がある。109は博多中の子系の童子人形で、瓜ざねの面相が特徴。106は恵比寿か大黒の面でピンク、青の顔料が残る。107はミニチュアの燈篭で高さ4.1cm。108は馬の置物。110・111はミニチュアの城の屋根と石垣。112は雲文を用いた置物の脚。

46～48と113～152は土錘。長さ5～6cmの小型品（137・138・140）、長さ7～9cmで径2～2.6cmの中型品（112～121）と長さは5.5～7.5cmで径が3.5cmの大型品(151・152)に3大別できる。大型品は有孔のものと無孔で縦横に凹線を彫んだものがある。重量は小型品が13～20g、中型品が25～50g、大型品が65～90g。

153は滑石の石錘で長さ5.8cm、径2.1cm、重さは35.4g。縦に紐掛けの凹線が彫まれている。

154は滑石の臼玉で直径7.5mm。

157～165は銅銭である。

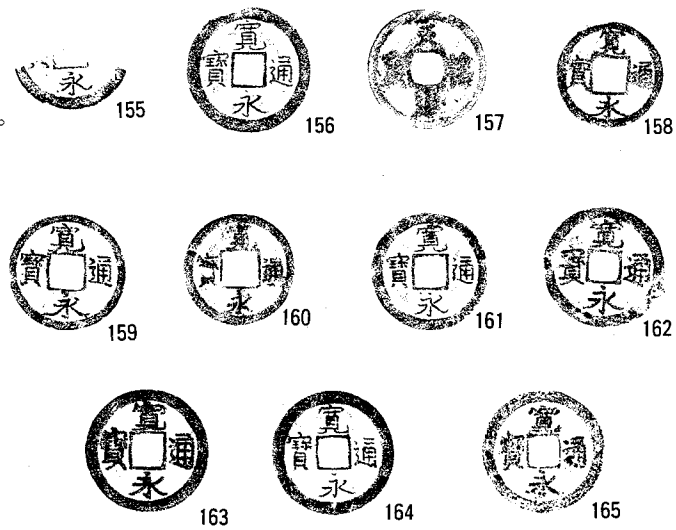


Fig.34.包含層出土銅銭拓影(2/3)

3．小　結

第22次調査では、遺物包含層上で土坑、石組遺構と溝を、その下層の古砂丘上で甕棺墓、土壙墓と方形周溝墓からなる墳墓群を検出し、合わせて２面の遺構面を確認した。

第１面で検出した土坑や石組遺構、溝は中～近世に比定されるものである。これらの遺構や包含層中から出土した陶器や窯道具は紅葉山周辺にあった高取焼に関するものが多い。従来は明治時代の中頃以降とされているが、共伴する肥前系磁器や燈火具等から江戸末～明治前半期にあげて考える必要があろう。楽焼や手捏ね製品等は江戸、名古屋、大阪等の城下の調査で類例が出土しており、広域に分布した玩具のひとつと云えよう。また、燈篭や城のミニチュアは「箱庭」に使用されたもので、今も前原市大字加布里の「二十六夜様」の行事等に見られる。

第２面では、甕棺墓17基、土壙墓１基と方形周溝墓１基を検出した。このうち甕棺墓は、弥生時代中期後半のものである。初めに甕棺墓に先行して土壙墓があり、中期後半に甕棺墓域の中心域を占める。更に古墳時代初め頃に方形周溝墓が造営されるとともに小児甕棺墓が営まれる。これは古砂丘の尾根上とその後背域に展開する藤崎遺跡における通有の墳墓域変遷を示す。東に繋がる第７・２・13次調査区では106基の甕棺墓が検出されている。本調査区を合わせると1,500m²程の狭い空間域に藤崎遺跡の甕棺墓の50％を越す123基の墳墓群が濃密な分布を示し、本調査区は甕棺墓盛行期の墳墓域の南西域を構成する。

一方、包含層中から出土した多くの土錘は、海浜に占地する藤崎遺跡の漁労集落的性格を如実に裏付けるものであり、周辺の調査区でも報告されている。

番号	出土地点(層名)	長さ(cm)	最大径(cm)	孔径(cm)	重さ(g)
4	SD－102	5.2＋α	2.1	0.6	21.0
5	〃	4.1＋α	2.1	1.0	12.9
6	〃	3.6	1.3	0.4	3.7
7	SX－113	4.6＋α	2.1	0.8	19.3
44	SD－209	8.6	1.5	0.6	25.7
45	〃	8.5	2.4	0.7	28.9
46	SP－226	6.8	2.0	0.6	19.7
113	包含層	8.2	2.3	0.6	39.6
114	〃	8.5	2.0	0.6	33.6
115	〃	8.6	2.6	0.7	42.2
116	〃	9.0	1.9	0.6	30.5
117	〃	8.6	2.5	0.8	51.0
118	〃	8.2	2.5	0.7	50.1
119	〃	6.9	2.3	0.7	24.4
120	〃	7.8	2.5	0.6	38.1
121	〃	7.3	2.1	0.5	27.2
122	〃	7.6＋α	2.0	0.6	24.0
123	〃	6.2	2.2	0.5	23.2
124	〃	6.9	2.1	0.6	25.1
125	〃	7.0	1.8	0.7	18.5
126	〃	7.0	1.8	0.7	19.3
127	〃	8.2	1.4	0.5	28.0
128	〃	6.4＋α	2.1	0.5	24.8
129	〃	6.7＋α	1.9	0.5	22.7

番号	出土地点(層名)	長さ(cm)	最大径(cm)	孔径(cm)	重さ(g)
130	包含層	7.1＋α	1.8	0.6	21.4
131	〃	6.7＋α	2.2	0.8	30.0
132	〃	6.6＋α	2.1	0.4	24.6
133	〃	4.1＋α	1.8	0.5	9.9
134	〃	5.9＋α	2.3	0.6	23.4
135	〃	4.6＋α	1.8	0.6	11.4
136	〃	5.0＋α	2.1	0.6	18.3
137	〃	5.7＋α	2.2	0.8	17.2
138	〃	5.4	1.7	0.6	13.0
139	〃	5.2	2.1	0.6	18.1
140	〃	4.0＋α	2.1	0.7	12.6
141	〃	6.4	1.6	0.6	16.0
142	〃	4.9＋α	2.1	0.6	15.4
143	〃	4.4＋α	1.9	0.6	13.0
144	〃	4.3＋α	1.9	0.6	9.6
145	〃	4.6＋α	2.1	0.8	16.6
146	〃	4.4	1.6	0.3	9.8
147	〃	4.7＋α	2.1	0.6	15.3
148	〃	4.2	1.2	0.3	7.2
149	〃	5.5＋α	1.8	0.7	13.9
150	〃	5.3＋α	1.7	0.6	15.1
151	〃	5.2	4.0	0.9	79.4
152	〃	5.5	3.1	－	64.6

Fig. 35 出土土錘一覧表

Ⅳ　第23次調査

1.　調査の概要

本調査区は福岡市早良区高取２丁目15～19番地にあり、古砂丘の後背地上に位置し、藤崎遺跡群の西南部にあたる。

調査は1992年10月26日より開始し、同年11月18日に終了した。調査面積は238㎡である。現地表より80～90cm掘り下げた標高1.8m前後で、溝、土抗、ピット等の遺構を検出したが近現代の攪乱が多く、遺構の保存状態は良好とは言えない。遺構面までの層序は表土、客土（30～40cm）、茶褐色砂層（30～40cm）で遺構面の暗褐色砂層となる。さらに30～40cm程度掘り下げた黄褐色砂層で上面でプランがわかりにくく、検出できなかった遺構を含む土抗、ピット等を検出し、これを下面とした。

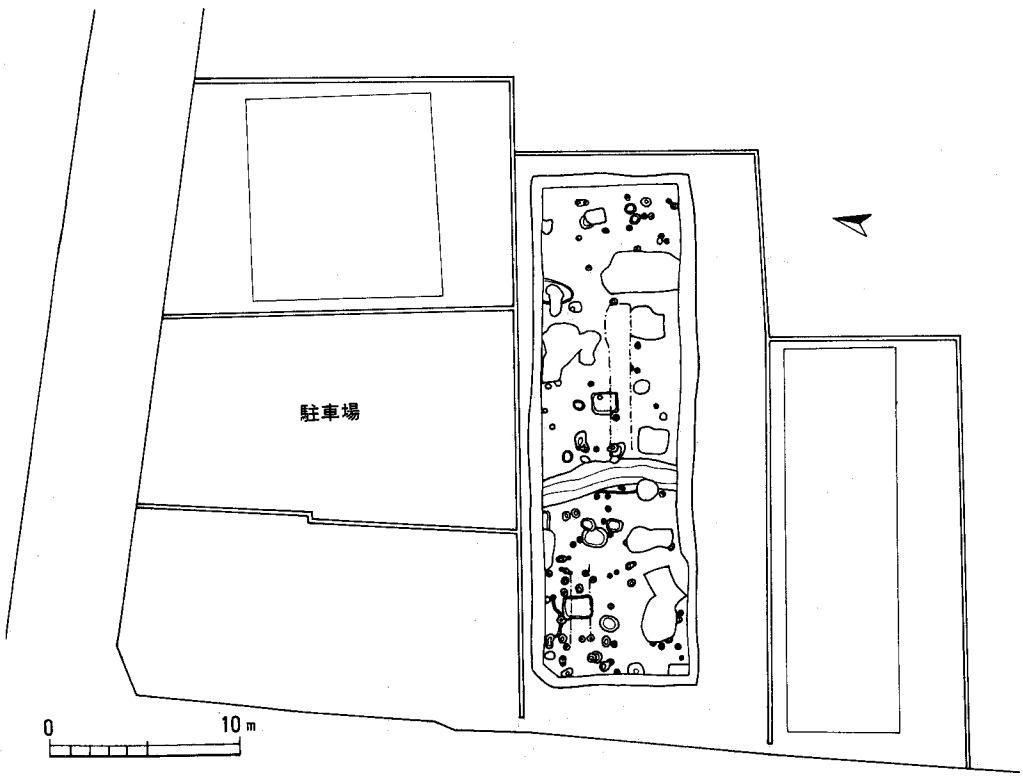


Fig.36.第23次調査区周辺現況図(1/400)

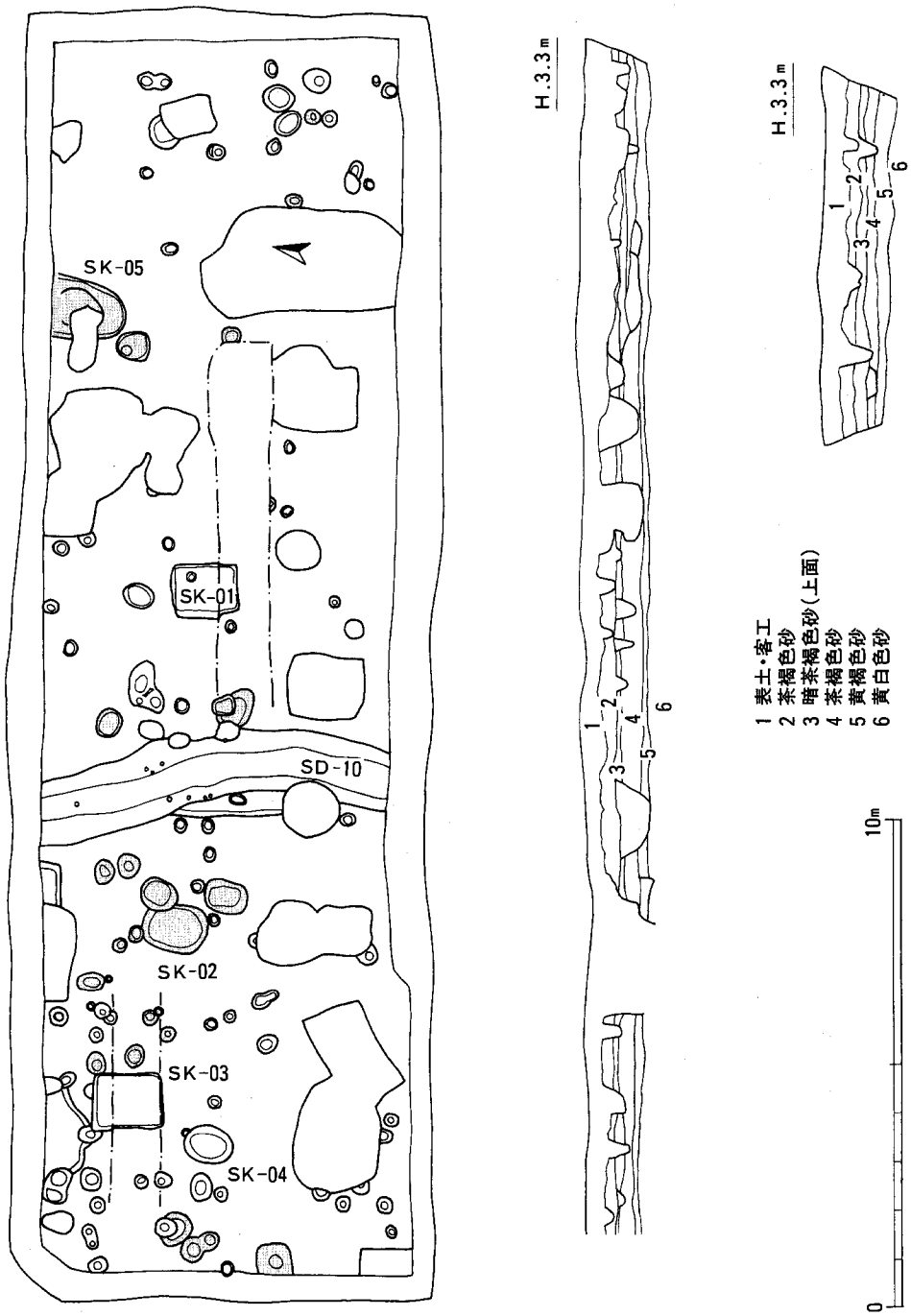


Fig.37.第2次調査区遺構配置図(1/150)

2．　調査の記録

溝（SD）

10号溝（Fig.38）

調査区中央、上面で検出した。南北に主軸をとり、やや東に蛇行している。幅150cm、深さ52cmを測る。

出土遺物（Fig.39 PL.20）

01は須恵器の蓋である。02・03は坏で、04は高坏の脚部である。いずれも混入品とおもわれる。05は同安窯系の皿で体部中位で屈曲する。釉はやや厚めにかかる。07は白磁の口縁で端部を平にしている。釉はうすくかかる。08は白磁の椀の底部で見込みに段を有し、その内側の釉を輪状のカキ取る。釉はうすくかかる。

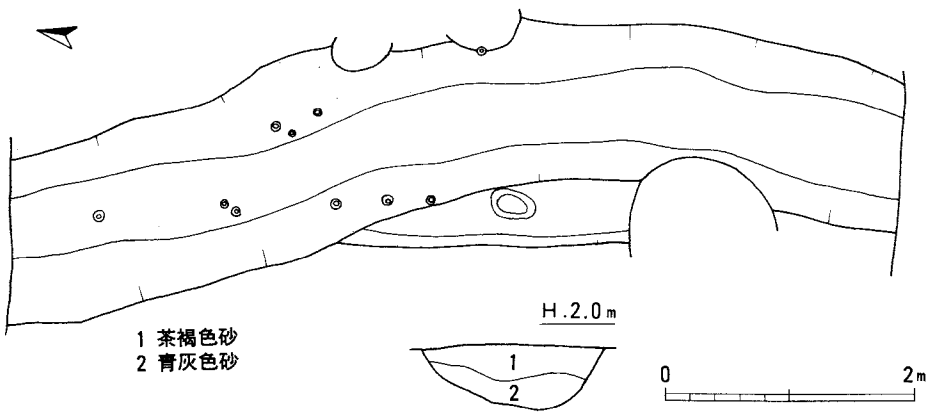


Fig.38.10号溝実測図(1/60)

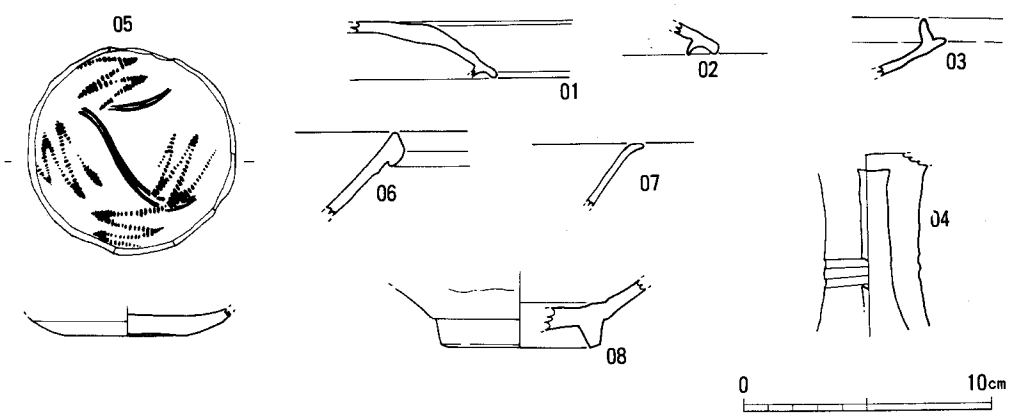


Fig.39.10号溝出土土器(1/3)

土坑（SK）

土坑は調査区上面、下面で合わせて５基検出した。また調査区中央の際に可能性のある１基が、わずかにかかるが、断定できない。

１号土坑（Fig.40 PL.19）

調査区中央に位置し、上面で検出した。平面形は長方形で、底部は平らである。長さ137cm、幅120cm、深さ20cmを測る。壁はほぼまっすぐに立ち上がる。隅より釘が出土しており、また土坑の掘り込み面が砂地であるにもかかわらず、壁が残ることから木の枠があった可能性がある。遺物は須恵器の蓋（Fig.42 09）が出土している。

２号土坑（Fig.41）

10号溝の西に位置し、下面で検出した。平面形は楕円形にちかく長さ133cm、幅97cm、深さ26cmを測る。遺物は土師器の椀（Fig.42 10）が出土している。

３号土坑（Fig.41 PL.19）

調査区西に位置し、上面で検出した。平面形は隅丸長方形で、長さ145cm、幅120cm、深さ22cmを測る。出土遺物はなかった。

４号土坑（Fig.41）

調査区西に位置し、上面で検出した。平面形は楕円形で、長さ104cm、幅77cm、深さ24cmを測る。出土遺物はなかった。

５号土坑（Fig.41）

調査区東、北壁に切られて位置する。上面でプランがわかりにくかったため、下面で検出した。平面形は楕円形とおもわれ、現状で残存する長さ135cm、幅131cm、残存する深さ10cmを測り、中央部を攪乱されている。遺物は高坏の坏部破片（Fig.42 11）が出土しているが、混入品であるとおもわれる。

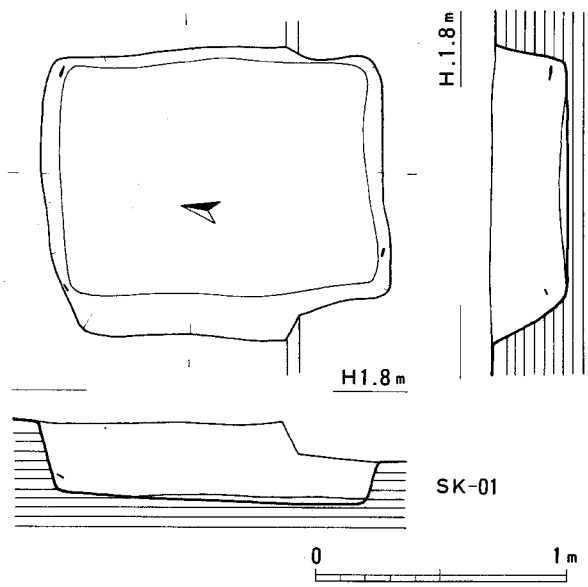


Fig.40.1号土抗実測図(1/30)

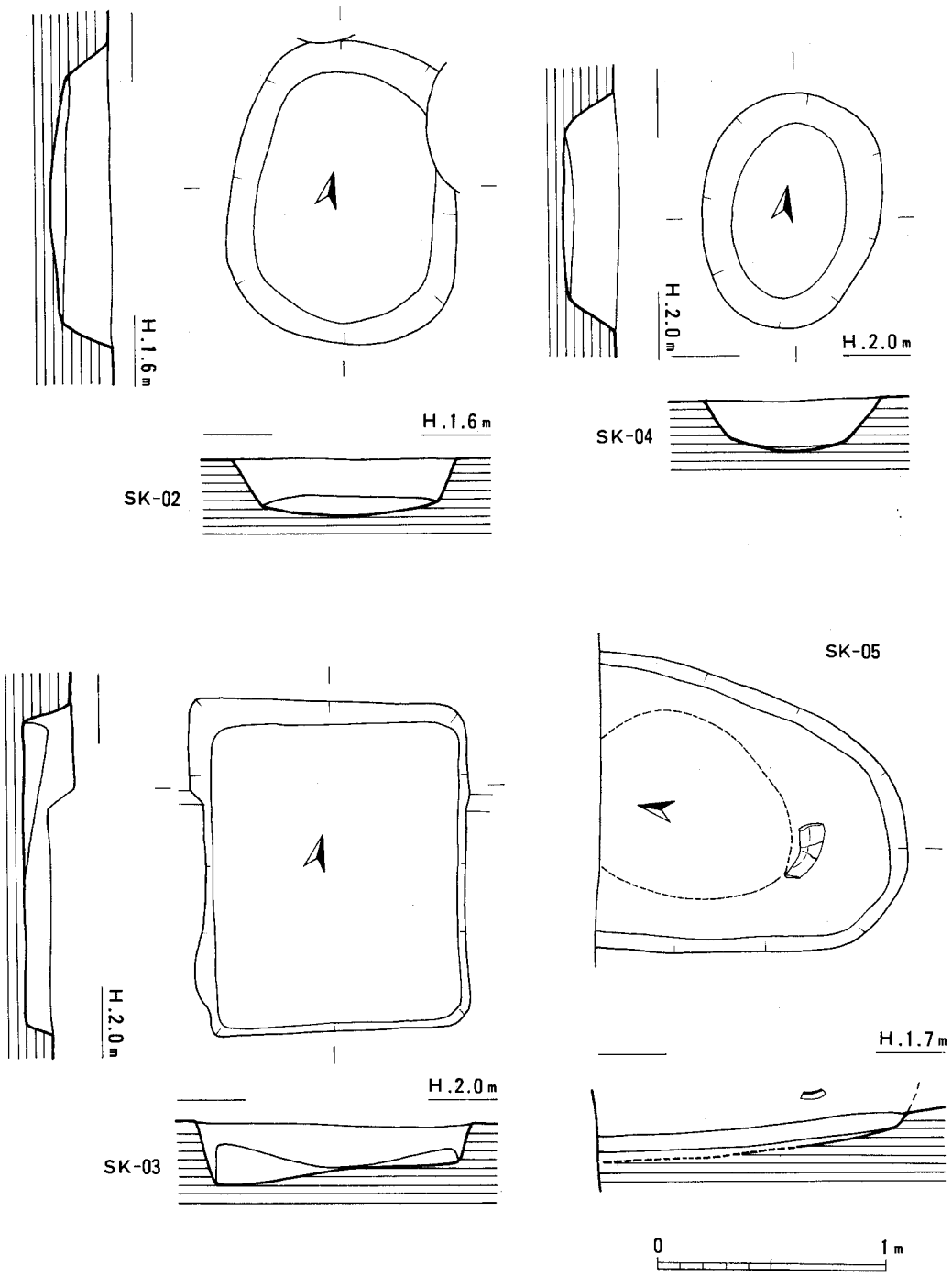


Fig.41. 2～5号土抗実測図(1/30)

出土遺物（Fig42･43 PL20）

09は１号土坑出土。須恵器の蓋で天井部ヘラ切りのあとヨコナデ、内面はナデ。下半部は内側面ともヨコナデ。復元口径14.6cm、器高2.5cmを測る。10は２号土坑出土。土師器の椀で外側ナデ、内側ヘラ状工具によるナデ。底部にヘラ記号？がある。復元口径16.0cmを測る。11は５号土坑出土。高坏で外面は口縁部はヨコナデ、上半部は横方向のハケメ、下半部は縦方向のハケメ。内面はハケメ後、暗文を施す。口径は32.4cmを測る。12は上面のピットより出土。須恵器坏で体部下半部は回転ヘラケズリ、他はヨコナデ。復元口径12.0cmを測る。混入品とおもわれる。13は下部のピットより出土。須恵器坏で体部下半は回転ヘラケズリ、内面ヨコナデ。14は土師器の把手である。15～21は包含層出土。15～17は須恵器坏で15は体部外面下半部を回転ヘラケズリ、他をヨコナデ。復元口径10.2cmを測る。16は口縁部内外面ヨコナデ。復元口径10.8cmを測る。17は口縁部内外面ヨコナデ。復元口径10.0cmを測る。18は須恵器の椀で口縁部及び体部内外面ともヨコナデ。底部は回転ヘラケズリ。復元口径14.4cm、器高4.6cm、復元高台径10.0cmを測る。19は高坏の脚部の小片で内外面ともヨコナデ。20は甕の口縁部で口縁部内外面ともヨコナデ。肩部はタタキ。小片で口径等はわからない。21は飯蛸壷で内外面とも指オサエ後ヨコナデ、底部内外面とも指オサエ。外面から上方へ穿坑している。その横にはヘラ記号？がある。口径5.8cm、器高11.2cmを測る。出土時には内部に焼土が詰まっており、調査時に炉跡等の遺構を見落とした可能性がある。22・23は攪乱土中より出土。22は甕で口縁部外面はハケメ後ヨコナデ、胴部外面ハケメ、内面ヨコナデ。口径23.6cmを測る。23は須恵器の蓋で天井部ヘラ切り、内面ナデ、下半部内外面ともヨコナデ。復元口径12.8cm、器高4.9cmを測る。

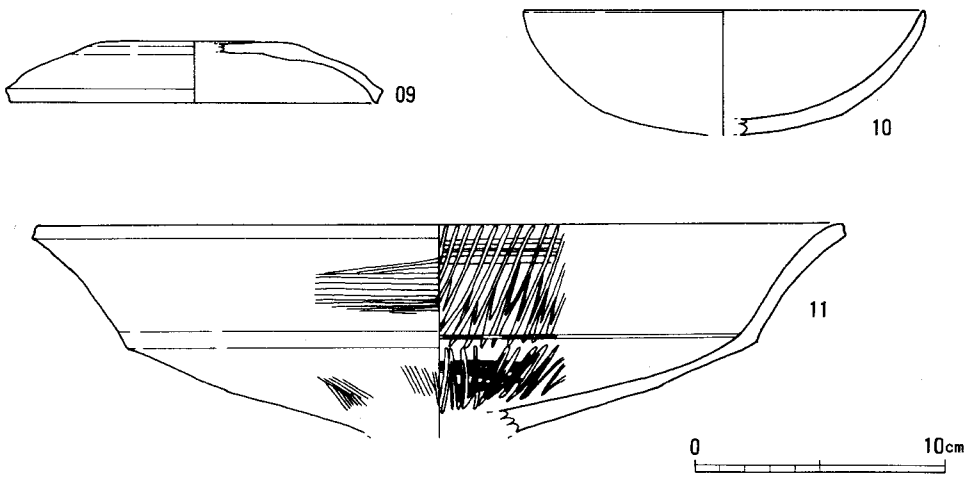


Fig.42.出土土器実測図①(1/3)

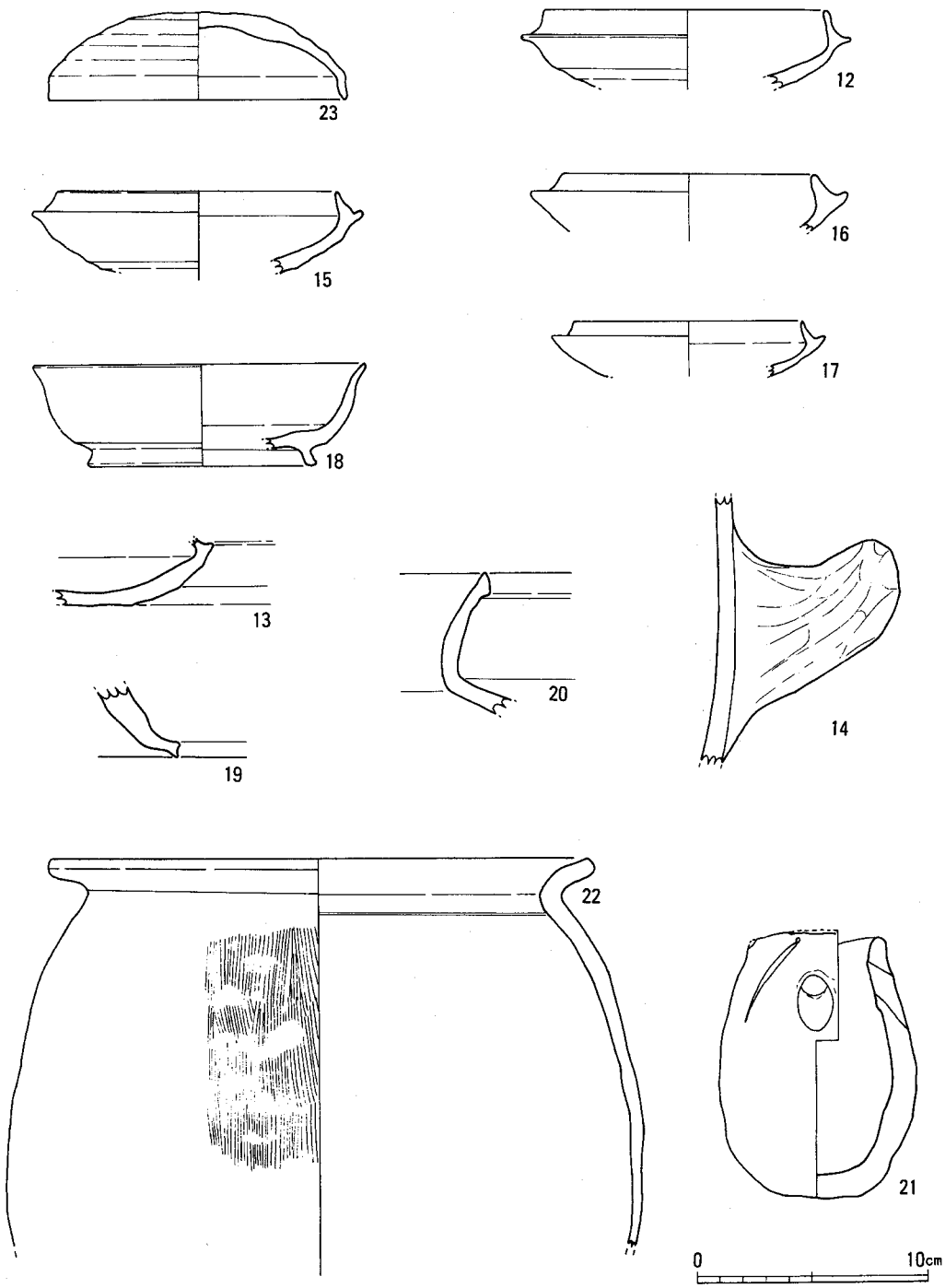


Fig.43.出土土器実測図②(1/3)

3．小　結

今回の第23次調査では、土坑５基、溝１条、ピット等を検出した。このうち、１号土坑は内部を攪乱させており、詳しいことはいえないが、三方の隅より釘が出土しており、また攪乱土中より木質が付着した釘も出ており木枠の存在した可能性が高く、木棺墓の可能性も考えられる。時期については、須恵器の蓋が出土しているが、混入品とおもわれ時期の判断にはならないが、まわりの状況から考えて中世以降とおもわれる。

10号溝は出土遺物等から12世紀後半から13世紀代のものと考えたい。この溝は形態、規模、方位等が第16次・18次調査で検出された溝とよく似ており、何らかの関連が考えられる。直線距離にして約130m離れているため、安易なことはいえないが、接続する可能性も一部あるとおもわれる。

また溝は、調査区外の南へさらに延びており、遺跡の範囲が南へ広がるのは確実である。

藤崎遺跡第20次調査地点の地形と地質

磯　望（西南学院大・文）・下山正一（九州大・理）

1．藤崎遺跡周辺の地形と地質

藤崎遺跡は、金屑川右岸から西新・鳥飼八幡宮・西公園へと繋がる海岸砂丘列の西端に位置する。藤崎から西新にかけての砂丘は、祖原山などの第三系の基盤岩からなる残丘群の博多湾側の線を連ねるように分布し、砂丘上には弥生期～古墳期の遺構や遺物が広く散布している。現在はこの砂丘の高まりの部分を中心として、藤崎～西新の商店街が位置している。

この砂丘列の基盤となる地質は、基盤の第三系の堆積岩と、これを直接不整合関係で履う層厚数m程度の沖積層の「箱崎砂層」から構成されている。箱崎砂層は、縄文海進期およびそれ以降に博多湾沿岸に堆積した砂層で、藤崎から西新にかけては下部層から上部層にかけて海浜砂から風成砂へと変化することが多い。このことは沿岸州や後浜などの砂浜が基盤岩の上に直接形成されはじめたのち、砂丘が形成される環境に移行したことを示している。

藤崎から西新にかけての砂丘列の下には、博多湾沿岸に広く分布する縄文海進期の海成層「博多湾シルト層」をほとんど挟まない。この地域の砂浜形成以前に、明瞭な溺れ谷を形成する時期が存在しなかったことを意味する。これに対して藤崎遺跡の南側に位置する高取から祖原山にかけて点在する残丘の南側の低地は、縄文海進期に現在の金屑川河口付近から南東方向に溺れ谷を形成し、博多湾シルト層の存在する海域となったことが認められている。この付近では縄文海進のピーク後も干潟を構成して陸化が遅れていた。（図１）。

藤崎遺跡第20次調査地点の東側には、第三系の基盤岩からなる独立小丘があり、この丘から北西方向には海抜高度４m前後の砂州状の高まりが室見川の河口方向に向かって300m程のびている（図２）。調査地点は、上述の砂州状の高まりの中軸から少し南にはずれた砂丘の端から金屑川河口付近の縄文海進期の海の湾入部と接する位置にあたる。このため、この地域は両方の環境の重合する場となり、このことは次にのべる堆積物の調査からも明らかとなった。

2．調査地点の地質断面と堆積環境

藤崎遺跡第20次調査地点から得られた地質断面を図３に示す。この地点の断面図の砂層は、最上部の盛土部分を除くと、すべて沖積世の縄文海進最盛期以降に堆積した箱崎砂層に対比される地層である。しかしながらこの地点の箱崎砂層は、堆積環境の差異などを反映する層相上の特徴から、更に細分できる。ここでは、細分された地層の特徴について記載し、その堆積環境と年代について検討する。

礫層：

海抜高度0.65～0.80m。礫は第三系砂岩のやや扁平な亜円礫～亜角礫からなり、あまり長距離を移動しなかったことを示している。礫径は数cm～十数cm程度。これらの事実からは礫は調査地点東側の独立小丘付近から波浪の作用で運搬されたものであろう。

海浜砂層：

海抜高度0.80～1.35m。比較的淘汰の良好な花崗岩質の砂からなる。西北西方向に3度ほど傾く斜層理が認められ、西北西方向から押し寄せた波浪によって堆積した海浜の砂層であることがわかる。

シルトまじり砂層：

海抜高度1.35～2.0m。花崗岩質の粗砂を主体とするが、酸化鉄の斑紋を含む。斜層理は認められない。これらの特徴は波浪の影響よりも堆積後に陸域で水の移動の影響を示唆しており、後浜の堆積物であろう。

褐色風成砂層：

海抜高度2.0～2.4m。酸化鉄を含む褐色の砂と、黒色の腐植が波状ないしは皺状構造を形成する。この構造は主としてレス起源の細粒風成堆積物に腐植が吸着して形成されたものである。海抜高度2.2m付近には炭化木片が混入している。この木片のC^{14}年代は2,370±70y.B.P.(GaK-15080)である。

灰褐色風成砂層：

海抜高度2.4～2.75m。砂層中には黒色腐植の吸着による皺状構造が発達し、風成の堆積物であることを示している。弥生期の土器片も混入する。下部の褐色砂層と比較すると、砂表面の酸化鉄は見られない。

黒褐色腐植質砂層：

海抜高度2.75～3.0m。黒色腐植が集積した風成砂層。出土した遺物から、7～8世紀の生活面に相当するものと考えられる。一部にこの時期の攪乱層も見られる。

人工盛土：

海抜高度3.0～3.6m。主として褐色の砂の盛土から成るが、一部にコンクリート片なども挟む。

これらの層序から、調査地域の縄文海進最盛期以降の地形環境は次のように推移したものと考えられる。縄文海進最盛期には、この地域は西側から海が入りこむ位置にあたり（図1）、調査地点東側の第三系の残丘は波に侵食されて削られるとともに調査地点では亜円礫を堆積させた。箱崎砂層の堆積しはじめる3,000年前頃には、この残丘から北西方向に砂州が形成されるようになり、次第に陸域に変わって行った。砂州が陸域になると、しばらくして砂丘砂が堆積するようになった。その年代は2370±70年前以前である。風成砂の堆積は7世紀までは継続したが、その後は堆積していない。

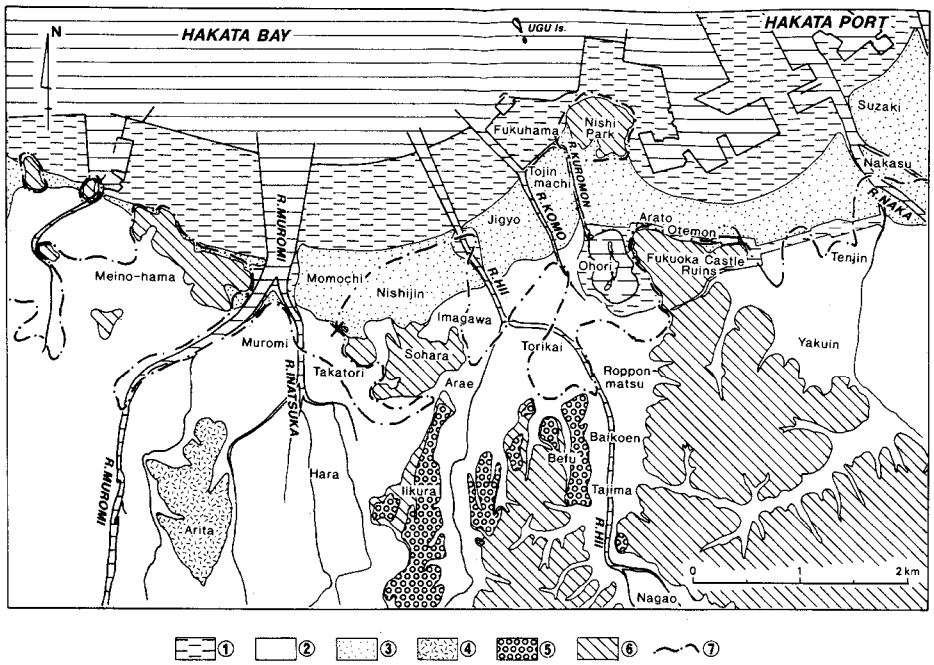


図 1　調査地域周辺の第四紀地質図

凡例

1：明治期以降の埋立地　2：住吉層　3：箱崎砂層　4．須玖火山灰層

5：仲原礫層　6：基盤岩類　7：縄文海進最盛期海岸線

×印は藤崎遺跡第20次調査地点の位置

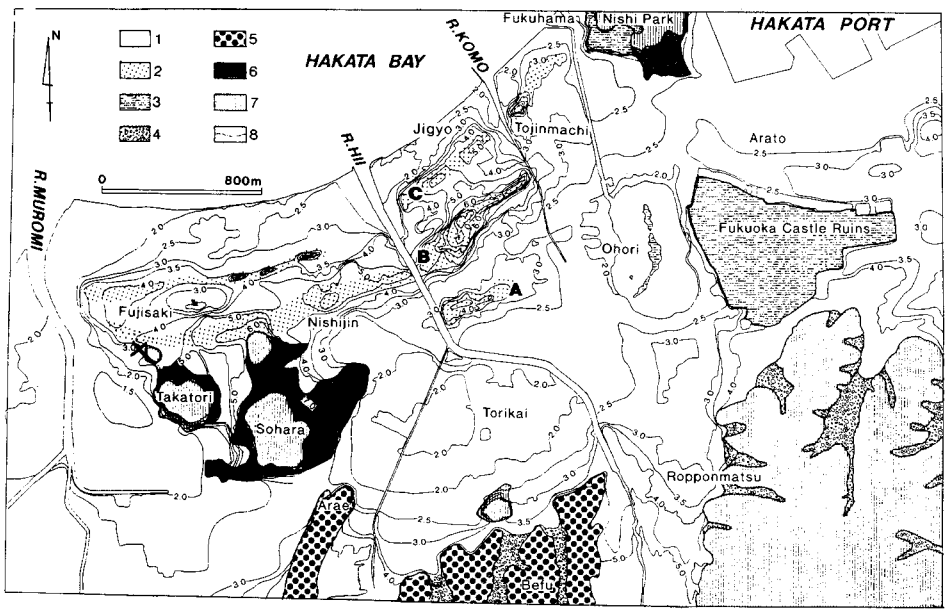


図 2　調査地点周辺の地形学図

凡例

1：沖積低地　2：海岸砂丘（A・B・Cは砂丘例）　3：人工改変地

4：谷底平野　5：中位段丘　6：麓層面　7：丘陵　8：等高線

×印は藤崎遺跡第20次調査地点の位置

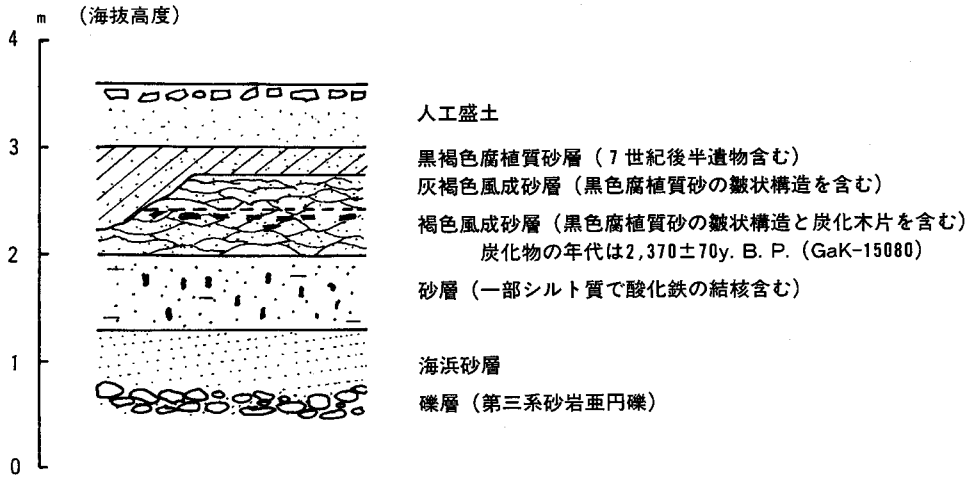


図 3　藤崎遺跡第20次調査地点の地質断面図

参考文献

下山正一・磯　望・野井英明・高塚潔・小林茂・佐伯弘次（1991）福岡市鳥飼低地の海成第四系と更新世後期以降の地形形成過程，九大理研報地惑，vol.17，p．1～23.

福岡市教育委員会（1993）藤崎遺跡 8 ―藤崎遺跡第20・21次調査―，福岡市埋蔵文化財調査報告書第338集，pp．74

PLATES

PL.1

遺跡周辺航空写真

(1)調査区北側第1面全景(東より)

(2)調査区南側第1面全景(東より)

PL.3

(1) 101号井戸跡（東より）

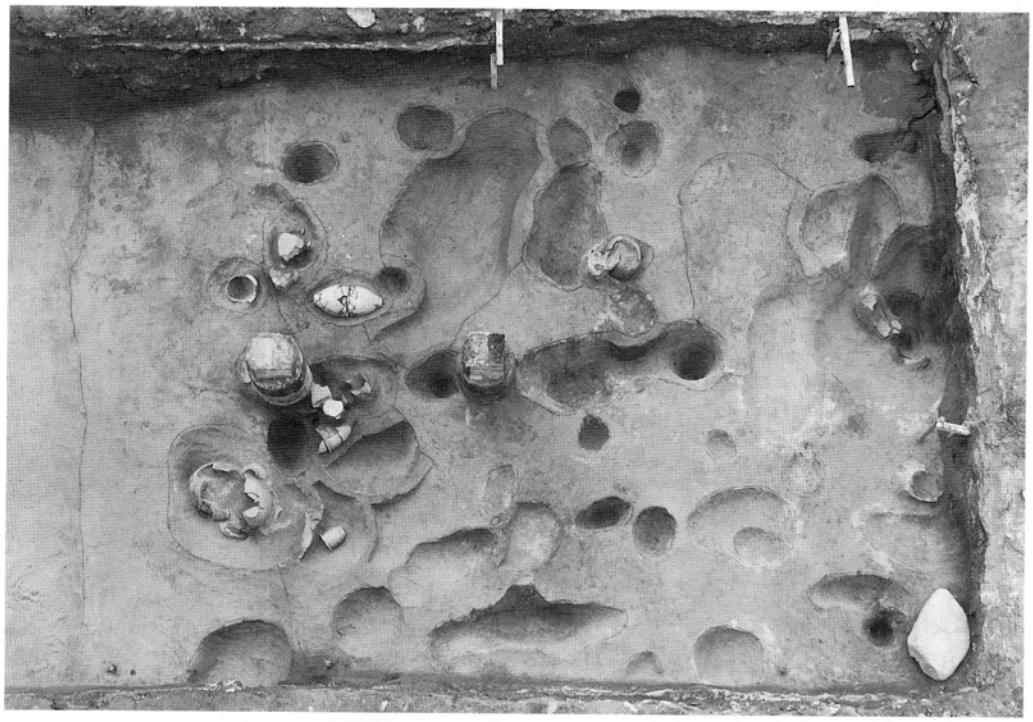
(2) 103号石組遺構（東より）

(3) 102号溝（東より）

(1) 106号土坑(東より)

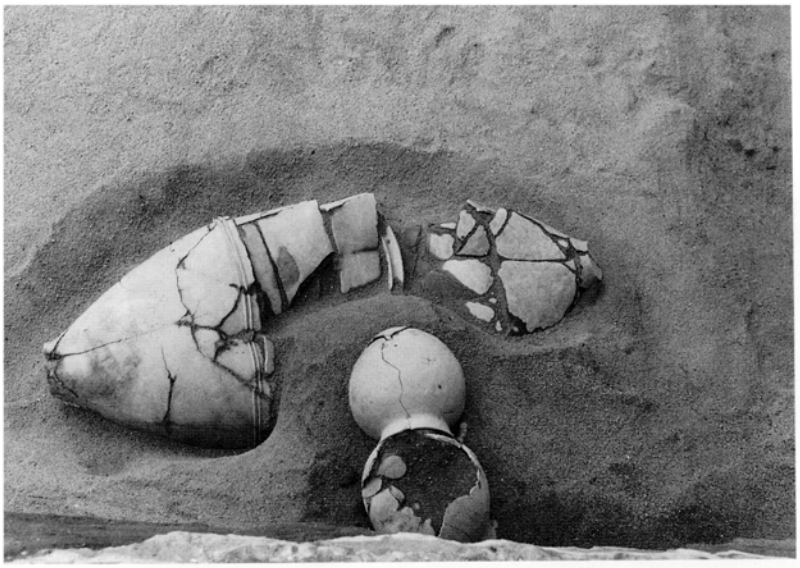
(2) 107号土坑(東より)

(3) 109号土坑(北より)



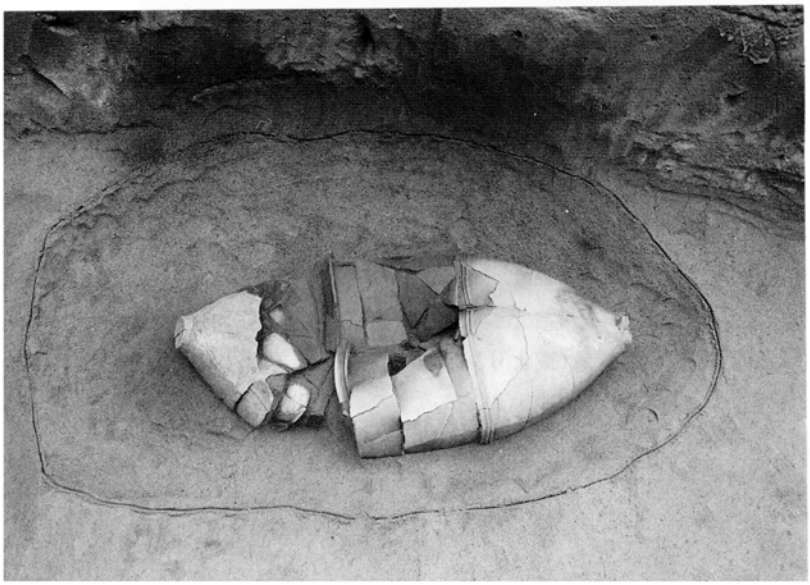
(1)調査区北側第2面全景(東より)

(2)調査区南側第2面全景(東より)



(1) 201・202号甕棺墓(西より)

(2) 201号甕棺墓(北より)

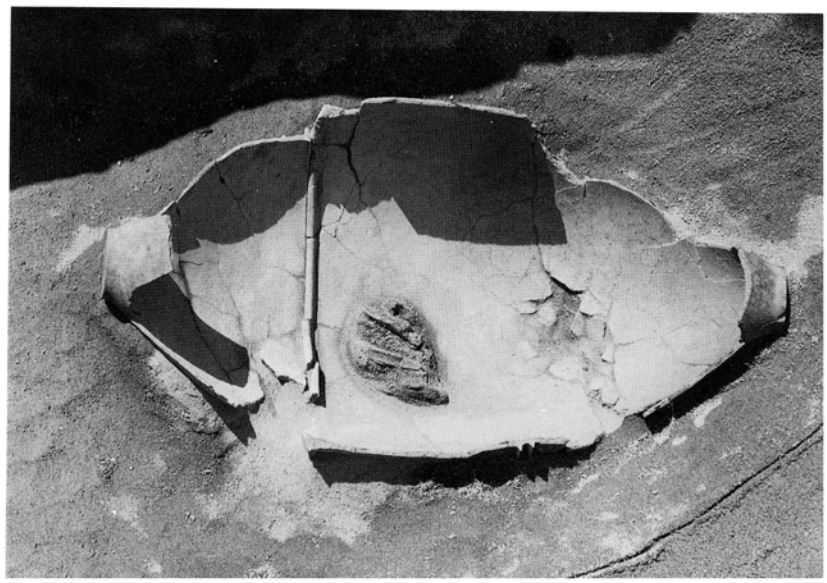


(3) 202号甕棺墓(東より)

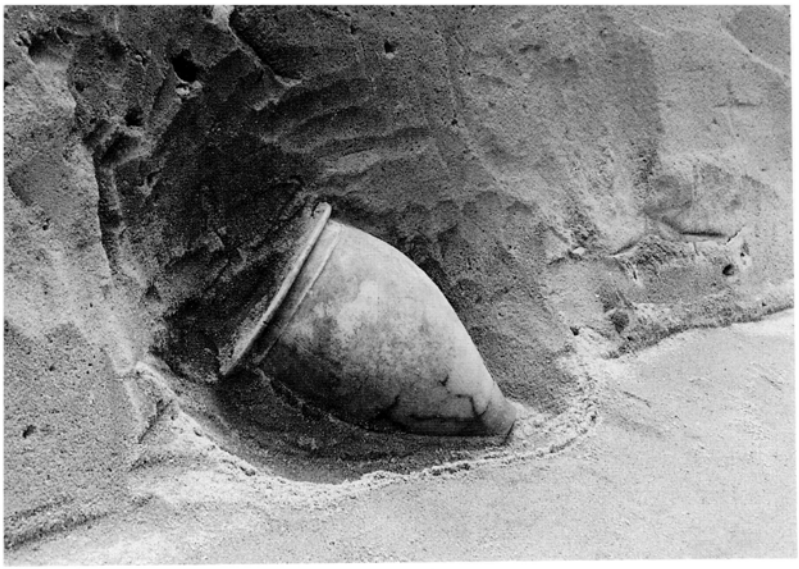
PL.7

(1) 202号甕棺墓人骨検出状況(東より)

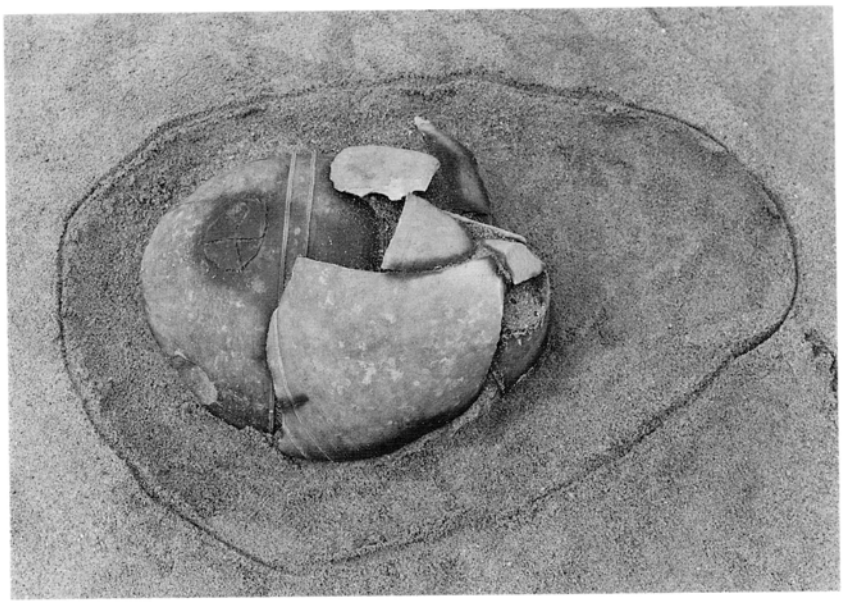
(2) 203号甕棺墓(東より)



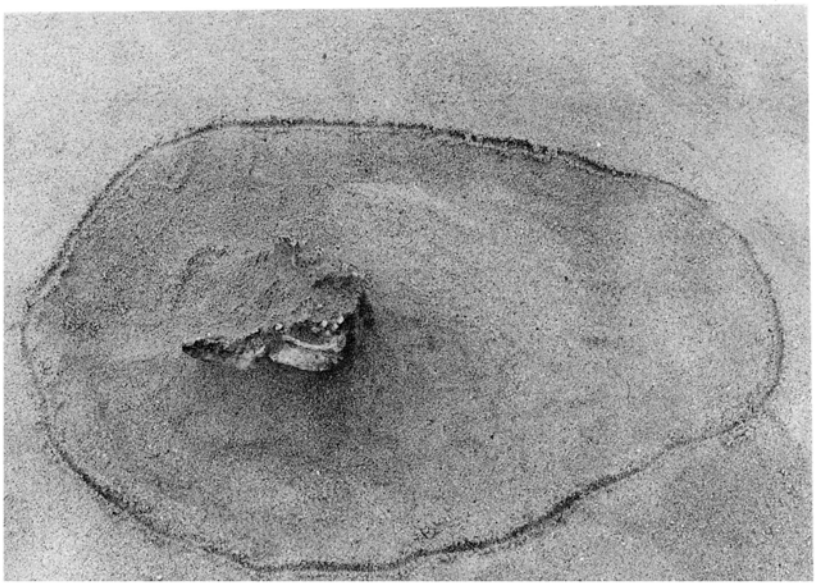
(3) 203号甕棺墓人骨検出状況(東より)



(1) 204号甕棺墓(西より)

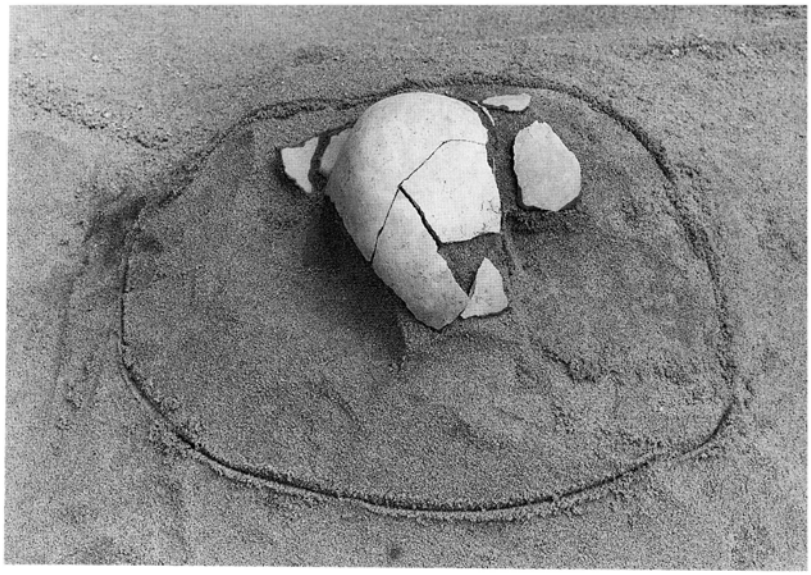


(2) 206号甕棺墓(西より)

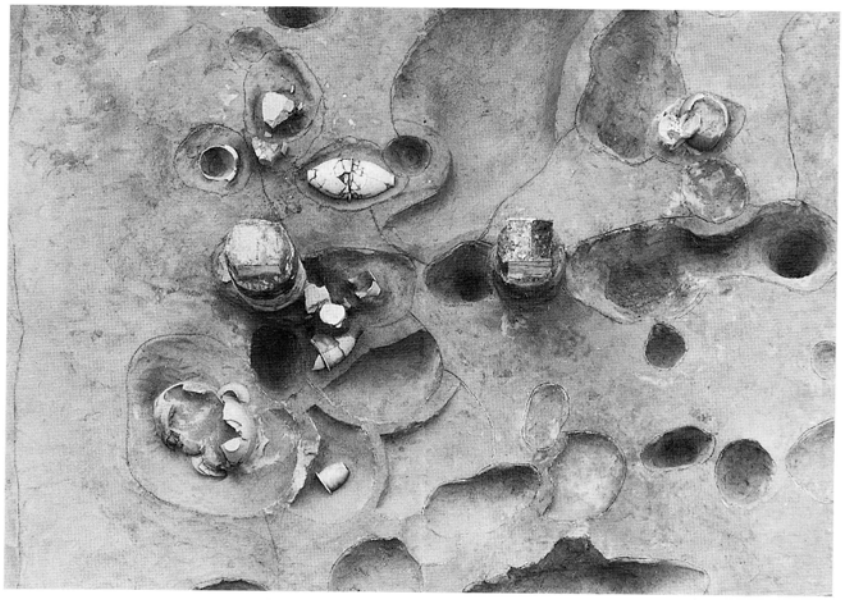


(3) 206号甕棺墓人骨検出状況(西より)

PL.9



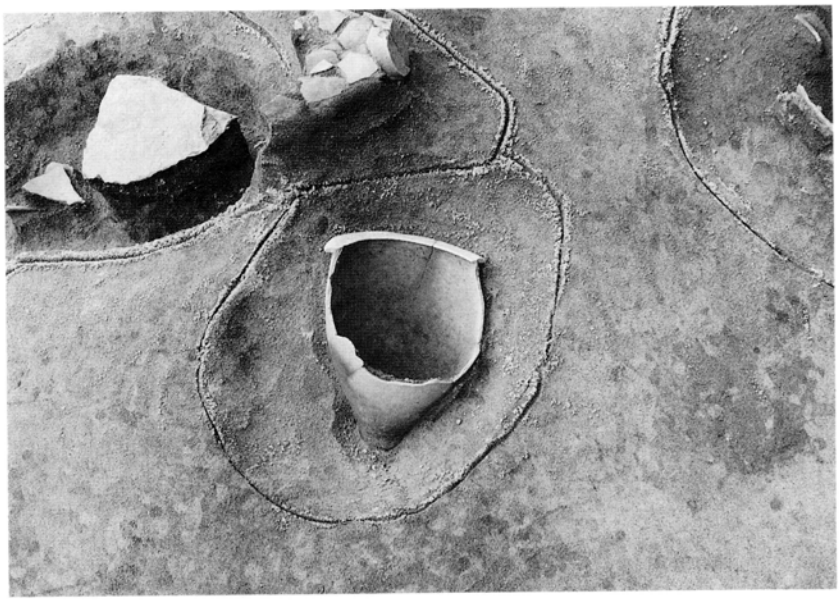
(1) 207号甕棺墓(北より)



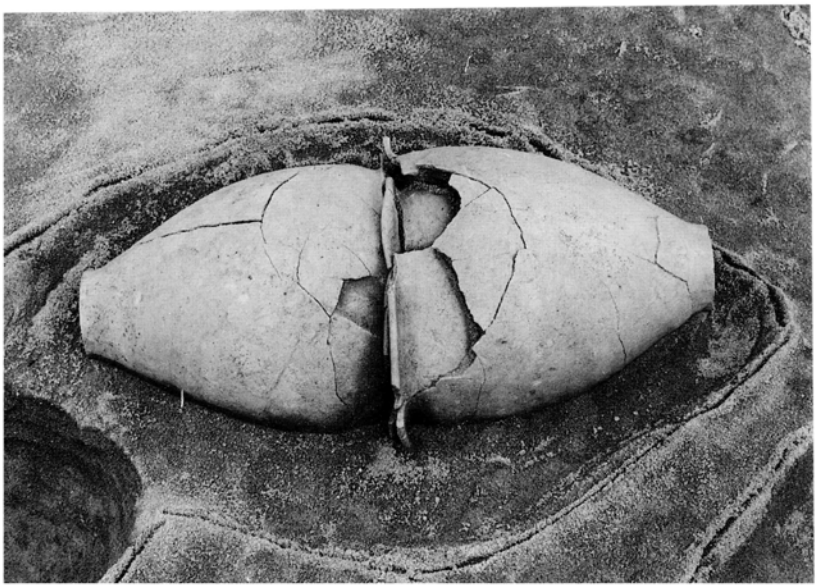
(2) 210~213・215~220号甕棺墓群(北より)

(3) 215~220号甕棺墓群(東より)

(1) 210～212号甕棺墓群（南より）



(2) 210・212号甕棺墓（南より）

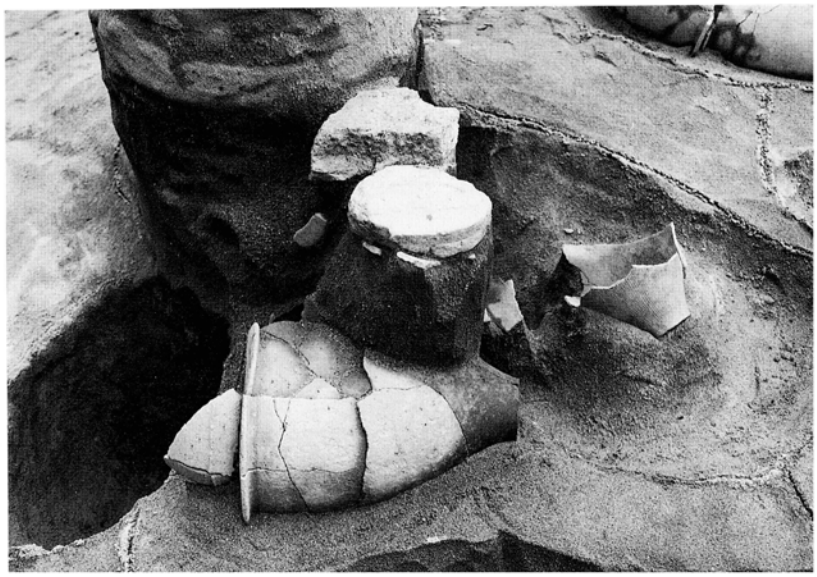


(3) 211号甕棺墓（西より）

PL.11

(1) 213号甕棺墓(西より)

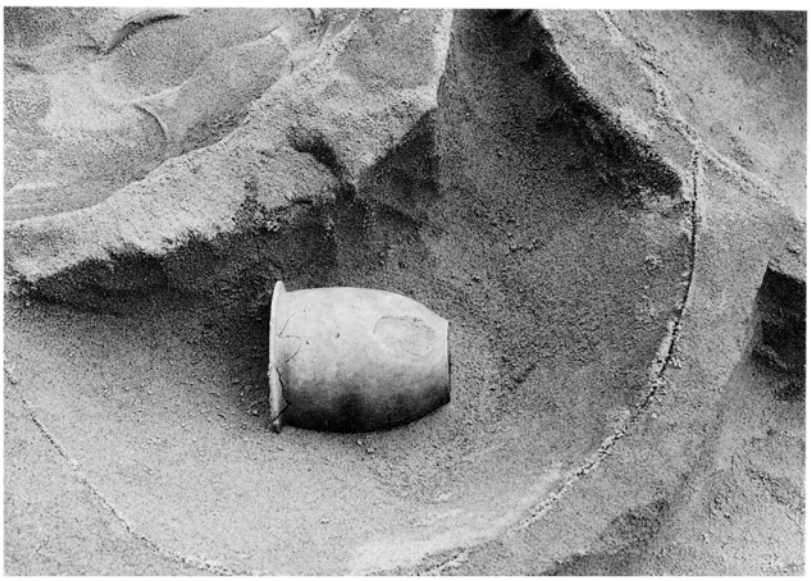
(2) 214号甕棺墓(南より)



(3) 215・218号甕棺墓(東より)

(1) 217号甕棺墓(東より)

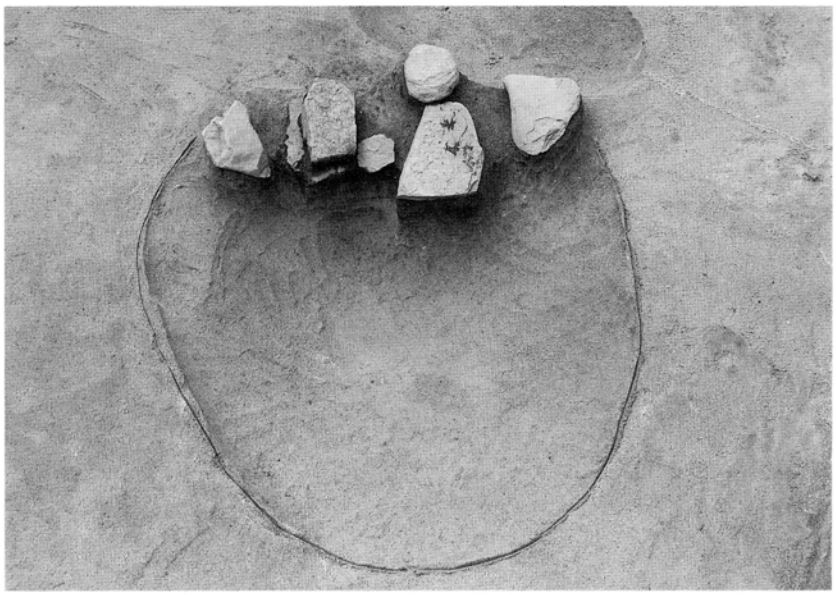
(2) 219号甕棺墓(西より)



(3) 220号甕棺墓(東より)

PL.13

(1) 205号土坑墓(西より)



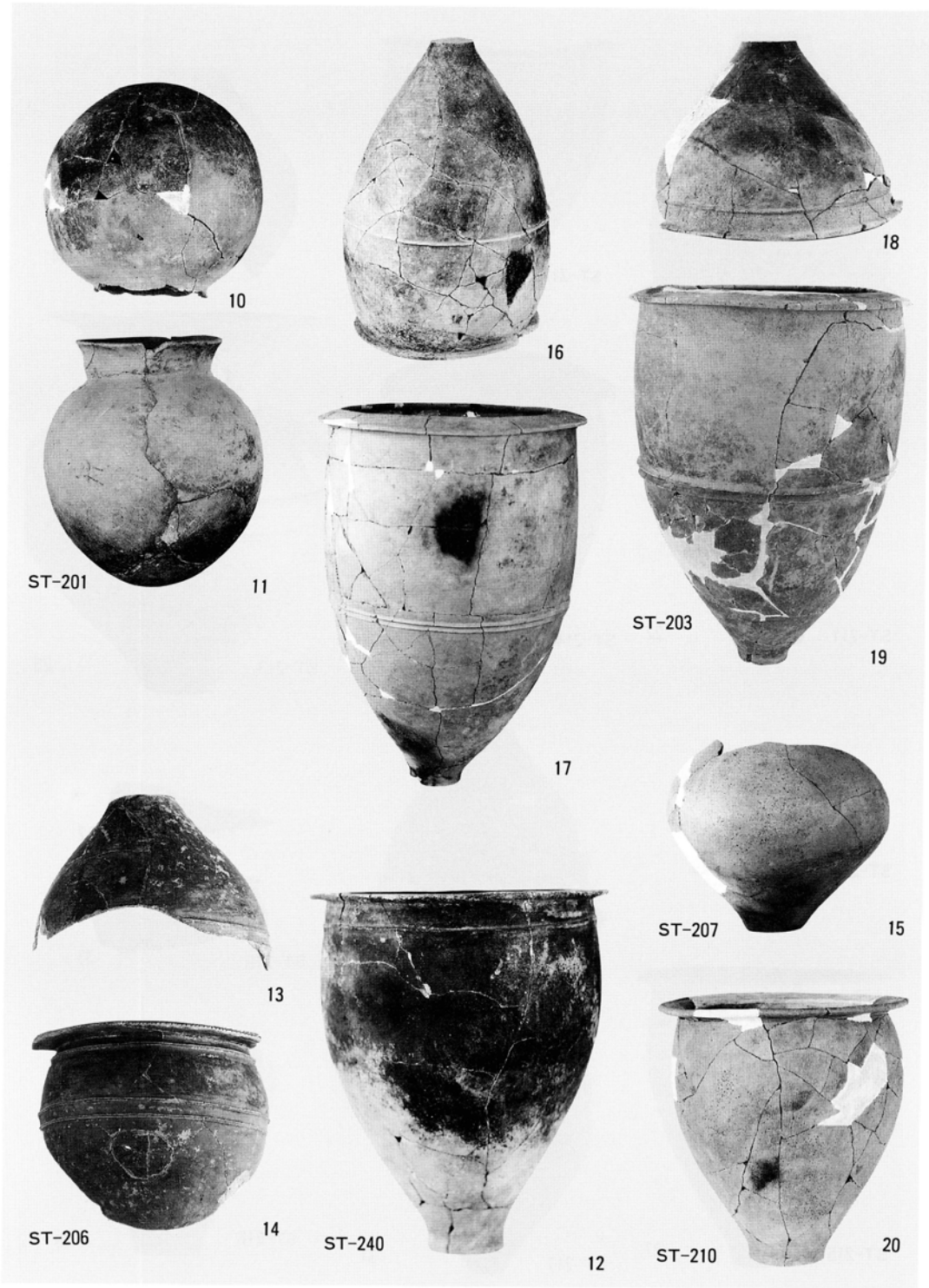
(2) 208号土坑(南より)

(3) 222・223号土坑(西より)

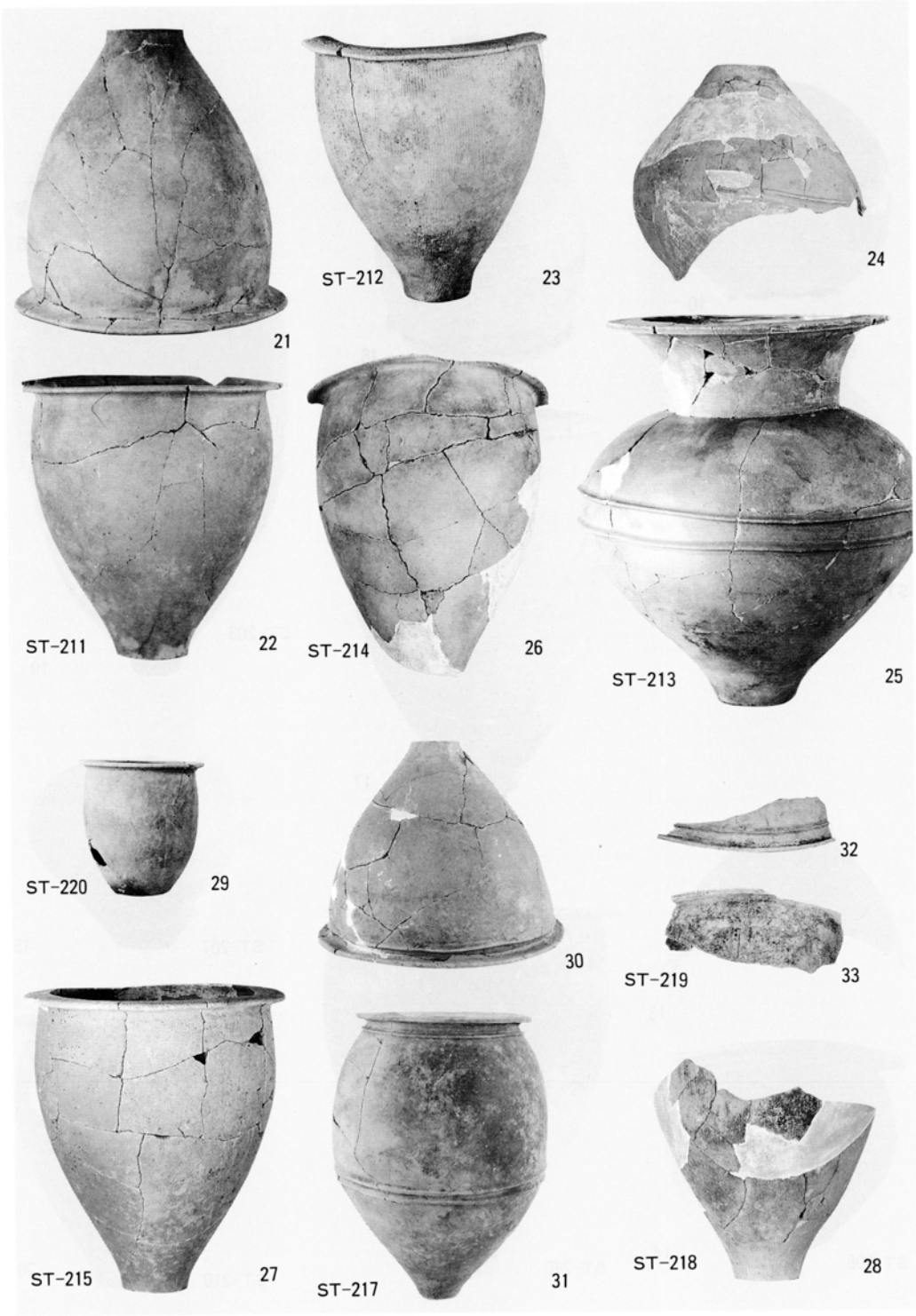
(1) 209号溝(東より)

(2) 221号溝(東より)

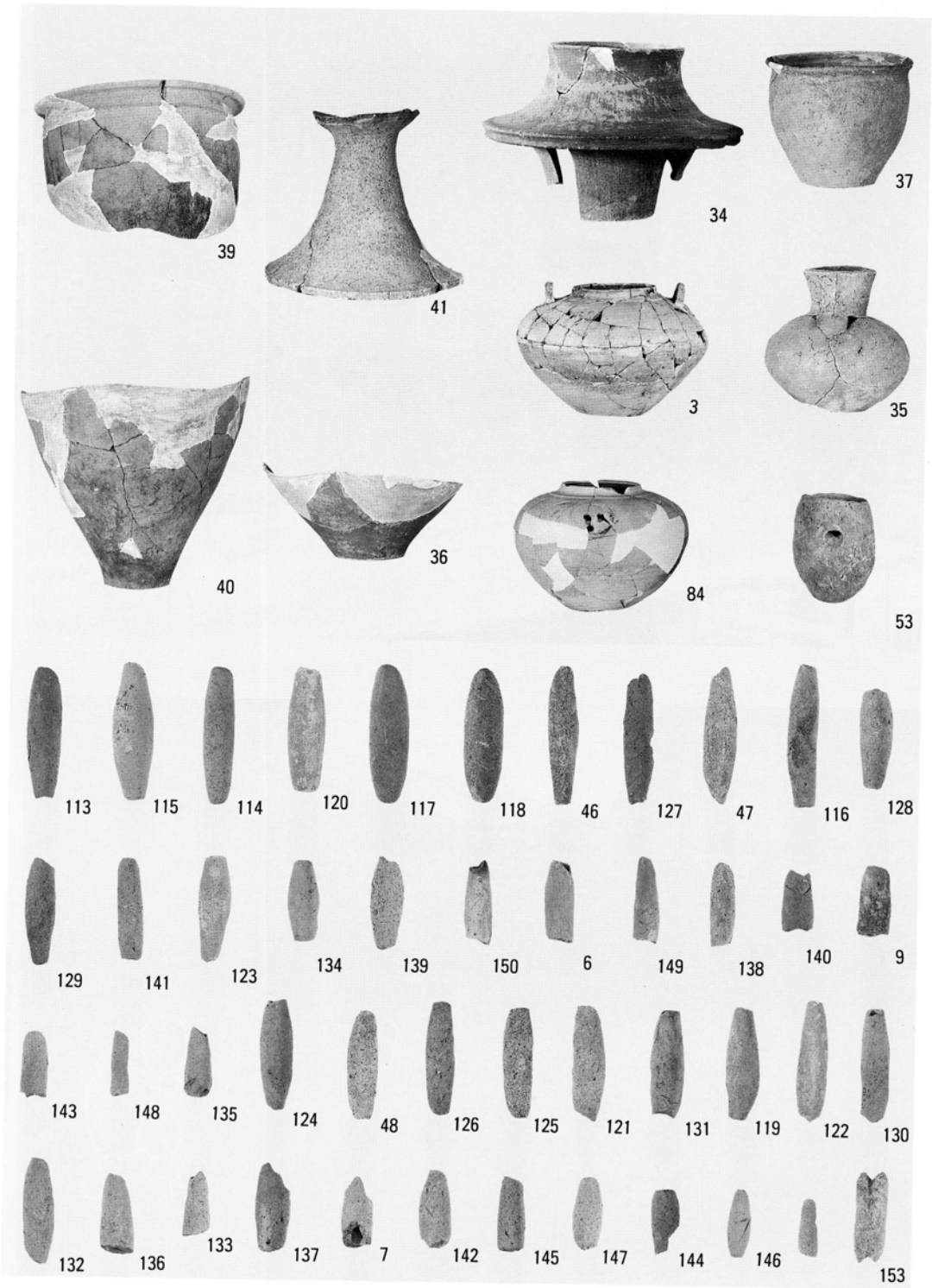
(3) 221号溝西壁土層断面(東より)


10
16
18
ST-201
11
17
ST-203
19
13
ST-207
15
ST-206
14
ST-240
12
ST-210
20

出土甕棺


21
ST-212
23
24
ST-211
22
ST-214
26
ST-213
25
ST-220
29
30
32
ST-219
33
ST-215
27
ST-217
31
ST-218
28

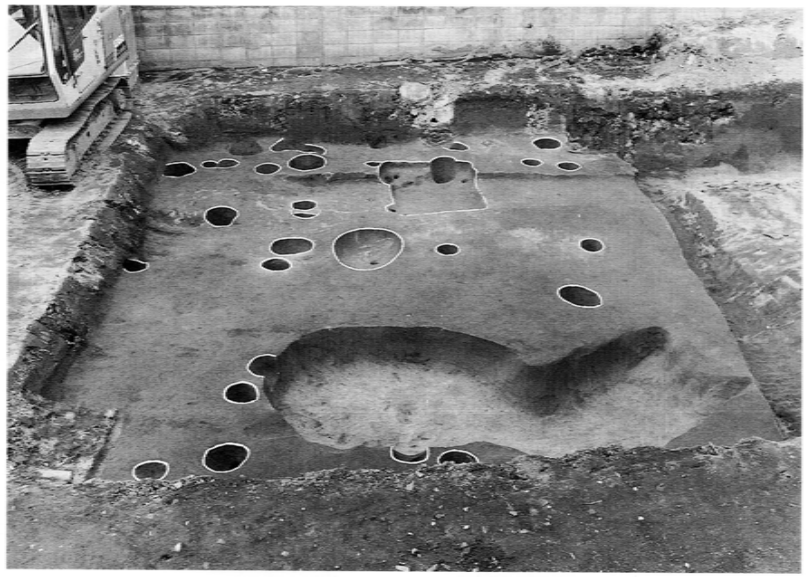
出土甕棺


39
41
34
37
3
35
40
36
84
53
113
115
114
120
117
118
46
127
47
116
128
129
141
123
134
139
150
6
149
138
140
9
143
148
135
124
48
126
125
121
131
119
122
130
132
136
133
137
7
142
145
147
144
146
153

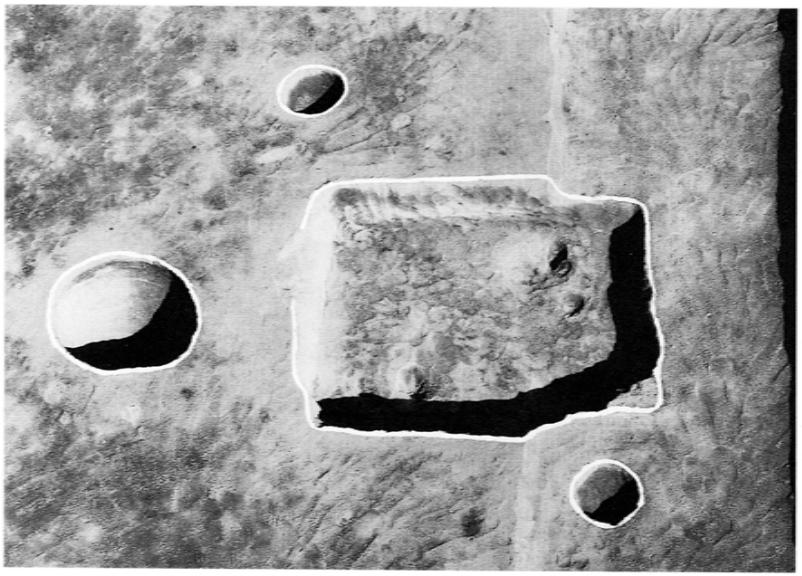
出土土器、土錘

(2)調査区東側下面

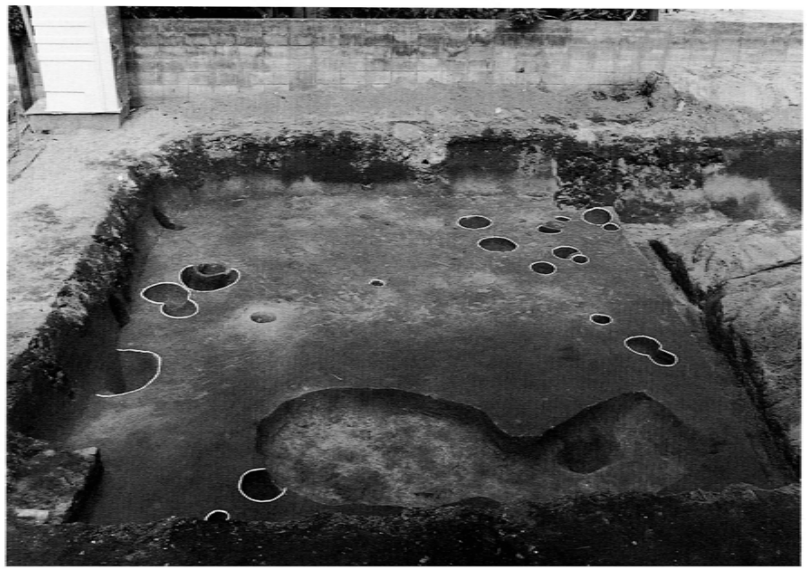
(1)調査区東側上面

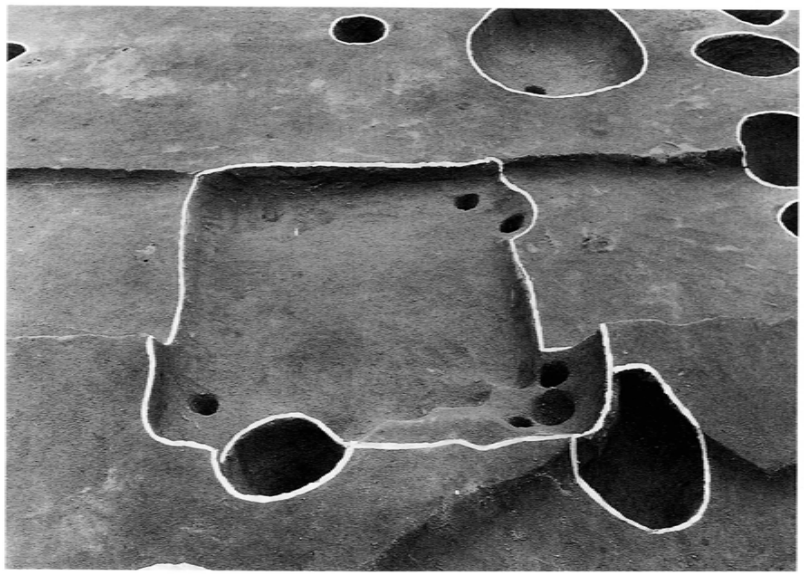


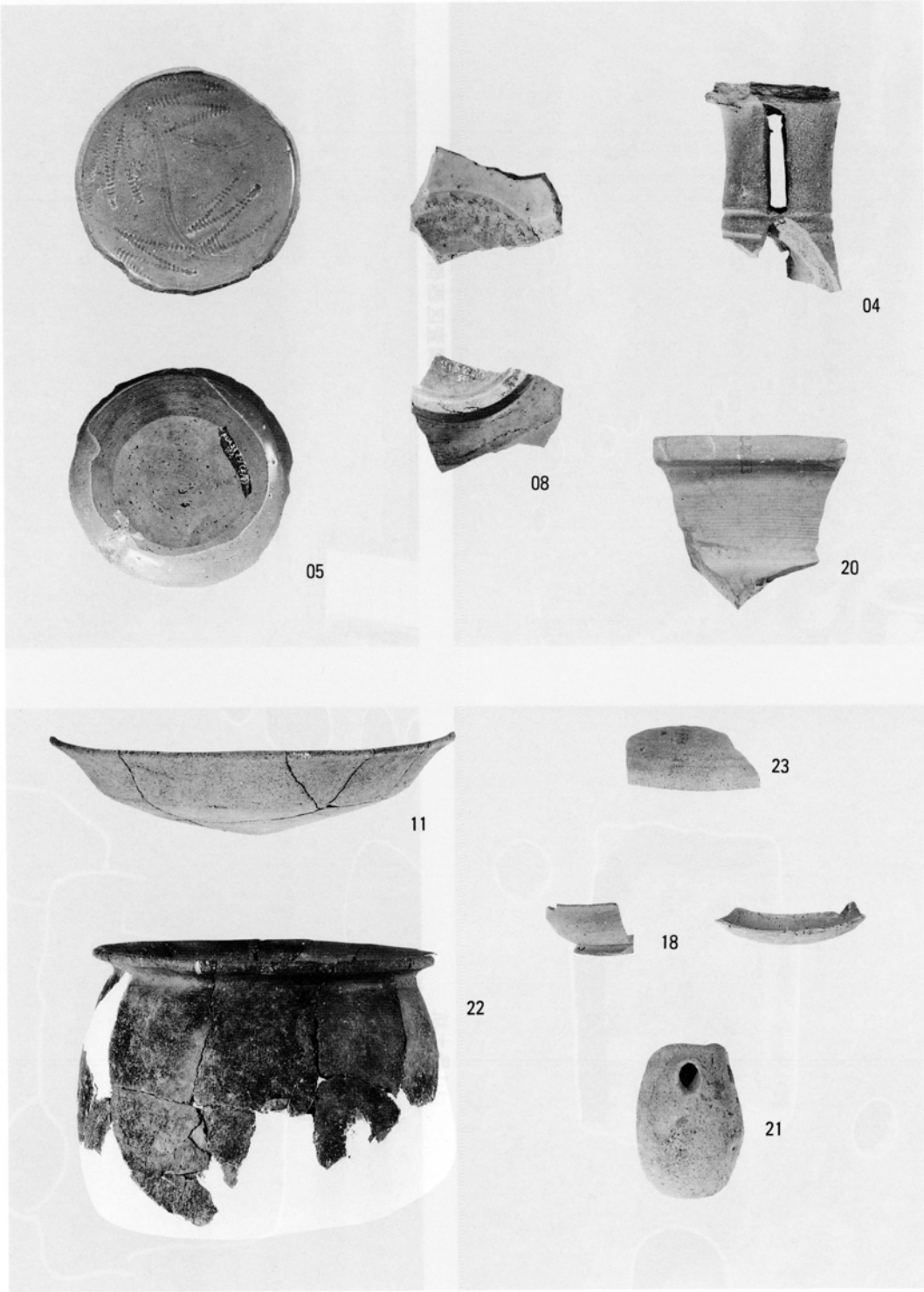
(1)調査区西側上面



(3)1号土坑







出土遺物

藤崎遺跡 9

福岡市埋蔵文化財調査報告書第376集

1994年（平成6年）3月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8－1
(092)771－4667

印　刷　祥文社印刷株式会社
福岡市博多区博多駅南4－15－17
(092)411－1611